

年報

平成 21 年度



Oita University of Nursing and Health Sciences  
公立大学法人大分県立看護科学大学



## 平成 21 年度年報発刊に寄せて

本学では、自己評価の一環として、開学以来、年報を発刊してまいりました。

毎年、欠かさず発刊するという事は、教職員たちの意気込みとマンパワーが必要とされます。しかし、教職員個人あるいは大学組織としての教育研究、社会貢献等の実績を着実に記録し、保存しておくことは費やしたマンパワーに見合うだけの効果があると自負しております。最近では、ウェブで登録し、電子媒体として残すことにより、効率的に発刊する努力をしております。

本学の平成 21 年度のトピックスは、厚生労働省の「チーム医療の推進に関する検討会」の報告書で、医師の包括的指示の下で、「特定の医行為」を実施できる「特定看護師（仮称）」が提示されたことです。平成 20 年に、大学院修士課程看護学専攻に実践者「NP コース」を設置して以来、NP（ナースプラクティショナー：診療看護師）の制度化に向けて、社会医療法人大分岡病院と共同しての「特区」の提案を含めたさまざまな活動をしてまいりましたが、「特定看護師」の提案により、大学院で教育した看護職の業務拡大・裁量範囲拡大への大きな一歩が踏み出された感激しております。NP 養成教育を開始した当時の医療界・看護界等の社会の反応に比べて、たった 2 年足らずの間に社会が大きく変化したことは、チーム医療推進の必要性、看護職の能力の活用の必要性を社会が求めた結果であると、前向きに受け止め、今後の展開にさらなる期待を寄せております。

昨年（平成 21 年）7 月に、保健師助産師看護師法の教育に関する項目が、60 年以上ぶりに改正されました。これは、看護師、保健師、助産師の専門性を強化するための教育の質の向上が求められているからだと思っております。各看護系大学では、この法改正を、具体的に実現することを真摯に検討する必要があると思っております。そこで、本学では、この法改正を、平成 23 年度に可視化できる形で実現することを決定し、現在、準備を進めております。具体的には、学部教育の中で、看護師の基礎教育を充実させ、保健師、助産師の教育は大学院修士課程で実施することにより、それぞれの看護職の専門性を強化した教育を、合理的、効果的に行っていこうと考えております。

本学では、開学以来、「自律的な」看護職を育成することを目指してきました。今後も、この目標を具体化するための活動を、関係者の理解を得つつ継続していく予定です。ご支援、ご協力をよろしく申し上げます。

平成 22 年 3 月

理事長/学長

草間 朋子

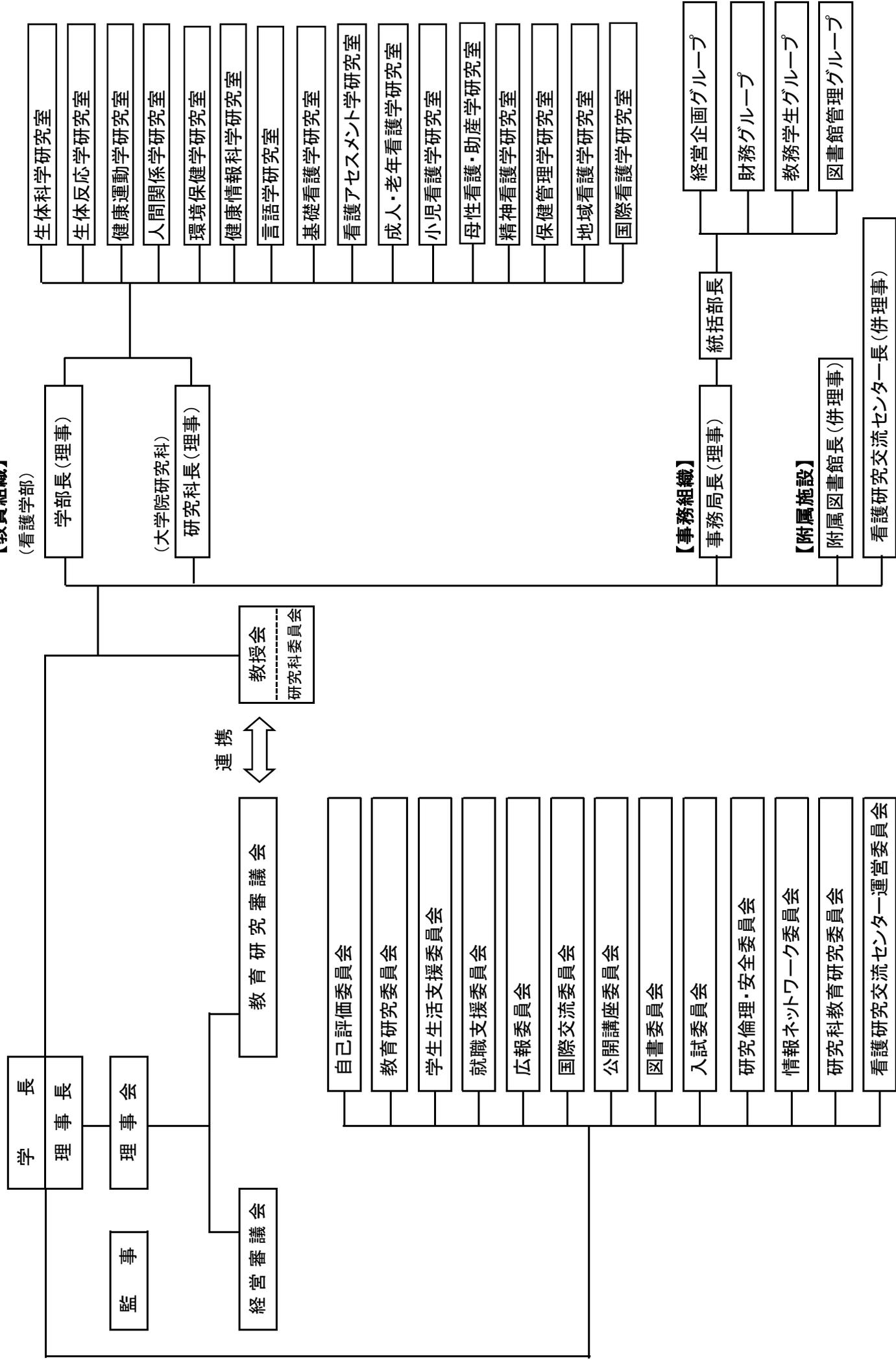


## も く じ

1.	委員会／ワーキンググループの活動	2
2.	学内行事の概要	25
3.	教育活動	29
4.	学内セミナー	100
5.	学内プロジェクト研究	101
6.	先端研究	103
7.	奨励研究	105
8.	インターネットジャーナル「看護科学研究」	107
9.	業績	108
10.	地域貢献	116
11.	助成研究	127
12.	各種研究・研修派遣	130
13.	学外者の受入	132
14.	教職員名簿	133



# 大 学 組 織 図



## 【教員組織】

(看護学部)

学部長 (理事)

(大学院研究科)

研究科長 (理事)

## 【事務組織】

事務局長 (理事)

統括部長

## 【附属施設】

附属図書館長 (併理事)

看護研究交流センター長 (併理事)

## 1 委員会／ワーキンググループの活動

### 1-1 理事会

委員 理事長：草間 朋子  
理事：市瀬 孝道、甲斐 倫明、安部 陽子（以上、学内理事）  
杉村 忠彦、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。本年度は5回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項、重要な規程の制定又は改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

なお、理事会委員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから、経営審議会と同時に開催した。

### 1-2 経営審議会

委員 草間 朋子（理事長）、市瀬 孝道、甲斐 倫明、安部 陽子（以上、学内理事）、杉村 忠彦、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）、古賀 和枝、佐藤 誠治、森 哲也、高山 龍五郎（以上、経営審議会委員）

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。本年度は5回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち法人の経営に関するもの、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規程の制定又は改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価などについて審議した。

なお、理事会委員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから、理事会と同時に開催した。

### 1-3 教育研究審議会

委員 草間 朋子（学長）、市瀬 孝道（学部長）、甲斐 倫明（研究科長）、三船 求真（学外委員）、各研究室代表者、各委員長、安倍 陽子（事務局長）、各事務グループリーダー（事務局）

本委員会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行なうことである。本年度は13回の教育研究審議会を開催し、各種委員会報告と中期目標・中期計画に関する事項、学則の改正、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規程等について審議し、決定を行なった。各回の教育研究審議会の議事内容は理事会にて報告された。

#### 1-4 教授会

構成員 草間 朋子（学長）、市瀬 孝道（学部長）、各教授、准教授、講師、安倍 陽子（事務局長）

本委員会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行なうことである。本年度は5回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定および学生の表彰（学長賞、卒業研究の優秀賞、学生賞）に関する事項について審議し、決定を行なった。教育研究審議会で審議・承認された休学、復学、退学、進級判定についての事項は教授会で報告された。

#### 1-5 研究科委員会

構成員 草間 朋子（学長）、甲斐 倫明（研究科長）、各教授、各准教授、各講師

本委員会の役割は、大学院の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、修了、その他在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項などの審議を行うことである。なお、その他在籍に関する事項のうちの、休学、復学、退学については教育研究審議会で審議し、本委員会に報告することとしている。

本年度は6回の研究科委員会を開催し、大学院入試の合否判定、課程修了に関する事項などについて審議した。休学、復学、退学については教育研究審議会から報告を受けた。

## 1-6 自己評価委員会

構成員 佐伯 圭一郎、伴 信彦、吉田 成一、大賀 淳子、赤星 琴美、後藤 一昭

### FD活動

1) 新任教職員を対象にした研修を計画通りに実施した。2) 海外短期研修に3名を派遣した。3) 6名の教員を国内件数に派遣した。4) ケアリング・アイランド九州沖縄構想による本学独自のFD研修会・講演会を3回、CSD(臨床実習指導者)研修会を2回実施した。5) 大分大学からのFD講演会(ティーチング・ポートフォリオFD講演会)のTV会議システムによる配信を試行し、8名の教職員が参加した。6) 大学評価・学位授与機能の自己評価担当者研修に2度、延べ8名の自己評価委員会メンバーが参加した。7) 全学教員を対象とした「科学研究費補助金申請講習会」を企画、実施し、申請未経験の教員への情報提供と、競争的外部資金申請に向けての全教員の意識向上を図った。8) 大分大学で実施された学術振興会担当者による「科研費講演会」に本学教職員23名が参加した。平成22年度科学研究費補助金申請状況は、新規申請44件、継続13件であった。

### 授業評価

学生による授業評価を継続的に実施した。健康科学実験の授業評価アンケートについては、オンライン化の試行としてPCもしくは携帯電話からの回答を実施した。項目を見直し、2年次と4年次の終了時のそれぞれ本学の教育に関する総合的な評価アンケートをこれまでの項目の大幅見直しを行って、実施した。

また、授業アンケートの結果のうち、講義に関する教授技術の項目で高い評価を受けた教員を公表し、次年度において教員同士の授業参観を推進することを決定した。

### アニュアルミーティング

平成21年度のアニュアルミーティングを3月24日に開催した。プロジェクト研究、先端研究、奨励研究の成果報告を含む全18演題が発表された。

### 年報

平成20年度年報を編集し、学外HPに公開した。

### 人権啓発・ハラスメント防止

教職員を対象とした人権研修会、学生を対象としたオリエンテーション、教科内での人権・モラル教育、ハラスメントに関する教育を実施した。また人権相談窓口を設置し、学内に対して広報を実施した。

### 大学機関別認証評価

平成22年度に受ける認証評価に向けて、自己評価委員が研修を受けるとともに、自己評価書の作成を行い、平成21年度末でいったん自己評価書を取りまとめ、検討を行った。

今後の課題は以下の通りである。

- 1) 平成22年度の大学機関別認証評価に向けて、自己評価書の完成およびさらなる自己評価体制の充実をはかる。
- 2) 授業評価システムのオンライン化の試行を拡大し、効果を評価するとともに、評価結果をさらに活用するための方法として、高い評価を受けた教員の授業の相互参観を実施する。
- 3) 本学独自のFD活動だけでなく、ケアリング・アイランド九州などの連携事業による他大学主催のFD研修プログラムへの積極的参加などにより、FDプログラムの内容と機会の拡大を推進する。

## 1-7 教育研究委員会

構成員 市瀬 孝道、佐伯 圭一郎、甲斐 倫明、宮崎 文子、李 笑雨、藤内 美保、小野 美喜、柳井 幸雄（事務局）、梅木 満長（事務局）

本委員会は学生の教育を効果的かつ円滑に行うために教育関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。本年度は13回の教育研究委員会を開催した。1)本年度の国家試験対策に関しては、国試の補講を例年と同じく12月上旬に行い、模試については例年どおり国試直前まで実施、また国試終了直後に国家試験対策に関するアンケート調査を実施した。2)看護実習（第1段階～第5で段階）に関しては、実習全体の日程を調整し、教員や学生配置等を検討・実施した。実習関連WGに関する活動内容は別途記述した内容によって看護実習の充実を図った。3)平成22年度学部生の助産学選考に関しては、WGが中心となって、口頭試問（実技含む）による選考を行い、4月の第2回教育審議会にて承認を得た。4)卒業研究に関しては、例年どおり3月末に各研究室の卒論研究テーマを収集し、指導・調整を行なった。また研究・倫理安全委員会と連携して、調査研究フィールドが重複しないように調整した。例年どおり卒業研究関連の2つのサポートグループ（SG）を設置し、SGは卒業研究発表会要旨集と卒業研究論文集の作成、卒業研究発表会のサポートと、平成21年度の各研究室学生配置、看護研究の基礎Ⅰの講義のサポート（テキスト作成も含む）等の実務を行った。5)大分大学との遠隔講義（単位互換科目）では佐伯教授による「生物統計学」の講義を後期より毎週水曜3限に15回にわたって実施し、選択科目の法学入門では大分大学の二宮教授によるe-ラーニング方式を取入れて8コマで行なった。6)平成20年度の保助看指定規則改正に伴ってカリキュラムの見直しを行い、本年度入学生より新カリキュラムを実施した。7)4年次生を対象とした総合人間学の開講にあたっては講師の選定と企画を行い、全8回の講義を実施した。本講義は地域住民に対しても公開講義としており、外部からの参加も多く見られた。8)進級試験は、進級試験WGによって試験問題を選別し平成22年3月1日に実施した。再試験は平成22年3月9日に実施し全員合格した。9)研究予算関連では昨年に引き続きプロジェクト研究、先端研究、奨励研究を予算化し、プロジェクト研究1件、先端研究5件と奨励研究5件を採択して大学の研究の推進・活性化を図った。10)短期海外派遣研究員に関しては、本年度も教員3名を海外の大学に派遣し、教員の研究の活性化を図った。11)平成21年度前期・後期の科目等履修生及び平成21年度の研究生の募集を行ったが、本年度も応募者はなかった。12)本学は現在2つの戦略的大学連携支援事業に参加しており、1つ目は昨年より継続している大分大学が主幹校となる地域連携研究コンソーシアム大分である。本年度は本事業費から競争的研究費を得て、現在2テーマの研究が進められている。また、本年度より活動が開始された教育連携事業では運営企画委員会が立ち上がり、県内の他大学と連携して進学説明会が実施された。戦略的大学連携支援事業の2つ目は、今年度より開始された福岡県立大学・看護学部が主幹校となるケアリングアイランド九州沖縄構想である。本学では本年度3回のケアリングFD企画と2回のケアリングCSD企画を実施した。また、本学が講義の相互受講体制小部会の幹事校となり、また学生コンソーシアム小部会では本学が副幹事校となり、それぞれ大賀講師と宮内講師が担当し活動を行なった。13)教育研究委員会が担当する平成21年度の年度計画に関しては、全て遂行し、100%達成することができた。

来年度の計画としては、平成23年度より学部から保健師教育及び助産師教育を廃止するため、平成22年度では看護師教育の新々カリキュラムを作成し、平成23年度より実施する。また、現在の2年次生、3年次生で実施している旧カリキュラムや本年度1年次生より開始された新カリキュラムに関して、実施上問題があれば本委員会で随時改善して行きたいと考えている。遠隔講義に関しては来年よりを廃止して大分大学の講義をオンデマンド配信する予定としている。

## 1) 国家試験対策WG

構成員 宮崎 文子、梅野 貴恵、福田 広美、石田 佳代子、小嶋 光明、高波 利恵、坂口 隆之、石岡 洋子、梅木 満長

平成21年度の国家試験対象者は94名であった。看護師・助産師不足の折から全国からの求人は約25,000人と驚くほど多く、今年度も目標を高くし、保健師・助産師・看護師国家試験合格者を100%をめざし国試WGを8回行った。教員・学生の対策委員は丸となり役割分担をきめ9月より精力的に対策の計画を実施した。具体的活動は、9月に国試ガイダンスを行い、年間計画を示し学生の自覚を促した。模試の計画に基づき学内模試（看護師1回、保健師3回、助産師5回）、業者模試（看護師9回、保健師5回、助産師4回）を実施し、その結果を分析し、成績不振の学生には個人面接3～4回行い、折にふれて学生への激励をし、国家試験へのモチベーションを喚起した。さらに弱点教科の補講を強化した。特に必須問題への補強として2年次生の進級試験内容（解剖・生理）を4年次生に対し実施し、基礎科目部分の強化を図った。しかし3職の合格率は100%に及ばなかった。看護師の合格率は100%（全国89.5%）であったが、保健師7名不合格で合格率92.1%（全国86.6%）、助産師4名の不合格で合格率75%（全国83.1%）であり、保健師は全国平均を上回ったが助産師は全国平均に満たなかった。来年度はさらに対策方法を充実させ、3職の合格率100%を目指して頑張りたい。

## 2) 実習代表者会議

構成員 市瀬 孝道、藤内 美保、江藤 真紀、小野 美喜、影山 隆之、桜井 礼子、志賀 寿美代、高野 政子、林 猪都子

今年度より、実習代表者会議を開催することとした。主に実習の単位認定に関する事、実習責任者としての判断を共有することが望ましいことについての検討を行った。

今年度は新型インフルエンザに関わる実習施設との交渉や、実習運営に関わる事項の取り決めの周知徹底を図った。また第4段階実習では成人・老年、小児、母性、精神看護学領域をセットにして単位を修得することとなったので、横の連携を図るためのルールも決めた。代表者会議により、意思決定がスムーズにでき、連携がとれて効果的であった。

### 3) 実習関連WG

構成員 桜井 礼子、藤内 美保、赤星 琴美、小野 さと子、小野 美喜、桑野 紀子、関屋 伸子、  
田中 美樹、津隈 亜弥子

#### I. 活動の概要

実習関連WGは、教育研究委員会のもと、看護系研究室からそれぞれ1名を選出し、月1回の定例会議を開催し主に実習に関連し以下の活動を行った。

1. 実習センター及び各領域の実習施設の実習環境の整備等
2. 実習に関連する文書等の見直し  
実習ガイドブック/個人情報取り扱いに関するガイドライン/事故対応マニュアル等
3. 看護技術修得プログラム（第1段階～第3段階）の企画・運営・評価
4. 総合実習の企画・実施
5. 実習関連予算の管理
6. 今年度の取組み

#### II. 具体的な活動と評価

##### 1. 実習センターの運営・管理および各実習施設の整備

実習センターの管理については、教員用の実習センター利用細則の見直しを行った。また、各段階の実習担当者との連携を図りながら、実習センター施設および物品の管理等を行うとともに、領域別の実習施設についても学生の実習環境の整備を行った。今年度は、新たな実習施設であるアルメイダ病院に、学生が使用できるパソコン・コピー機等の整備を行った。

##### 2. 実習に関連する約束事等

###### 1) 実習ガイドブックの作成

2009年度版の実習ガイドブックを、第4段階の地域実習のオリエンテーションに間に合うように4月中旬に完成、600部を印刷した。今年度より各段階実習施設一覧およびアルメイダ病院の概要を追加した。2010年度の実習ガイドブックは2月に見直し、作成準備を行っている。

###### 2) 個人情報取り扱いに関するガイドラインの見直し

電子カルテの取り扱いについて実習施設と事前に調整しておくことを追記した。また、実習施設に対する本学の誓約書の雛型を作成し資料として追加した。

###### 3) 事故対応マニュアルの見直し

事故発生時のフローチャートの見直しを中心に行った。学生の事故報告書の統一と提出経路の検討を行い、事故発生時の対応に関して、関係する事務局、保健室、教員間での共通認識のための働きかけを行った。

###### 4) インフルエンザへの対応について

学生へのインフルエンザ対応へのマニュアルを作成し、学生の健康管理への意識づけや、教員への速やかな連絡など周知徹底した。またインフルエンザ予防のための対応や発生時の対応について実習施設と協議して合意を得て実習を行った。実習中は、病院の責任者や指導者と教員が情報交換を密に行い、病院での院内感染が起こらないように対処した。

実習センターや各実習施設には、マスクや手指消毒用薬、ペーパータオル、清掃用の消毒薬などの物品を準備した。

##### 3. 看護技術修得プログラム（総合看護学、技術チェック）の企画・実施

###### 1) 第1段階：3年次対象「4段階実習前技術チェック」

9月1週目（8月31日～9月2日）に実施

課題事例や担当教員が行う評価項目などの見直しを行った。3年生81名の学生は全員、技術チェックを受け、合格して第4段階実習に臨んだ。1回目のチェックで14名が不合格、2回目のチェックで1名不合格だったが3回目で合格した。学生全員、練習期間中はまじめに取り組んでいた。終了後の調査では、多くの学生は技術チェックを受けることで実習への自信につながったが、診療の補助的技術は自信がないと感じていた。今年から使用する物品をグループ毎に管理させ、最終日には実習室の清掃を徹底した。

## 2) 第2段階：4年次対象 「総合看護学」 後期前半（10月～11月）の月曜

総合看護学は、例年通り、医療・保健の現場において遭遇しやすい6事例（小児、母性、急性期、慢性期、ターミナル、在宅）を用いてそれぞれの課題にそってグループワークを行い、その成果をロールプレイにて発表した。各グループともグループワークは熱心に取り組んでいた。発表のロールプレイの場面では、教職員が患者役等をつとめ、予測しない反応が返ってくる場面もあったが、学生は対象を理解しようとし、またその場の状況を判断し、適切な看護ケアを展開することができていた。また、発表後のディスカッションで学生の発言も見られ、事後の学生レポートも多くの学びを表出することができていた。さらに、ロールプレイ終了後、患者・家族役をした教職員の方々から、どんな気持ちがあったのかといったコメントをもらうことで、学生自身が対象の思いを改めて知る機会となっていた。

今後は、新カリキュラムにおける単位認定化を目指して、総合看護学のあり方を検討する必要がある。

## 3) 第3段階：4年次対象 「卒業前技術チェック」 2月末国試後～3月（時期は学生と調整）

今年度は、全ての技術項目に関して「技術チェック評価表」の見直しを行った。より臨床現場に近い方法を取り入れたとともに、チェックを受ける学生が、それぞれの項目の中で全ての技術を網羅できる内容に変更した。

また、事前に学生に対して、自身が受けた技術項目のアンケート調査を実施した。従来の静脈血採血、点滴静脈注射、筋肉内注射の3項目に加え、「看護技術習得確認シート」からの技術も選択肢に加えた。事前にチェック項目を決定したことで、4年次生が習得したい技術に対して、モチベーションを持ちながら集中して練習やチェックに取り組むことができた。

## 4. 総合実習の企画・実施

平成21年度は、6月22日（月）～7月3日（金）までの2週間で、学生数は76名であった。実習施設は、学生数が増えたこともあり、新たな実習施設として3施設（黒木記念病院、大分岡病院、健康保険南海病院）を開拓、また大分こども病院を加え、46施設であった。担当教員27名、専任教員4名の体制で指導にあたった。今年度は、初めて総合実習の指導を担当する教員も多く、実習準備の段階から専任教員との連携が重要であった。

平成22年度は、3施設が病院の統合や建て替え等のために受け入れができない施設があり、実習施設は43施設である。学生数は70名で、平成22年2月にオリエンテーションを実施した。担当教員と専任教員の連携に関しては、教員マニュアルに学生の実習目的の共有などの項目を追加した。

## 5. 実習関連予算の管理

今年度、特別に大きな予算が必要となったものは、新型インフルエンザ対応のためのマスクや手指消毒剤、基礎・アセスメント学実習で新たな実習施設となったアルメイダ病院の控え室などの整備、看護技術習得確認シートの印刷費などである。学内実習室の整備費、学内演習で使用する教材費、実習センター整備費、各実習施設で使用する消耗品、実習ガイドブック印刷費、実習用ファイル（学生用）は例年通りの使用状況である。予算の使用状況を見ながら、メンテナンスや備品の交換、備品の購入を行った。

## 6. 今年度の取組み

### 1) 看護技術修得確認シートの活用と評価

今年度から全学年に導入した。学内実習および実習中に自己の技術の習得度を確認できる媒体として活用されている。活用度については、実習が終了した3年次生への活用度についてアンケート調査を実施した（2月末）。また、卒業時点でどの程度技術習得ができているかを、4年次生に調査を行った（2月末）。この結果をもとに、来年度は活用促進のためのシート改善、学生教員への働きかけを行う。また、大学卒業時の到達度の継続評価を行う。

### 2) Webページの活用（看護学実習に関する資料の提示）

学内WEB「看護学実習」ページが有効活用できるよう、看護技術習得プログラムおよび領域別実習に関する関連文書を掲載し、資料の一元管理化に向け作業を進めた。各技術習得プログラム・領域別実習のマニュアルや報告を当ページに掲載し、定期的に情報更新できるように体制を整えていく予定である。

### 3) 臨地実習における教員（担当教員・専任教員）と臨地実習指導者の役割分担について見直し平成

10年度に作成した、臨地実習における教員と臨地実習指導者の役割分担について、見直しを行った。基本的事項については特に変更せず、実習の段階や領域により、アレンジをして使用することとした。

### Ⅲ. 次年度の取り組み予定

- ・ 新カリキュラムに対応した「看護技術修得プログラム」の習得レベルと評価方法
- ・ 看護技術習得確認シート（看護師用）の改善と活用について
- ・ 新カリキュラムに対応した各段階実習（特に総合実習）のあり方について

## 4) 進級試験WG

構成員 小野 美喜、佐伯 圭一郎、定金 香里、岩崎 香子、桑野 紀子、田中 佳子

進級試験オリエンテーションを7月17日に実施し、夏季休暇から試験学習ができるよう動機づけた。教員に試験問題の作成を依頼し、回収後は難易度の検討や内容の重複の整理しながら本試験・再試験の2試験を作成した。3月1日に本試験を実施し、採点結果18名が不合格となった。継続した学習の資料とできるよう、希望者に個人票を返却し、学生それぞれの学習不足領域を示した。3月9日再試験を実施し全員が合格した。また、問題作成担当者へは、今後の教育活動につなげられるよう試験結果をフィードバックした。来年度は今回の国家試験出題方式の変更に応じた問題の作成を検討するとともに過去の問題のデータベース化をすすめる。

## 5) 助産学選考WG

構成員 林 猪都子、佐伯 圭一郎、梅野 貴恵、吉村 匠平、伊東 朋子、軽部 薫

4月16日に平成22年度助産学実習履修許可者の選考を行った。教育研究審議会の審議を経て11名に履修が許可された。

## 1-8 学生生活支援委員会

構成員 林 猪都子、関根 剛、宮内 信治、乾 つぶら、河野 梢子、菅野 信子、柳井 幸雄、児玉 美穂

学生の大学生活を充実させるための環境整備をする、学生に必要とされるサポートをタイムリーに提供することを目標に下記の活動を展開した。

### 1. 学生関連イベントの企画・運営

全学生オリエンテーション（4/8）、新入生オリエンテーション・宿泊研修（4/9、4/10）、コンタクトグループ（4/8）（グループ編成・広報）、全学スポーツ交流会（アルティメット、全学生・教職員への実況中継）、キャンパスクリーンデー（5/13）（コンタクトグループにて作業場所を配置）などを行った。

### 2. 学生相談

各学年担任を中心に学生相談業務を行った。内容は相談（ハラスメント相談窓口）、学習相談（単位取得、進級に関するもの）、休退学・復学相談と面談（保護者面談を含む）、過年度、休学中の学生支援などを行った。

### 3. 学生の自主活動への支援

サークル活動支援、若葉祭における実行委員支援、自治会活動支援、新入生歓迎会参加などを行った。

### 4. 経済支援

奨学金による経済支援（日本学生支援機構の奨学金支給など）、奨学金情報の収集、周知活動などを行った。

### 5. 健康支援

学生の健康管理支援（集団健康診断、抗体検査、ワクチン接種勧奨、個別相談）、禁煙教育（禁煙希望学生に対する禁煙相談）、学生の保険関係の支援（加入手続き事務、退学・休学者の返還・追加、事故・病院の入院、退院の補償請求に関する支援など）について保健室保健師を中心に行った。新型インフルエンザへの対応マニュアルを作成し、学生に周知、罹患学生への対応（担任・保健室）、ワクチン接種の対応などを行った。

### 6. 交痛安全推進

交通安全指導の実施（自動車講習会 5/9・自動二輪実技講習会 7/18）、通学許可面接（通学許可交付面接、交通事故対応の指導）、学生が被害・加害者となった場合の交痛事故対応（一人暮らしの学生を中心に担任が対応）、車場管理（許可シールの交付、無許可利用者・違反者への対応）、交通事故データベースの作成などを行った。

### 7. 学生生活に関する調査・広報

学生生活実態調査（質問紙作成、実施、集計、報告書の作成、公開）と喫煙実態調査（質問紙作成、実施、集計、報告書の作成、公開）についてネコバスを使用して実施した。学生への広報活動、学生への情報発信のあり方の検討（ネコバス利用の検討）などを行った。

### 8. その他

新人教員オリエンテーション（4/1）、九州地区公立学生部長会議参加（9/18）、大学コンソーシアムおおいたへの委員派遣、ケアリングアイランドへの委員派遣、行事ポスター作成、学外者クレーム対応、学年進行に伴うクラス替え、教職員への学生に関する相談などを行った。

## 1) 新型インフルエンザWG

構成員 市瀬 孝道、河野 梢子、志賀 壽美代、吉田 成一、菅野 信子、錦戸 正  
外部委員：三舟 真人

本委員会は新型インフルエンザ対策のマニュアル作成を目的に平成21年度4月にWGとして発足した。危機管理別新型インフルエンザ対応マニュアル、新型インフルエンザ対応マニュアル（冊子）、新型インフルエンザ対応フローチャートを作成した。これらのマニュアル（案）は平成21年6月の教育研究委員会と、6月の理事会・経営審議会にて承認された。また、新型の豚インフルエンザが4月より流行し始めたため、本WGは新型インフルエンザ対策室として位置けられ、新型インフルエンザ対策本部が設置させる迄の情報収集と、大学ホームページの学生ページnekobusに情報提供すると共に、県との連絡体制やマスク・消毒薬の整備等の活動を行なった。

### 1-9 就職支援委員会

構成員 宮崎 文子、田中 美樹、大賀 淳子、松本 初美、軽部 薫、小嶋 光明、梅木 満長

就職支援委員会（11回）では、県内就職率50%を目指し、学生の就職を支援し年間計画に沿って活発な活動を行った。具体的には、全国からの求人訪問対応（65件）、就職ガイダンス（2回実施）、県内就職説明会（29施設）の企画・運営・実施、就職・進学ガイドブックの利用状況調査、模擬面接（学生のニーズに合わせた定期模擬面接3回、臨時模擬面接7回：79名の実施）、学生の個別支援、全国からの就職状況を閲覧できるように整備し、併せて学生個人個人に全国の求人情報をメールで発信、また在学生のみならず、卒業生に対する支援（情報提供）も行った。特に在校生に対しては各委員が2～3の研究室を担当分担し細やかに支援した。今年度の求人数は全国約25,000人、うち大分県577人である。卒業予定者は大学院生を含めて94名（うち学部の進学者2名）であり、全員が1月の時点で就職・進学を決定した。職種別人数は、保健師4名、助産師13名、看護師74名である。県内外就職率は、大分県内43名（46.2%）で目標を達成、県外49名（53.3%）である。

## 1-10 広報委員会

構成員 高野 政子、稲垣 敦、安部 眞佐子、梅野 貴恵、井伊 暢美、徳永 一裕

- 1) 若葉祭：第11回若葉祭の開催では、学生の企画・運営の相談や支援を行い、教員イベントの企画・調整を実施した。昨年度10周年記念であったので、平成21年度は「NEW WAVE 新たなる出発」をテーマに5月16、17日の2日間で開催した。ステージイベントでは〇×GAMEや腕相撲などを行い、2日目は風雨が強くなったため、お笑いライブは初めて講堂で開催した。300席はほぼ満席状態であった。参加者は2日間で約1000名であった。
- 2) オープンキャンパス：昨年度のアンケート結果を確認し、平成21年度の企画を検討した。日程は昨年の参加者のアンケート結果で夏休み最初の3連休中日の希望が多かったため、7月19日（日）に開催した。午前と午後の部で過去最高の282名の参加者であった。午前の部は200名を超えており、九州、山口、四国などの県外の受験生とその家族と一緒に参加できる日程であったことが今年の傾向で、参加者が増えた要因と考える。説明会・体験イベントなど教職員全員と学生40名で取り組んだ。食堂も参加者が利用できるようにした。教育・研究の展示は研究棟1Fの廊下にパネル展示を吊下げ形式で統一した。また、6名の教員研究を掲示した。学生自治会によるTAKIOソーランや合格体験講演や教員による模擬授業3講義は好評であった。在校生による相談コーナーや実習室への移動の誘導等にも協力していたので、高校生や保護者には入学後の学生イメージをもつことができたと思われる。
- 3) 地域ふれあい祭り：平成21年度の地域ふれあい祭りは、初めての試みとして8月8日大分市主催の大分七夕祭り、チキリンばやし市民総踊り大会に参加する方法で、県民との交流と本学の広報を目的として開催した。当日の参加者は教職員30名と学生40名の70名であった。最初に、午後15時から17時まで竹町ドーム広場で健康チェックを実施し約250名の測定や進学相談を行った。夕方18時から21時までは少雨の中、女子学生や看護系教員は浴衣姿もあでやかに、男性教職員や男子学生は大学法被姿で練習して臨んだチキリン踊りを披露した。
- 4) 出張講義：高校からの医療系大学に進学希望者を対象とする出前授業、特に看護や臨床現場の話を希望する出張講義の依頼を受け、助教以上の教員に依頼・調整を実施した。下記以外に1件依頼があったが前日インフルエンザ休校となり中止となった。竹田高校（6/26）、臼杵高校（7/8）、鶴崎高校（7/9）、日田高校（8/27）、大分西高校（10/21）、大分豊府高校（12/18）、高田高校（2/18）。
- 5) 大学見学：オープンキャンパスに参加できなかった高校生や保護者の大学見学等の希望者、申し込みに随時対応した。10/21 別府青山高校の教員1名と2年生13名が本学に来学し、基礎看護学が模擬授業を行い、その後に学内見学を実施した。その他個別の見学、訪問があり対応した。
- 6) 大学オリジナルグッズの作成：大学グッズは広く大学を知ってもらうために、オープンキャンパスでの配布や韓国やウズベキスタン国、米国などの諸外国の方々や、学外よりの招聘講師へのお土産として作成をしているが、できれば学生などが気軽に購入できるような仕組みを検討した。その結果、大学ロゴ入りマグカップは、国際特許事務局に商標登録したので、今後はデザインを使用した食器や陶器製品など作成し、売店内で販売することが可能となった。その他、新しいデザインの大学英名入り風呂敷（50枚）、大学写真入りクリアファイル（1000枚）を作成した。
- 7) 富士見ヶ丘団地への協力：富士見ヶ丘団地自治会からの依頼で、横瀬小学校で開催された第36回富士見ヶ丘団地運動会（10/26）において、広報委員4名と学生5名で健康チェックと実施した。
- 8) 学外Web：①学外Webは昨年度のソフト変更により新規の記事が随時更新が順調に行われた。教員の研究紹介は10件行った。②学外Webには随時学内のイベントや大学行事の案内等を掲載した。
- 9) 英文Web：12月に平成21年度の国際フォーラムのテーマ、卒業研究発表会の課題の変更など修正した。
- 10) メールマガジン：年に4回、登録された会員にメールマガジンを配信した。
- 11) マスメディアによる広報：本学に関する新聞、テレビ、ラジオ等に情報提供や取材依頼を行い、記者及び取材に対応した。

今後の課題：1) 大学マスコットを検討する。2) 動画による公開講座の配信について、検討する。3) 新聞等マスメディアへの広報活動および掲載記事を確認する担当者が不在であり、本学に関連する記載記事の収集もれが多いので、対策を検討する必要がある。4) 広報すべき記事を委員会で集約できていないため、事後になっており、次年度は各委員会より広報に関連した情報を集めるように通知する必要がある。

### 1) 大学案内パンフレットWG

構成員 江月 優子、小嶋 光明、樋口 幸、薬師寺 綾、徳永 一裕

平成21年度版の大学パンフレットは5月の若葉祭前に納品され若葉祭以降、大学行事や入試説明会等で配布し活用した。10月の委員会で平成21年度のWGの立ち上げを行い、4名の教員と委員会より徳永委員がメンバーとして参加して、他の委員も印刷会社の選考などを行っている。5月の若葉祭までに納品することを条件として進めている。

### 2) 学外WebWG

構成員 品川 佳満、岩崎 香子、渡邊 寿子、佐藤 みつよ

学外Webサイトの情報の更新・掲載（大学案内、入試・入学案内、イベント案内・報告など）および管理・運営を行った。サイトは、1日約700～800人のアクセスを記録している。

### 3) 英文WebWG

構成員 G. T. Shirley、岩崎 香子、佐藤 みつよ、渡邊 寿子

昨年度末からデータの移行や新しい掲載情報の選定作業を行い、全面的なホームページのリニューアルを行った（2009年4月1日公開）。掲載内容は、本学の紹介や学部教育・カリキュラム、大学院教育、国際交流、NPプロジェクトなどについて計18項目である。どの項目に関しても海外の利用者を重視した内容とした。また、学内行事の報告掲載を随時行い、常に最新の情報が閲覧できるようにした。新サイトには、各種情報が見つけやすいようバナーやサイト内検索機能も設けた。

## 1-11 国際交流委員会

構成員 G.T. Shirley、伊東 朋子、李 笑雨、高波 利恵、福田 広美、後藤 一昭、神崎 正太

国際交流委員会が平成21年度に行った活動は以下のとおりである。

### 1) ソウル国立大学校派遣学生受け入れと交流

ソウル国立大学校看護大学から大学院生2名の長期派遣（6月21日～7月5日までの2週間）、学部生5名、教員1名の短期派遣（6月21日～28日までの8日間）を本学に受け入れる予定であったが、新型インフルエンザの動向を元に両校で協議した結果、今年度のソウル国立大学校派遣学生受け入れは中止となった。

### 2) 本学の学部生および大学院生の派遣

大学院生2名を長期派遣（8月16日～8月30日まで2週間）、学部生6名と同行教員2名が短期派遣（8月24日～30日まで8日間）としてソウル国立大学校看護大学に派遣する予定であったが、新型インフルエンザの動向を元に両校で協議した結果、今年度の本学の学生派遣は中止となった。

### 3) 第11回看護国際フォーラムの開催

大分県看護協会と共催である看護国際フォーラムを本年は「ターミナルケア」をテーマに、平成21年10月31日（土）に別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。オーストラリアから1名、韓国から1名、国内から1名の講師を招聘した。参加者は381名と盛況であった。

### 4) 第9回NP国際会議の開催

平成21年10月10日（木）に、本学にて、第9回国際会議をNPプロジェクトと協力して開催した。米国ミシガン州のサギノー バレー 州立大学から1名を講師として招聘した。

### 5) 第12回大分看護科学大学・ソウル大学研究交流会の開催

今年度はケアリング・アイランド九州沖縄構想第3回FD企画と第10回NP国際会議として、「NPコースのプログラム評価について」をテーマに、平成22年3月17日に本学23講義室で開催した。米国カリフォルニア州立大学校サンフランシスコ大学および韓国慶北国立大学校看護大学から1名ずつの講師を招聘した。

平成21年度の計画を具体的に踏襲した計画を検討する予定である。基本的には、学生の国際的視野の育成と教員の研修の質のさらなる向上のため、国際交流の機会と内容を検討するよう試みる。そして、毎年、看護国際フォーラム後にアンケートを実施し、大分県内の看護職のニーズに沿ったテーマを選んで開催し、地域貢献にもつなげる。

## 1-12 公開講座委員会

構成員 菅野 公浩（4/1～7/31）、平野 亙、赤星 琴美、関屋 伸子、定金 香里、佐藤 恭子

「くらしの安全と健康」を共通テーマとする有料公開講座（受講料500円）を4回開催した。各回の題目は「災害に強い地域づくりをめざして－災害看護の役割を通して－」、「サプリメントはイワシのアタマ?」、「知っておきたい! こどもの救急処置」、「はじめての介護技術－楽しく学ぶ食事の介護－」、会場はいずれも学内講義室ないし実習室で、のべ受講者数は41名であった。また今年度からの新しい試みとして、講座終了後に学内見学を実施し希望者を募ったところ、計25名が参加した。

広報の手段として、従来通り地域自治会や公民館を中心とする周知方法のほか、高等学校保護者への広報も実施したが、参加者はポスター・チラシのほか、HP・メールや新聞などの媒体から情報を得ていた。

シリーズ企画の講座とは別に、若葉祭で無料公開講座を実施した（5/16-17）。テーマは、「100万語英語多読講座」、「簡単な理科実験」で、のべ参加者数は63名であった。

次年度も学内における4回シリーズの有料公開講座および若葉祭での無料公開講座を実施するほか、別途学外会場での実施を企画している。より有効な広報手段の確立が今後の課題であり、次年度以降も引き続きポスター・チラシを媒体とした自治会等への広報を行うほか、マスコミや行政機関等の協力による広報を強化する方針とした。

## 1-13 図書委員会

構成員 志賀 壽美代、江藤 真紀、吉村 匠平、梅野 貴恵、石田 佳代子、小野 永子、牛島 聡子、大久保 圭

定期的に委員会を開催し、報告と議題の検討を行った。

報告は、九州地区大学図書館協議会公立大学部会総会（4月）、公立大学図書館協議会総会（8月）、大分県大学図書館協議会総会（9月）についての情報交換および協議を行った。今年度は特に、日本看護図書館協議会の幹事、大分県大学図書館協議会の監査の役割を担当した。

以下中期計画にそった今年度の実施状況である。

1) 図書委員、各研究室の教職員、学生からの希望図書、業者からの見計らい図書などを委員会で検討し、教育・研究上必要な一般書籍・雑誌・各種新書シリーズの選書購入を系統的に行った。特に大学院NP教育課程の教育に必要な図書も計画的に整備した。

2) 本学図書館の各種図書の選定や保存について「資料整備方針および整備要項」を作成した。

3) 本学で開催された公開講座などのDVDを整備・保存し、貸し出しをしている。

4) 本学所蔵の図書の中から学生の勉学に役立つ書籍紹介を教員が行い、毎月HPに掲載し閲覧を推奨している。

5) 学生支援委員会の「21年度学生実態調査」を元に、図書利用調査の次年度に向けた取り組みを検討した。

6) 昨年度作成した図書・雑誌の情報検索システムを利用するためのマニュアルについて学生に役立っているか調査中である。

次年度は以下について取り組んでいく

1) 図書・雑誌の情報検索システムの利用マニュアルの周知を図ると共に、学生が利用しやすい図書館ホームページの整理を行う。

2) 学生生活支援委員会と連携して本学図書館の利用に関する具体的な調査を行う。

## 1-14 入試委員会

構成員 構成員は非公開としている。

本委員会は、平成21年度に実施した入学試験に関するすべての事項について審議し、入学試験を統括した。広報委員会と協力して、入学試験に関する広報活動を行った。入学試験の個人成績の開示内容について、学生募集要項の記載を改善した。新型インフルエンザの流行に鑑み、試験室・要員の配置や、体調不良者の扱い等について検討し、感染拡大および受験者の不利益を最小限にするための対策を行った。特に、一般入試（前期・後期）については今年度限りの特例として、一定の条件を充たす体調不良者に追試験の機会を準備した。

引き続き、年度計画に沿って、入学試験のあり方の検討、および高校訪問・進学説明会などによる広報を行っていく。

## 1-15 研究倫理・安全委員会

構成員 吉村 匠平、平野 互、大賀 淳子、福田 広美、岩崎 香子（以上、学内委員）、西 英久（大分大学）、二宮 考富（大分大学）（以上、学外委員）、高橋 秀也（事務局）

本委員会は、本学教員及び学生が行う研究について倫理・安全面の審査を行っている。今年度は、延べ107件の研究計画について審査を行った。卒業研究の審査に関しては、教育研究委員会と連携し9月までに審査を終了した。前年度委員会より引き継いだ、大学院修士課程における課題研究の扱いについては、研究責任者を院生とすることとし、研究計画の申請に関する手引きを改訂した。webからの申請情報の入力、印刷物の事務局への提出に関し問題が散見されたため、マニュアルを作成し手引きを改訂した。また、新規に提出する研究計画で過去に受理された研究計画と同様の研究方法をとる場合の取り扱いについて、手引きを改訂した。

研究倫理、安全の確保に必要な事項が遵守されるよう、今後とも、教員・学生の意識を高めると同時に、必要に応じて研究計画の申請に関するルールの見直しなどを進める。

## 1-16 情報ネットワーク委員会

構成員 稲垣 敦、品川 佳満、伴 信彦、伊東 朋子、坂口 隆之、小野 麻梨子

本学の情報ネットワークの管理運用を継続的に実施した。また、情報セキュリティや教職員のICTスキル向上のための活動、教材作成室やメディアセンターの機器の管理を継続した。WGは昨年度3つに集約したため、作業の効率も上がった。特に今年度は来年度実施を予定している教務システムと図書館システムの更新について検討し、予算案を作成した。また、DHCPサーバを更新して学内のICT機器を登録制にするとともに、教職員がウィルス対策ソフトを各自のパソコンにダウンロードできるようにする等、セキュリティを向上させた。さらに、昨年度、試験運用を開始した卒業生と教職員を結ぶnekobusの正式運用を開始し、機能向上を図った。

今後の課題は以下のようである。

- 1) 教務システム及び図書館システムの更新
- 2) DHCPサーバ更新に伴うICT機器の登録
- 3) 学生所有パソコンの学内無線LAN利用環境の整備

## 1) ネットワークシステムWG

構成員 品川 佳満、小嶋 光明、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎

サーバ群（WWW、メール、グループウェア、ファイル、計算機など）およびネットワーク全般（インターネット・イントラネット）の管理・運営を行った。メールサーバ、ファイアウォールについては、更新を行った。また、情報ネットワークセキュリティ強化のためのシステムを導入した。

## 2) WinユーザーサポートWG

構成員 坂口 隆之、伊東 朋子、河野 梢子、小野 麻梨子

学内に配置しているWindows PC（教職員、情報処理教室、教材作成室・メディアセンター、看護研究交流センター、CALL用ノートなど）の管理を行った。内容は、トラブル対応、システムやソフトウェアのバージョンアップなどである。

## 3) MacユーザーサポートWG

構成員 小嶋 光明、伴 信彦

教職員用および学内に設置しているMac PCの管理（トラブル対応、システムやソフトウェアの更新）を行った。

## 1-17 研究科教育研究委員会

構成員 甲斐 倫明、高野 政子、林 猪都子、関根 剛、柳井 幸雄、梅木 満長

大学研究科の運営および計画に関する次の事項について審議・実施した。

- 1) 大学院生の指導教員体制の管理および研究指導状況の把握を行った。
- 2) 研究計画報告会、研究中間報告会の企画・運営を行った。
- 3) 22年度から開設する管理者コースのカリキュラム作成を行った。
- 4) 県内の医療機関8施設を訪問し、管理者コースの設置や健康科学専攻についての広報を行った。
- 5) 長期履修制度をNPコース以外のすべての大学院生に適用できるように修正し、規程をさらに詳細に取り決めた「長期履修規程の取り扱いに関する申し合わせ」を作成した。
- 6) 22年度大学院募集要項の作成、シラバスの作成を行った。
- 7) 大学院生の研究費の使途について検討し、調査および研究発表のための旅費にも使用できるようにした。
- 8) E-learningのメリットとデメリットについて検討し、導入する際の課題について整理した。
- 9) 課題研究のすすめ方について検討し、研究テーマの例やまとめ方について述べた「修士課程課題研究について（参考）」をまとめた。
- 10) 大学院の概要とコース別の特徴などを説明した広報用のQ&Aおよびパンフレット案を作成した。
- 11) 保健師と助産師の大学院化について検討し、問題点や解決すべき点などを整理した。その結果、23年度から大学院化することで決定し、WGを設置し、カリキュラム作成を行った。
- 12) NPコースの教育については、NPプロジェクトグループと連携し、制度化や教育内容の改善に関する取組みを実施した。

## 1) 保健師助産師大学院教育カリキュラム検討WG

構成員 甲斐 倫明、藤内 美保、林 猪都子、佐伯 圭一郎、江藤 真紀、赤星 琴美、桜井 礼子、  
平野 亙、柳井 幸雄

平成23年度入学生から保健師・助産師の教育を大学院に移行することの決定を受けて、大学院教育にふさわしいカリキュラムを検討し、作成した。保健師は、「地域社会の健康づくりの組織者」、助産師は「性と生殖にかかわる助産の実践者」という基本となる養成する専門職像の下に、備えるべき能力を明確にし、それらの能力を育成するのに必要なカリキュラムを作成した。

## 1-18 看護研究交流センター運営委員会

構成員 桜井 礼子、小野 美喜、秦 さと子、関屋 伸子、田中 美樹、安部 陽子、錦戸 正、甲斐 倫明、草間 朋子（オブザーバー）

### 1. 地域貢献・地域交流事業に関すること

#### 1) 看護職者等を対象として研究支援・技術支援のための講師派遣

##### (1) 大分県看護協会の事業への協力

①臨床実習指導者講習会 ②看護研究 ③看護力再開発講習会 ④訪問看護基礎研修 ⑤訪問看護ステップⅠ、ステップⅡ ⑥小論文の書き方、⑦セカンドレベル研修等

##### (2) 大分県専任教員フォローアップ研修への講師派遣（平成21年7月～8月）

大分県より依頼を受け、1週間3コースの研修会を企画・実施し、述べ16名の教員が講師として係った。本学教員にとっては、参加者の看護教員と意見交換をする場ともなり、教育について考える機会となった。

①学生指導力の向上に向けて～学生との関係性の構築を図る～

②教育実践能力の向上に向けて～フィジカルアセスメントの教授法を学ぶ～

③教育実践能力の向上に向けて～看護学生の看護実践能力の向上を図る～

##### (3) その他の講師派遣依頼

派遣依頼としては、病院からの現任看護職への講演依頼がもっとも多かった。特に「フィジカルアセスメント」、「看護過程」、「看護研究支援」等である。その他、保健所が主催する看護職および介護職対象の研修会、社会福祉協議会から介護職研修、養護教諭など依頼先および対象は様々であった。

#### 2) 研究指導等

##### (1) 講師派遣

研究指導は施設からの依頼に対して、年間を通して研究指導の講師2名（人間科学講座から1名、看護系講座から1名）を派遣している。今年度も昨年と同様、6施設に対して12名の講師が派遣された。どの施設も月に1度の直接指導とメールなどで適宜相談に応じる関わりをしてきた。長期間指導を継続することで、全国学会への発表題数の増加などある程度進展がみられる施設もあるが、毎年同じような指導に留まっている施設もある。次のステップとして教育委員や、すでに支援をうけた人が指導的役割をとるなどの施設内でのステップアップができる支援が必要である。

講師派遣施設：大分県立病院、大分赤十字病院、大分市医師会立アルメイダ病院、

国立病院機構大分医療センター 国立病院機構西別府病院、

国立病院機構別府医療センター

##### (2) 統計・情報処理相談窓口の開設

昨年度から引き続き、統計・情報処理相談窓口を月1回開設した。相談件数は1件であった。

##### (3) 研究成果討論会（アニュアルミーティングの公開）

学内研究成果報告会（アニュアルミーティング）を、昨年度より全日公開としており、さらに「地域連携研究コンソーシアム大分」の成果報告の場とし、成果を広く産業界、教育機関に知ってもらう場となることを目指した。地域の看護職者等の参加をホームページ、および主な実習施設、教育機関へ案内を郵送した。学外からの参加者は3名であった。

#### 3) 訪問看護認定看護師教育課程の開講

##### (1) 開講期間：平成21年9月1日から平成22年2月末（6ヶ月間）

##### (2) 研修修了生：10名（平成22年5月、日本看護協会の認定看護師を受験する予定）

##### (3) 主なスケジュールは以下の通りであった。

平成21年5月24日 入学試験（一次）

平成21年7月21日 入学試験（二次）

平成21年9月1日 開講式 講義開始

平成21年12月～22年1月 実習期間（6週間）実習施設 県内4施設/県外4施設

平成22年2月15日13時～ケースレポート発表会（実習指導者会議）

平成22年2月14日 修了試験

平成22年2月26日 修了証書授与式

##### (4) カリキュラムの見直し

平成23年度に基準カリキュラムの改正があるため、次年度に向けて共通科目、専門科目の見直しを行った。また本教育課程の修了生に講師を依頼し、教育内容の充実を図っていく。

#### 4) 認定看護師教育課程公開講義の開催

訪問看護認定看護師の教育コースの講義を公開講義とし、企画した。

テーマ：訪問看護の役割とその活動-病院と地域をつなぐ

講師：川村佐和子氏（聖隷クリストファー大学・教授）

開催日：平成21年10月3日（土）13時～16時

地域の訪問看護に携わる看護職を対象に、認定看護師教育課程の講義を公開講義とした。参加者は、研修生を含め92名であった。アンケート結果では、テーマ、内容ともに満足度が高かった。

## 2. 国際協力・交流事業に関すること

### 1) JICA「看護教育改善プロジェクト」への参加および終了後のフォローアップ

#### (1) ウズベキスタンへの派遣

派遣時期と人数：平成21年6月（2名）、10月（3名）平成22年3月（2名）

#### (2) JICA「看護教育改善プロジェクト」の研修員の受入れ

##### (1) ウズベキスタン中期研修（看護教育コース）7名

研修受け入れ期間：平成21年5月27日（水）～6月8日（月）

##### (2) ウズベキスタン短期研修（管理コース）3名

研修受け入れ期間：平成21年5月26日（火）～29日（金）

#### 3) その他の海外からの研修の受入れ

##### (1) 韓国：Inha University(仁荷大学校), School of Nursing

受け入れ人数：総数18名（GNP, 大学院生13名、教授3名、職員2名）通訳

受け入れ期間：平成21年7月16日（木）～17日（金）の2日間

研修目的：高齢者の保健医療福祉システムの理解と施設見学、学生交流（特に老年NP学生との交流）

##### (2) 韓国：Chung-Ang University(中央大学校), School of Nursing

受け入れ人数：総数14名（GNP, 大学院生13名、教授1名）通訳

受け入れ期間：平成22年2月22日（月）～23日（火）の2日間

研修目的：高齢者の保健医療福祉システムの理解と施設見学、学生交流

## 3. 継続教育事業に関すること

### 1) 卒業への研究支援・技術支援

#### (1) 第5回看護研究交流センターセミナー

平成21年10月18日（日）に開催した。テーマは「がんの臨床」で講師には本学一期生巻野雄介氏に依頼した。参加者は36名で、うち卒業生が16名で、在校生の参加も多かった。①講師が本学の卒業生であること、②開催日を10月にし、在校生が参加できるよう日程調整をしたこと、③メールでの案内を複数回行ったこと、④同窓会の協力を得たことなどが、参加者の増加につながった要因と考える。

セミナー後にアンケート調査を実施した。36名の回答があり、ほぼ全員がセミナー内容、ディスカッション内容を有意義だったと評価していた。卒業生と在校生が交流を図れるセミナーが効果的であったと考える。開催時期については、大多数が今年度の時期を希望していた。

#### 2) 卒業生のためのネットワークづくりと情報発信

卒業生への情報発信、および卒業生の情報交換のためのネットワークづくりのためのサーバーを活用し、情報発信の内容について検討を行った。

## 4. 知的財産・産学官連携事業に関すること

本学における知的財産等を一元的に管理・運営するため、知的財産マネジメント体制を構築した。知的財産本部を看護研究交流センターに置き、そのための関連規程の改正を行なった。また、「利益相反管理規程」を制定するとともに、「利益相反委員会」を設置した。

地域連携研究コンソーシアム大分と連携を図るとともに、産学官共同のためのe-seeds用教員プロフィールを作成し、大学ホームページで公開した。

### 1) 研究支援の講師派遣のあり方の検討

看護研究の支援方法（指導者育成等）のあり方について、支援方法のガイドラインを作成し、指導者育成等の方策をまとめ支援方法の改善を図る。今後、今後必要に応じて、指導者の方々への研修会なども企画していく。

### 2) 卒業生のネットワークづくりと情報提供

卒業生のためのサーバ(nekobus)を利用して、本学が取り組んでいるNP教育、認定看護師教育について、卒業生が関心を持てる内容で情報提供を行う。

## 1) インターネットジャーナルWG

構成員 草間 朋子、甲斐 倫明、G.T. Shirley、桜井 礼子、伴 信彦、稲垣 敦、定金 香里、高波 利恵、小野 さと子

チラシの作成、大学イベント等での広報、「看護科学研究」第8巻第2号および第9巻第1号の審査・編集に関する実務が行われた。第8巻第2号は平成21年12月に刊行し、本学ホームページ上 ([http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/pages/8\\_2.html](http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/pages/8_2.html)) で公開されている。第9巻第1号は4月に刊行予定である。

## 1-19 衛生委員会

構成員 安部 陽子（1号委員）、角 匡幸（2号委員）、江藤 真紀（3号委員）、影山 隆之、柳井 幸雄（以上、4号委員）、菅野 信子（オブザーバー）

平成20年より実施している大学敷地内全面禁煙について、新入生及び新採用教職員等に周知するとともに学外者に周知するために、看板を引き続き設置した。

## 1-20 評価委員会

構成員 市瀬 孝道（学部長、理事）、甲斐 倫明（研究科長、理事）、安部 陽子（事務局長、理事）、宮崎 文子（特任教授）

- 1) 平成20年度に実施した教員評価の方法を継続して行うことを教育研究審議会で承認した。
- 2) 平成21年度の教員評価を1月に実施し、評価結果を2月に各教員に配布した。

教員評価のあり方と評価結果の利用については今後も継続して検討していく。

## 1-21 NPプロジェクト

構成員 藤内 美保、草間 朋子、安部 陽子、江藤 真紀、小野 美喜、甲斐 倫明、桜井 礼子、高野 政子、田中 美樹、林 猪都子、福田 広美、宮内 信治

NPプロジェクトは平成21年度年度計画に基づき以下のような活動を行った。

### 1. 老年NPおよび小児NPの大学院教育

1) 1期生3名（老年NP）、2期生5名（老年NP4名、小児NP1名）の教育を実施した。平成20年度の教育内容を見直し改善を行った。また新たな開講科目について、非常勤講師と連携をとりながら教育内容の検討を行い、教育を実施した。今年度より小児NPの教育を開始した。

2) 演習・実習用の機材として、高機能シミュレーター、エコー、訪問用フィジカルアセスメント用具一式などの様々な演習・実習用器材を整備した。

### 2. 実習施設の開発

平成22年度に実習が初めて開始されるにあたり、実習施設の開拓を行った。包括的健康アセスメント、看護的治療マネージメント（薬剤処方を含む）についてプロトコルを実習施設の医師と共同で作成した。

### 3. 制度化のための活動

1) 特区提案は年に2回行われる。6月に13項目、11月に18項目を特区提案した。いずれの回答も対応不可であったが、この特区提案をきっかけに、構造改革特区推進本部評価・調査委員会と規制改革諮問会議による合同会議でヒヤリングを受け、これを受け「チーム医療を推進する検討会」が8月から開催された。11回のチーム医療推進検討会が開催され、第10回（2月）、第11回（3月）の会議で「特定看護師（仮称）」が厚生労働省より提案された。医師の包括指示のもとに侵襲性の比較的高い特定の医療行為を特定看護師が行えるということで、大筋認められた。

2) 日本看護協会、民主党議員、国会議員などとの面談、厚生労働省との面談を通し、NPに対する理解がえられた。特に日本看護協会は1月から日本版NPを創設するという意見表明をした。

### 4. 日本NP協議会の立ち上げ

平成20年度にNP連絡会を立ち上げたが、世間に対して意見表明できるよう組織として協議会を立ち上げた。草間学長を委員長とし、副委員長（2名）：湯沢八江（国際医療福祉大学）、前原正明（防衛医科大学校）、監事（2名）：葉玉哲夫（大分岡病院院長）、山西文子（国立病院機構理事）とした。平成21年3月現在57名の会員として組織され、医師、看護師、看護系教員、薬剤師などの他職種によって構成している。規約およびNP（診療看護師）教育標準化委員会、NP（診療看護師）業務検討委員会などの設置を決定している。

### 5. NP国際会議の開催および「評価」に関する研修会開催

1) 平成22年3月17日第10回NP国際会議を本学で開催した。米国のUniversity of CaliforniaからGerri先生、韓国からKyungpook National UniversityのSoon先生、精神科看護のNPの資格を持っておられる中島緑氏および本学の福田広美講師に「NPコースの学生評価」というテーマで講演を行った。学外からも多くの方が参加され、活発な質疑応答が行われた。

2) 米国のミシガン大学でNPを実践されていたクローズ幸子先生（Kameda Medical Center 医療法人鉄蕉会・経営管理本部）を2回招き「評価」に関する研修会を行った。1回目は平成21年10月10日に講義形式、2回目は平成22年2月6日に講義および演習を含めた事例展開を実施した。本学のNPプロジェクトメンバー、NP学生その他、NP養成を実施もしくは予定している大学関係者の参加者を対象とした。

### 6. NP学生のための初期体験実習（early exposure）の実施

平成21年9月20日～23日（3泊4日）に、2期生5名のNP学生および李先生、藤内が韓国を訪問し保健診療員および、2003年度から制度化されたNPの活動を視察した。保健所、大学病院、コミュニティヘルスセンターなどの施設で活動する保健診療員やNPの活動の実際を見学した講義を聴くことで、今後の学習への動機付けとなった。

### 7. 第29回日本看護科学学会で交流集会開催

平成21年11月28日、千葉県の幕張メッセ国際会議場で開催された日本看護科学学会交流集会において、「大学院修士課程におけるナースプラクティショナー（NP）養成教育のあり方」をテーマに交流集会を行った。本学のNP教育の取り組み、国際医療福祉大学および国立病院機構の取り組みを紹介した。多くの参加者があり活発な質疑応答が行われた。

### 8. パンフレット作成

NPに対する広報活動の一環として、一般者向けのパンフレット、看護職向けのパンフレットをそれぞれ作成し、さまざまな機会に配布して普及活動を行った。

### 9. NP関連の調査の実施

大分県立看護科学大学競争的研究のプロジェクト研究の一環として、無医地区や医療サービスが充実している地域における受診状況やNPの役割に対する期待などの実態調査、看護師を対象としてNPに関する理解、NPの裁量範囲拡大に対する医師の意識調査などを調査した。

平成22年度はモデル事業が開始され、修了生が初めて輩出される。第三者評価が入るため学生のアウトカムを明確にし質の高いNP教育を受けた学生として送り出すための教育を行う。一方で日本NP協議会を進めながら、NP養成コースの教育をしている他大学と密にコンタクトをとり一定の教育レベルを確保することが必要となる。また始めてNP実習を開始するため、実習施設との連携を図りスムーズな実習が実施できるようにする。

## 1-22 健康増進プロジェクト

構成員 稲垣 敦、桜井 礼子、平野 互、江藤 真紀、赤星 琴美 (10.1.23～)

本プロジェクトの目的は、「健康増進に関する研究とそれらの知見に基づいた、あるいは広く健康増進に関する地域貢献を行うこと」である(平成20年度第1回プロジェクト会議議事録)。平成21年度の年度目標は、「51-a. これまでの研究成果に基づいた健康増進関係の情報を地域に提供する」および「52-b-1. プロジェクトメンバーを拡大し、社会に役立つ研究をさらに推進する」であった。今年度を実施した事業を以下に示す。

1. 研究：三次元動作解析を用いた高齢女性の起き上がり動作と腹筋力との関連
2. 研究：高齢女性の体力づくりのための健康関連体力指標を用いた評価項目の検討
3. 研究：自閉症児の体格と生活習慣に関する実態調査：食習慣と余暇活動に着目して
4. 研究：地域高齢者における転倒と義歯との関連
5. 研究：1回の運動の効果
6. 研究：ストレッチの多面的効果
7. 研究：高齢者用体力測定機器を企業との共同開発を開始
8. 地貢：介護予防運動指導を県内各地で開催(大道公民館、豊府公民館、宗方公民館、大分市社会福祉センター、竹田市社会福祉センター、辛幸公民館、木佐上公民館、神崎駅校区公民館、丹生公民館、樺木会館、佐賀関市民センターいこいの家、東野台公民館、一尺屋上浦改善センター、コンパルホール、大分文化会館、賀来新川ツインプラザ集会所、国分台公民館ほか)
9. 地貢：介護予防運動を芝居で指導・普及(みちよくれ劇団と協力、9回)
10. 地貢：トリニータHG観客の健康チェックの実施(九州石油ドーム、9/13、10/18)
11. 地貢：トリニータ介護予防教室に協力(九州石油ドーム、本学体育館、計6回)
12. 地貢：転倒予防教室の開催(野津原、植田地区、計7回)
13. 地貢：第35回富士見が丘団地運動会で健康チェックを実施(横瀬小学校、10/25)
14. 地貢：介護予防運動標準プログラム(大分県版)の普及、実態調査、効果分析(大分県福祉保健部に協力)
15. 地貢：介護予防啓発リーフレット作成(42,000部配布、県福祉保健部に協力)
16. 地貢：介護予防メニューの手引き作成(10,000部配布、大分市社会福祉協議会に協力)
17. 地貢：お元気しゃんしゃん体操のポスター作成(1,000部印刷・配布)
18. 広報：お元気しゃんしゃん体操指導の新聞記事(合同新聞5/28)
19. 広報：日本体育学会第60回記念大会シンポジウムで研究成果を紹介(広島、8/28)
20. 広報：第68回日本公衆衛生学会総会の紹介ブースで活動を紹介(奈良、10/21-23)
21. 広報：若葉祭(パネル展示5/16-17)、大学パンフレットで活動を紹介

## 1-23 看護系全体会議

構成員 草間 朋子（学長）、市瀬 孝道（学部長）、看護系教員全員

1. 看護系全体会議は4月、6月、12月の年3回定例で開催した。

第1回目は、平成21年度実習の教員配置および基礎看護学援助論の支援教員、実習関連ワーキンググループによる看護技術修得プログラムや総合実習について、地域実習や助産学実習に関する説明、基礎看護学・看護アセスメント学実習の報告を行った。また今年度に限り、新カリキュラムに伴い基礎看護学実習を1年次に移行したことから、1月に2年次生の基礎看護学実習、2月に看護アセスメント学実習、3月に1年次生の基礎看護学実習と3月まで実習が予定されている。

第2回目は、実習関連ワーキンググループによる第1段階技術チェックの説明、第2段階（総合看護学）の協力依頼、9月から開始される第4段階看護学実習についての説明が行われた。9月のシルバーウィークの週は1週間休みとした。また成人・老年看護学実習Ⅰ、母性看護学実習、小児看護学実習、精神看護学実習はセットとして考え、1つ以上領域で単位が修得できない場合は、5領域すべての単位は認められないことを確認した。

また新型インフルエンザ対応のための実習マニュアルを作成し学生・教員に徹底した。

第3回目は、保助看法改正に伴う本学の教育方針について、平成23年度より保健師・助産師教育は大学院教育へ移行する方向で検討していること、NP教育について現状報告がされた。また新カリキュラムに伴い、基礎看護学実習が2年次から1年次に実施されることに伴い実習要綱などの変更点や新カリキュラムにおける実習時間の変更も確認した。また平成22年度看護学実習日程が確認された。

新カリキュラムは、今年度、看護アセスメント学実習において実施されるため、変更点を教員に共有することが必要である。また来年度の4段階実習にむけて担当教員配置は綿密な計画を立てる。さらに保健師・助産師の大学院教育に伴い、看護師の4年間の教育が平成23年度より開始されるため、新カリキュラムに応じた実習計画を立てる必要がある。

## 2 学内行事の概要

### 2-1 学年暦

#### 前期

#### 後期

#### 4月

7	入学式
8	オリエンテーション
8,15	健康診断
9	2~4年次生授業開始
9,10	新入生オリエンテーション
9~22	前期履修登録
13	1年次生授業開始
24	全学スポーツ交流会

#### 5月

9	交通安全講座(自動車)
13	キャンパスクリーンデー
11~	地域看護学実習, 老年看護学実習Ⅱ(4年次生)
16,17	若葉祭

#### 6月

15	前期後半授業開始
17	学生大会
~19	地域看護学実習, 老年看護学実習Ⅱ(4年次生)
19	開学記念日(休講)
22~	総合実習(4年次生) 助産学実習・前半(4年次生選択)

#### 7月

~3	総合実習(4年次生)
7~14	初期体験実習(1年次生)
8	交通安全講座(自動二輪・原付)
18	夏期休業開始
19	オープンキャンパス
~31	助産学実習・前半(4年次生選択)

#### 8月

24~	助産学実習・後半(4年次生選択)
29	大学院(博士前期)入学試験
30	編入学(一般・助産学), 大学院(博士後期)入学試験

#### 9月

~4	助産学実習・後半(4年次生選択)
6	夏期休業終了
7~	成人, 老年Ⅰ, 小児, 母性, 精神看護 学実習(3年次生)
30	前期授業終了

#### 10月

1	後期授業開始
1~16	後期履修登録
31	看護国際フォーラム

#### 11月

22	特別選抜試験(推薦・社会人)
----	----------------

#### 12月

1	後期後半授業開始
~4	成人, 老年Ⅰ, 小児, 母性, 精神看護 学実習(3年次生)
11 正午	卒業研究論文提出締切(4年次生)
14,15	卒業研究発表会
23	冬期休業開始

#### 1月

7	冬期休業終了
8~22	基礎看護学実習(2年次生)
15	大学入試センター試験準備(1,3,4年次 生休講)
16,17	大学入試センター試験

#### 2月

5~19	看護アセスメント学実習(2年次生)
25	一般選抜試験(前期)および特別 選抜試験(私費外国人留学生)(休講)
下旬	看護師・保健師および助産師国家試験
26~	基礎看護学実習(1年次生)
26	後期授業終了(1年次生を除く)
27	春期休業開始(1年次生を除く)

#### 3月

1	進級試験(2年次生)
~11	基礎看護学実習(1年次生)
12	一般選抜試験(後期)
18	卒業式

## 2-2 オープンキャンパス

平成21年度は学生自治会によるTAKIOソーラン、お茶会、合格体験談に加え、在校生による相談コーナーや学内の誘導にも協力してもらい参加者と学生の交流の機会を増やすことができた。1)企画趣旨:本学の特徴や取り組み、教育・研究・社会活動、施設等を受験生や関係者を中心に広く紹介するための全学的企画。2)日時:平成21年7月19日(日)、午前の部 10:00~12:30 午後の部 14:00~16:30、3)参加者:282名、4)イベント:(1)大学の概要説明会(講堂)および学生生活報告(学生2名)、入試説明、(2)個別進学相談、(3)模擬授業:対人関係エクササイズの体験学習(30分)、いま求められる看護(30分)、驚くべき赤ちゃんの1年(30分)、CALL体験をしてみませんか?(30分)、(4)体験・見学イベント:血圧測定、衛生的手洗い法の体験、身体の音を聞いてみよう、急性期の看護体験、赤ちゃんの検温と聴診、妊婦体験、赤ちゃん抱っこ体験、赤ちゃんの心音聴取体験、高齢者疑似体験、病原菌と病気の組織の顕微鏡観察、学習を支援する情報環境の体験、原子と放射線の体験型ミニ授業、スポーツジム体験、ニュースポーツ体験、(5)学生関連イベント:TAKIOソーラン:若葉祭実行委員2年+有志、お茶会:表千家茶道部、合格体験談:学生3名、学生相談コーナー:学生5名、(6)パネル展示。

## 2-3 公開講座

一般市民を対象として「くらしの安全と健康」を共通テーマとする有料公開講座を4回実施し、また若葉祭において、ミニ公開講座を無料で開催した。

### 「くらしの安全と健康」

- ・災害に強い地域づくりをめざしてー災害看護の役割を通してー(桜井 礼子;7/1)
- ・サプリメントはイワシのアタマ?(安部 眞佐子;7/7)
- ・知っておきたい! こどもの救急処置(田中 美樹;7/16)
- ・はじめての介護技術 ー楽しく学ぶ食事の介護ー(濱田 佳代子;7/22)

### 「若葉祭」ミニ公開講座(5/16および5/17)

- ・100万語英語多読講座(宮内 信治)
- ・簡単な理科実験(岩崎 香子、岡崎 寿子、佐藤 みつよ)

## 2-4 第11回看護国際フォーラム

大分県看護協会と共催である看護国際フォーラムを本年は「ターミナルケア」をテーマに、平成21年10月31日(土)に別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。オーストラリアから1名、韓国から1名、国内から1名の講師を招聘した。参加者は381名と盛況であった。

## 2-5 第9回NP国際会議

平成21年10月10日(木)に、本学にて、第9回国際会議をNPプロジェクトと協力して開催した。米国ミシガン州のサギノーバレー州立大学から1名を講師として招聘した。

## 2-6 第12回大分看護科学大学・ソウル大学研究交流会

今年度はケアリング・アイランド九州沖縄構想第3回FD企画と第10回NP国際会議として、「NPコースのプログラム評価について」をテーマに、平成22年3月17日に本学23講義室で開催した。米国カリフォルニア州立大学校サンフランシスコ大学および韓国慶北国立大学校看護大学から1名ずつの講師を招聘した。

## 2-7 看護研究交流センターセミナー

第5回看護研究交流センターセミナーを平成21年10月18日（日）に開催した。テーマは「がんの臨床」で講師には本学一期生巻野雄介氏に依頼した。参加者は36名で、うち卒業生が16名で、在校生の参加も多かった。

## 2-8 姉妹校学生交流

ソウル国立大学校派遣学生受け入れと交流：

ソウル国立大学校看護大学から大学院生2名の長期派遣（6月21日～7月5日までの2週間）、学部生5名、教員1名の短期派遣（6月21日～28日までの8日間）を本学に受け入れる予定であったが、新型インフルエンザの動向を元に両校で協議した結果、今年度のソウル国立大学校派遣学生受け入れは中止となった。

本学の学部生および大学院生の派遣：

大学院生2名を長期派遣（8月16日～8月30日まで2週間）、学部生6名と同行教員2名が短期派遣（8月24日～30日まで8日間）としてソウル国立大学校看護大学に派遣する予定であったが、新型インフルエンザの動向を元に両校で協議した結果、今年度の本学の学生派遣は中止となった。

## 2-9 若葉祭（大学祭）

第11回若葉祭の開催では、学生の企画・運営の相談や支援を行い、教員イベントの企画・調整を実施した。2日目は風雨が強くなったため、お笑いライブは初めて講堂で開催した。300席はほぼ満席状態であった。日時：平成21年5月16,17日。テーマ：NEW WAVE 新たなる出発、来場者数：約1,000名。1. ステージイベントに関しては、学生が企画して運営した。ゲームやお笑いライブ、バンド演奏、各種コンテストなどがあり、学生や教員の親睦に役立った。学生が開催する健康チェックを教員が指導した。2. 公開講座は、100万語英語多読講座、簡単な理科実験を開催した。3. 教員と学生のコラボイベントとして、実習室や講義室を使用して、以下を開催した。4. 健康チェック、救急救命体験コーナー、ブーケをつくる、禁煙相談、柚子の力紹介、赤ちゃんだっこ体験、妊婦体験、アロマオイルハンドマッサージ、高齢者疑似体験、猫車。5. 学校案内、研究室紹介、教員研究紹介のパネルを実習室前に展示し、学内の状況を広く知らせた。また、サークル紹介として、お茶会、フラワーアレンジメント、各種のサークル紹介はポスターを使用して行った。

## 2-10 地域ふれあい祭

平成21年度の地域ふれあい祭りは、初めての試みとして8月8日大分市主催の大分七夕祭り、チキリンばやし市民総踊り大会に参加する方法で、県民との交流と本学の広報を目的として開催した。当日の参加者は教職員30名と学生40名の計70名であった。最初に、午後15時から17時まで竹町ドーム広場で健康チェックを実施し、市民対象者は約250名の測定や進学相談を行った。夕方18時から21時までには少雨の中、女子学生や看護系教員は浴衣姿もあでやかに、男性教職員や男子学生は大学法被姿で練習して臨んだチキリン踊りを披露した。

## 2-11 アニュアル・ミーティング

平成21年度アニュアルミーティングを、平成22年3月24日に公開形式で開催した。先端研究4題、プロジェクト研究2題、奨励研究4題、一般演題8題の発表があった。学外から8名の参加があった。

発表演題と発表者は下記に示すとおりである。

- 1) 大分県自殺実態基礎調査の概要(第3報)：自殺についての住民調査－影山 隆之
- 2) 民間被害者支援団体における全国共通カリキュラムの策定と導入－関根 剛
- 3) 物語朗読における音調変動の解釈－宮内 信治
- 4) 空間データにおける統計的推測－坂口 隆之
- 5) 子どもの受療行動と医療ニーズの実態にみる小児NPの必要性
- 6) 認知症者への構造化に着目した環境調整ケアモデルの開発；介入調査の結果報告－井伊 暢美
- 7) 地域看護学実習における学生の学びと今後の課題－下山 優恵
- 8) Web版看護ケアの質評価総合システムを用いた看護の質評価に関する研究－桜井 礼子
- 9) 看護基礎教育におけるフィジカルアセスメント教育内容の検討；新人看護師に焦点を当てて  
－田中 佳子
- 10) 基礎看護技術のe-learningシステムの構築－秦 さと子
- 11) NPに対する看護職者の意識；韓国・アメリカ・日本の看護職を比較して－桑野 紀子
- 12) In vivoにおける放射線誘発バスタンダー効果の検討－小嶋 光明
- 13) 腎不全における低代謝回転骨の骨組成変化と骨強度との関連－岩崎 香子
- 14) 中国降下煤塵がアトピー性皮膚炎に及ぼす影響－定金 香里
- 15) 大気中に存在する粒子が惹起する炎症反応に関与する因子の探索－吉田 成一
- 16) 月経の随伴症状の軽減に関する運動の有用性の検討－林 猪都子
- 17) 健康増進プロジェクト－稲垣 敦
- 18) ナースプラクティショナー（診療看護師）の役割拡大に対する医師の意識調査－藤内 美保

### 3 教育活動

#### 3-1 平成22年度入学者選抜状況

##### 1) 概要

選抜の区分及び募集人員、入学者選抜試験の概略は次表のとおりである。

##### 選抜の区分及び募集人員

学 部	学 科	入学定員	募 集 人 員					
			一 般 選 抜		特 別 選 抜			
			前期日程	後期日程	推 薦		社 会 人	私費外国人 留学生
県内	県外							
看護学部	看護学科	80人	35人	10人	30人	5人	注1) 5人以内	注2) 若干名

注1) 社会人の募集人員「5人以内」は推薦の(県内)30人に含める。

注2) 私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の35人に含める。

##### 入学者選抜試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分		志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者			
						計	県内(率)	男(率)	
特 別	推 薦	県内	77	77	30	2.6	30	30(100.0)	4(13.3)
		県外	34	34	5	6.8	5	0(0.0)	0(0.0)
	社会人		8	8	2	4.0	2	1(50.0)	0(0.0)
	計		119	119	37	3.2	37	31(83.8)	4(10.8)
一 般	前 期	213	195	38	5.1	33	16(48.5)	6(18.2)	
	後 期	211	101	12	8.4	11	4(36.4)	3(27.3)	
	計	424	296	50	5.9	44	20(45.5)	9(20.5)	
合 計		543	415	87	4.8	81	51(63.0)	13(16.0)	

##### 試験教科等

区 分		教 科	試 験 期 日	出 願 期 間
特 別	推 薦	総合問題、面接	平成21年 11月22日(日)	平成21年 11月2日(月)～11月9日(月)
	社会人			
一 般	前 期	総合問題、面接	平成22年 2月25日(木)	平成22年 1月25日(月)～2月3日(水)
	後 期	総合問題、面接	平成22年 3月12日(金)	

## 2) 特別選抜試験

### ① 推薦選抜

大分県内外の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長から推薦された生徒を対象に、総合問題と面接により実施した。

### ② 社会人選抜

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人選抜を実施した。

年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を 3 年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、総合問題と面接により実施した。

## 3) 一般選抜試験

平成 22 年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、分離分割方式（前期日程、後期日程）により試験を実施した。

なお、本学で実施する試験は、前期日程、後期日程ともに総合問題と面接により実施した。

日 程	教科名	科 目 名	教科・科目数	
前 期 日 程	国 語	『国語』（近代以降の文章）（必須）	4 教科 6 科目	
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、『数学Ⅱ・数学B』		
	理 科	「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」から 2 科目を選択		
	外国語	『英語』（必須）		
後 期 日 程	国 語	『国語』（近代以降の文章）	4 教科 4 科目	
	地理歴史 公 民	「世界史A」、「世界史B」、「日本史A」、 「日本史B」、「地理A」、「地理B」、 「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」 から 1 科目を選択		3 教科 3 科目 を選択
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、『数学Ⅱ』、 『数学Ⅱ・数学B』から 1 科目を選択		
	理 科	「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」 から 1 科目を選択		
	外国語	『英語』（必須）		

注 1) 「国語」については、「近代以降の文章」の得点のみを合否判定に用います。

注 2) 「地理歴史・公民」、「数学」及び「理科」において、複数科目を受験した場合は、高得点の科目をその教科の得点とし、合否判定に用います。なお、後期日程については、「国語」、「地理歴史・公民」、「数学」及び、「理科」の全ての教科を受験した場合には、高得点の上位 3 教科を合否判定に用います。

注 3) 前年度大学入試センター試験の結果は利用できません。

### 3-2 平成22年度3年次編入学試験状況

#### 1) 一般概要

就業看護職員等の生涯学習に対する強いニーズに対応するため、3年次編入学試験を、看護系短期大学、看護系大学又は看護系専修学校の専門課程を卒業した者及び卒業見込者を対象に、英語、総合問題及び面接により実施した。

#### 募集人員

学部	学科	募集人員
看護学部	看護学科	10人

#### 試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内(率)	男(率)
大学	2	2	2	—	2	2(100.0)	0(0.0)
短期大学	2	2	0	—	0	0(0.0)	0(0.0)
専修学校	15	14	3	—	2	2(100.0)	0(0.0)
合計	19	18	5	3.6	4	4(100.0)	0(0.0)

#### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成21年 8月30日(日)	平成21年 8月3日(月)～8月10日(月)

#### 2) 助産学概要

看護師又は保健師として就労しており、助産師の資格を希望する者に対して、3年次編入学(助産学)試験を、看護系短期大学、看護系大学又は看護系専修学校の専門課程を卒業した者を対象に募集したが、出願がなく試験は実施されなかった。

#### 募集人員

学部	学科	募集人員
看護学部	看護学科	若干名

#### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成21年 8月30日(日)	平成21年 8月3日(月)～8月10日(月)

### 3-3 平成22年度大学院博士課程（前期）入学試験状況

#### 1) 看護学専攻

##### 概要

看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者等又は看護師、保健師、助産師の資格を有し3年以上の実務経験がある者を対象に、「英語」、「総合問題」及び「面接」により実施した。

##### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻コース名	募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	研究者養成コース	10名
			実践者養成コース	

##### 試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内(率)	男(率)
修士課程	22	22	17	1.3	17	12(70.6)	2(11.8)

##### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成21年 8月30日(日)	平成21年 8月3日(月)～8月10日(月)

#### 2) 健康科学専攻

##### 概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、大学卒業者等又は厚生大臣が行う医療関係職種の国家試験に合格し、資格を取得し3年以上の実務経験がある者を対象に、「総合問題」及び「面接」により実施した。

##### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学科	博士課程（前期）	健康科学専攻	2名

##### 試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者
----	-----	-----	-----	-----	-----

					計	県内(率)	男(率)
修士課程	2	2	1	2.0	1	1(100.0)	1(100.0)

### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成21年 8月30日(日)	平成21年 8月3日(月)～8月10日(月)

### 3-4 平成22年度大学院看護学専攻博士課程（後期）入学試験状況

#### 1) 看護学専攻

##### 概要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に募集したが、出願がなく試験は実施されなかった。

##### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2名

##### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成21年 8月30日（日）	平成21年 8月3日（月）～8月10日（月）

#### 2) 健康科学専攻

##### 概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、大学卒業者等又は厚生大臣が行う医療関係職種为国家試験に合格し、資格を取得し3年以上の実務経験がある者を対象に募集したが、出願がなく試験は実施されなかった。

##### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2名

##### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成21年 8月30日（日）	平成21年 8月3日（月）～8月10日（月）

## 1 教育方針

解剖生理学と生化学を担当し、看護学への橋渡しをする。生命維持や活動のための基礎を理解し、恒常性の維持の仕組みを説き、疾病、疾病のリスクのある状態を理解できるようにする。そのために人体の構造を順を追って講義し、併せて機能面の特性を説明し、さらに、分子レベルでの物質の代謝についての知識、栄養学の基礎を理解できるようにする。

## 2 教育活動の現状と課題

人間のからだのしくみの基礎の科目、生体構造論、生体機能論、生体代謝論、生体科学特論、生体構造機能特論を担当している。解剖生理学から生化学的側面までを理解し、疾病論、看護学まで続く教育の下支えとなる科目である。講義に関しては、資料を作成して学生に配布し、教科書を補足し、複雑な生体現象を理解しやすくなるように努めている。専門の看護学が始まるまで興味をいかに持たせるかという点が課題である。

## 3 科目の教育活動

### 1) 生体構造論

1年次 後期

菅野 公浩、安部 眞佐子、岩崎 香子

人体を構成する器官を系にわけて、構造について講義した。細胞、組織の基礎的な構造から始まり、位置や方向についての解剖学用語を用いて、骨格、筋肉、内臓、循環器、神経、感覚器について、看護学生が基礎的事項を身につけられるように説明をした。

### 2) 生体機能論

1年次 後期

菅野 公浩、安部 眞佐子、岩崎 香子

人体の機能面を講義した。生理学の概念に始まり、循環器、呼吸器、消化吸収、排泄、内分泌、神経、運動、感覚、体温調節、生殖系について、それぞれの系の機能特性について説明した。多くの知識を整理してまとめたプリントを配布した。

### 3) 生体代謝論

1年次 後期

安部 眞佐子

はじめに、生化学の教科書に沿って、生体分子の種類や性質について説明をした。生体内での反応がイメージできるように、酵素、ビタミン、ミネラルから始めて、生体を構成する分子の主なものの種類と性質を説明し、それが代謝されてクエン酸経路、電子伝達系、酸化的リン酸化をとおして、エネルギー産生をするメカニズムを講義した。また、糖代謝においては、細胞間マトリックスの分子を、脂質代謝については、ケトン体産生を、タンパク質代謝においては、他の生体物質への変換に重点をおいた。そののち、栄養学にすすみ、食事バランスガイド、基礎食品の分類、食事摂取基準、栄養アセスメントについて講義した。

### 4) 生体構造機能特論

2年次 前期

菅野 公浩、岩崎 香子

正常時の体の調節機能の復習するとともに、メタボリックシンドロームの基盤となる高血圧、糖尿病、高脂血症の病因、病態について講義を行った。さらに高齢者の骨疾患についても解説を行った。

### 5) 生体科学特論

4年次 前期後半

安部 眞佐子

生体代謝論を発展させたものとして、生化学・栄養学の補足をした。生化学については、遺伝子を取りあげ、栄養指導における遺伝子多型の意味がわかるように、多型についての説明を重点的におこない、代謝性疾患の多型を解説した。さらに、ビデオにより、遺伝子多型と脂質異常症の理解を深めた。栄養については、1年次の講義で不足している食品についての説明をし、サプリメントデータベースより情報を得て、自己の知識をまとめる試みをした。さらにライフステージ、疾患の食事療法にすすむ予定であったが、基礎知識不足がみられ、生体分子の復習が中心となった。ライフステージ別の食事として妊婦の食事を具体例を示しながら講義したが、看護専門で既習したと思われる疾患時の食事についての講義をのぞむ事後感想を得たので、来年度に反映したい。

### 6) 健康科学実験 I 組織学 1

安部 眞佐子

消化器系の組織について、学生が各自、プレパラートを顕微鏡をのぞきながらスケッチをして理解を深めた。胃、小腸、膵臓を題材とし、消化吸收や、血糖コントロールの復習をしながら、観察をすすめた。

### 7) 健康科学実験 II 組織学 2

岩崎 香子

ヒト組織切片を顕微鏡で観察することにより、身体を構成する臓器の構造と機能を再度学習し知識を深めた。組織学 2 では腎・泌尿器系、内分泌系を中心に実習を行い理解を深めた。

## 4 卒業研究

- ・透析患者の身体活動量とQOLの関連
- ・血液維持透析患者のタンパク質摂取状況によるQOLの比較
- ・透析患者の踵骨量と血管石灰化抑制因子との関連
- ・肝細胞における血管石灰化抑制因子産生に関する検討
- ・1歳6か月児健診時における子どもの丸のみの背景
- ・こどもの食物アレルギーを疑う状況と受診の実態

## 3-5-2 生体反応学研究室

### 1 教育方針

生体反応学研究室では看護の専門基礎分野の科目である病理学、薬理学、微生物学を看護の視点から理解させることを目標として教育を行っている。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する様々な疾病、その発生メカニズム、薬の作用、病原微生物による生体反応を科学的に理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらから得た知識が2年次～4年次の看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育を行っている。

### 2 教育活動の現状と課題

本研究室では本年度からスタートした新カリキュラムにおいて、生体反応学総論、生体反応学各論、病態特論、微生物免疫論、生体薬物反応論の講義を担当している。看護学を学ぶ学生はこれらの専門基礎分野の科目の理解度が低く、2～4年次での実習に結びつけられていない場合が多い。また2年次で行なっている進級試験でもこれらの科目の正答率は高くない。それ故に、看護実践を行う上で、様々な外的、内的要因によって起こる疾病・病態や薬理作用を十分に理解しておくことの重要性を認識させ、より看護の視点からこれらの科目を理解できるように講義を進めている。教育上の工夫として、生体反応学各論では、看護専門基礎の看護疾病病態論の講義に繋げるために、系統別疾患を病理学総論の病気の基本事項と結びつけて病態を理解させるのに努めている。生体薬物反応論では基礎的な薬物の作用から臨床に用いられている薬物について幅広く講義を行なっている。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 生体反応学概論

1年次 後期前半

市瀬 孝道

本講義は一般的には病理学総論と言われものである。病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。学生が各種疾病の成り立ちや病態を理解し易い内容の易しい教科書を選択し、更に教科書を分かりやすく整理したプリント配布して講義を進めた。講義内容は以下に示すとおりである。退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。

## 2) 生体反応学各論

1年次 後期後半

市瀬 孝道

これまで行って来た生体反応学演習を本年度開始された新カリキュラムから生体反応学各論とし、系統別に発生する疾病（病理学各論）についての講義を行った。病理学総論から各論へと疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。講義内容は以下に示すとおりである。消化器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患、運動器、感覚器。

## 3) 微生物免疫論

1年次 後期

吉田 成一、西園 晃

本年度より、生体微生物反応論と感染免疫学の講義を体系的に行うため、2科目を統合し微生物免疫論とした。微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、および病原微生物に対する生体の防御反応について、理解させることを主要な目標として、以下の項目について講義した。微生物の特徴、消毒・滅菌法、感染症、各種感染症とその原因、免疫学、アレルギー、自己免疫疾患、腫瘍と免疫。講義プリントを配布することで学生の学習がしやすくなるよう努めた。

学生にとり難易度の高い内容に関しては、異なる角度から講義することにより、理解度が上がるよう努めた。また、受講者は講義を受けるだけでなく、自ら学習し知識を習得しないと身に付かないと言うことを適宜、喚起した。

## 4) 生体薬物反応論

2年次 前期

吉田 成一

疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）を中心に講義した。特に総論を始め、薬理作用の基礎知識の正しい理解が可能なような講義を行った。今年度は、いくつかの医薬品の添付文書を資料として用いた。しかし、教科書および添付文書のみでは、種々の医薬品に関する詳細な知識は身につかないため、次年度以降は、テキストの追加を考慮する。

## 5) 病態特論

4年次 前期

市瀬 孝道

これまで教科書中心で病気や病態を講義してきたものを、本講義では臓器の肉眼観察や、組織の顕微鏡観察をすることによって、より深く病気を理解させることを目的として行っている。例年どおり、県立病院の臨床検査部において、炎症や代謝障害を起した臓器、種々の臓器に発生した良性腫瘍や悪性腫瘍の肉眼観察や病理組織標本の観察を行い、実際に眼下に起きている病態を理解させた。3回目の講義ではト部先生によるスライドによるプレゼンテーションも取入れた。

## 6) 健康科学実験 II 血液検査

定金 香里

ラット静脈血を用い貧血・感染症に関わる血液検査を行った。検査内容は、マイクロヘマトクリット法を用いたヘマトクリット値測定、CRP定性キットを用いたC反応性タンパクの検出、視算法による赤・白血球数測定、ディフクイック染色した末梢血血球および組織中炎症細胞の形態観察である。また、貧血を評価する基準について考察した。

## 7) 健康科学実験 IV 基礎微生物学実験

吉田 成一

環境中に細菌が存在することを確認させる目的でヒトの表皮、日用品に常在する細菌を培養し、観察した。さらに手洗いによる指先に付着している細菌数の変化を測定した。また、温度によって細菌の増殖に差があることを視覚的に認識した。細菌が抗生物質により発育が阻止されることを認識させる目的で薬剤感受性試験を行った。各種病原微生物の抗生物質に対する感受性を測定し、臨床使用時での使い分けについて考察した。

## 8) 健康科学実験 V ラットの解剖

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

ヒトの構造を知る一手段としてラットの解剖を行った。ラットを開胸、開腹後、系統立てて臓器・器官を観察し、臓器の相対的位置や相互の関連性について理解させた。また、各臓器を摘出して、色、大きさ、重さ等を測定、スケッチすると共に生きた臓器を実際に触れてその形状や感触を理解させた。スムーズに解剖が進行する工夫として、先にデモンストレーションを行いながら十分に方法や内容を説明した。また、心脈管系の図を白板に詳しく描き、実物と比較しながら理解させた。

## 4 卒業研究

- ・アスペルギルスが皮膚のバリア機能破綻時にアトピー性皮膚炎に及ぼす影響
- ・マウス喘息モデルを用いた風送黄砂のアレルギー増悪作用の検討
- ・大気中に含まれる微粒子の胎仔期暴露が雄性胎仔の遺伝子発現に与える影響
- ・手指消毒薬がアトピー性皮膚炎に及ぼす影響の生化学的解析
- ・ユズ果皮脂溶性成分中に含まれるアレルギー抑制物質を有する物質の検索
- ・マウス喘息モデルを用いたユズ果皮抽出成分のアレルギー抑制効果の検討

## 1 教育方針

健康運動学研究室では、まずは体を動かすことの楽しさを体感するとともに、個人、社会、人類にとって運動がいかに重要であるかを理解することを目指している。また、近年、臨地、学校、行政において健康運動や運動療法が重要になり、看護職にも運動の理解や指導能力が必要になってきたため、それに応えられる知識および実践能力を身につけることを目指している。さらに、在学中に自分の健康・体力を維持・増進するために運動量を確保し、将来のために自分に合った運動習慣を身につけることも目指している。学生時代から健康と運動の関係を自分の問題として捉えることにより、将来、自分の健康管理に役立つだけでなく、他者（患者、地域住民、生徒）に対して実感を伴った看護、保健指導、健康教育、保健事業の立案ができるようになる。また、高校までは科学的知見を覚えるという学習をしてきているが、「科学」自体については教育されていない。そこで、学部及び大学院の授業や研究指導の中では、科学自体や科学的なものの見方などを学ぶ機会を取り入れている。

## 2 教育活動の現状と課題

授業では、看護系の授業や実習を視野に入れて、学生のレディネスにも配慮しながら、授業を構成してきた。今後も、自己から他者へ、過去から未来へ、体験から指導へ、経験から理論へ、個から集団へ、基礎から専門へという流れで、体験と科学的知見に基づいた教育を進めることを意識している。

大学時代は一人暮らしになり、食事、運動、休養がおろそかになる場合も多い。さらに、本学では体育に相当する授業は1年次だけであり、運動クラブに所属する学生も少ないため、体力の低下や体脂肪率の増加も心配される。男子学生の中には放課後に自主的にスポーツを行っている学生もいるが、全体的には思いっきり体を動かす機会が少なく、ストレスが溜まっており、自律神経活動の低下やアンバランスも危惧される。このような点を考慮して、授業では実習を入れて体を動かす機会を増やす努力をしている。今年は、体育系サークル活動の支援をして来たが、今後、2年次以降の選択科目としてスポーツを取り入れる等の対策を検討したいと考えている。また、授業の中に学生に対する健康教育的側面を増やしていこうと考えている。

## 3 科目の教育活動

### 1) 身体運動科学

1年次 後期

稲垣 敦

はじめに科学についての授業を行った。その後、体力測定を実施して自己評価を行い、生活習慣と結びつけて考えた。また、その他の健康問題についても自己分析し、その改善案を各自作成した。それに関連して、運動療法の例を示し、運動と病気・健康の関係について講義した。また、人間固有ともいえる二足歩行や知的ダイエット等についても講義をした。

## 2) 健康運動

1年次 前期

稲垣 敦

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、多くのレクリエーションやニュースポーツを実施した。運動量の確保にも十分に配慮した。また、福祉レクリエーション関係のビデオを視聴し、社会や個人におけるレクリエーションの重要性、看護や介護における必要性や可能性について考えた。

## 3) 健康運動論

2年次 前期

稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、体力や運動の重要性や健康との関連性を講義し、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても解説した。

## 4) 健康運動学演習

2年次 後期前半

稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や機能の変化から、立つことや二足歩行の意味を考えた。また、看護にかかわる動作を力学的に解説するとともに、重心・平衡性、筋力・パワー、エネルギー消費量等の測定実習も行った。

## 5) 運動療法特論

3年次 後期後半

稲垣 敦

概論では、運動処方の流れや心電図についても講義し、各論では広く運動療法について疾患・障害別に講義した。選択科目であるが受講者が多かったため、実習としてはシングルマスター試験を行った。

## 6) 運動指導特論

4年次 前期前半

稲垣 敦、大賀 淳子、軽部 薫、中嶋 麗理

今年度は受講者がおらず、開講しなかった。

## 7) 健康科学実験 IX 呼吸循環器系持久力の測定

稲垣 敦

自転車エルゴメーターを用いた最大下運動負荷時に心拍数と運動負荷を測定して、心拍数と仕事率の関係、自転車の機械的効率、仕事量と酸素摂取量の関係から最大酸素摂取量を推定し、呼吸循環器系持久力を評価した。実習ではペアを組み、被検者と検者の両方を経験できるようにした。また、テキストに加えて、測定および計算の仕方を説明したレポート用紙を準備した。説明では、患者や高齢者の運動指導を想定し、安全性や倫理に関して注意すべき点を含めた。実験にあたっては、年齢、運動習慣、運動歴、現病歴や既往歴、当日の体調に配慮した。

## 8) 健康科学実験 X 心電図の成り立ちと心拍変動解析

松本 佳那子

看護の現場で頻繁に接することが多い心電図測定を行った。まず、心電図の成り立ちについて電気生理学的観点から理解できるように講義を行った。続いて、学生全員が電極を装着し、自身の心電図波形をリアルタイムで確認した。さらに、生活習慣病外来などで用いられることが多い心拍変動解析による心臓自律神経活動評価を行った。

## 4 卒業研究

- 1) 登山は一回でも効果はあるのか？
- 2) 自転車通学の減量効果について
- 3) ストレッチ効果の多面的評価について

## 3-5-4 人間関係学研究室

### 1 教育方針

人に関する理解を基盤とし、人の喜びや苦しみを分かち合うとともに、自他の独自性を尊重することのできる豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースとした、人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間の行動や発達についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成している。各科目の具体的な教育目標は以下の通り。1) 環境を認識する存在としての人の機能・人の発達についての基本的知識の習得（「人のこころの仕組み」）、2) 人間を社会や集団内の人間関係を通して理解する視点及び対人援助に関する基本的な知識の習得（「人間関係学」）、3) 人間関係の形成方法についての理解（「コミュニケーション論」）、4) 対人援助技術の習得（「行動療法論」「人間関係学演習」）、5) アセスメント活動を通じた自己理解・他者理解の促進「心理アセスメント論」）、6) 看護と関わる心理学的知識についての理解（「人間関係学」「行動療法論」「心理アセスメント論」）、7) 人間と社会について幅広い観点から学ぶ（非常勤担当科目）（「音楽とこころ」「美術とこころ」「哲学入門」「社会学入門」「法学入門」「現代社会と法」「文化人類学入門」、「保健医療ボランティア論」）。

授業に際しては、個々の心理現象を看護実践や各自の日常生活での体験と関連づけ、援助スキルや心理検査などを体験に基づいて理解できるよう配慮している。また、授業終了毎に学生に感想・コメントの記述を求め、学生の授業理解程度や授業評価の一助としている。

## 2 教育活動の現状と課題

人間関係学研究室としての基本的な教育目標、人のこころに関する基本的な知識の習得、集団・個人との人間関係の理解、対人援助技術の理解、についてはこれまで同様である。授業評価アンケートや授業終了後のコメントから得られたデータに関しては、備品の整備・教室変更・演習時のボランティアの活用など、教育活動の改善へと結びつけている。

他の看護系教室の講義との連携・教育内容の調整を進めることが、今後の課題である。

## 3 科目の教育活動

### 1) 人のこころの仕組み

1年次 前期

吉村 匠平

対象や自分自身を認識する存在としての人の機能の特徴、2年次前期「人間行動論」の理解に必要な学習心理学の基本的な知識、人の発達のプロセス等について、小実験・VTR視聴を併用し講義を進めた。今年度からの新しい試みとして、毎回くじ引きによる座席指定を行い、講義時間中にペアで行うグループワークを積極的に取り入れた。また全ての学生のコメントに対する返信を「講義Q&A」として集約し、学生に配布することで、周囲の学生の興味関心、理解状況を理解することができる環境を構築した。社会構成主義的な授業観に基づき、授業者が終了時にまとめる形を取らず、受講者が毎回レポートを作成し、それを採点して返却する形式をとった。講義で利用した講義資料は、全て講義ブログ上に集約し、web上のポートフォリオを作成した。

### 2) コミュニケーション論

1年次 前期

関根 剛

昨年と同様、コミュニケーションにおける非言語的要素と言語的要素の重要性を中心に3回のグループエクササイズ、行動観察のまとめ方、行動観察の計画と実施、プレゼンテーションなどを実施した。具体的には、相手の発信している情報に気づく事、受け取った情報を自分がどのように理解しているか知ること（自己の振り返り）、相手に対して適切な情報を発信することである。コミュニケーションは、これら受信－理解－発信の繰り返しであることを、プロセスレコードを例に示しながら体験的に理解させた。今年度は、カリキュラム変更にあわせて、コミュニケーションスキルについては、必須科目となったカウンセリング論に移行して、プレゼンテーションスキルの講義の充実に努めた。

### 3) 人間関係学

1年次 後期

吉村 匠平

心理学における「人格/性格」理解のあり方として、客観的・自然科学的な理解を目指す「実体論」と人間関係の中での理解を目指す「状況論」の2つを取り上げた。また、ケアを必要としている人との関係を作る上で援助職者に必要とされる基本的な態度として、ロジャースの3条件を取り上げた。知識・用語の暗記に留まらず、知識の運用ができるようにするため、心理テスト体験、客観形式の問題演習、VTRを用いたケース検討を行った。前期の「こころの仕組み」同様、毎時くじ引きによる座席指定を行い、ペアワークを積極的に行った。加えてWebカメラを用いた簡易クリッカーを導入し、受講者の理解度を授業者と受講者の双方がリアルタイムで確認出来るシステムを構築した。講義ブログ上に講義で利用した講義資料をすべて集約し、web上にポートフォリオを作成した。また全ての学生のコメントに対する返信を「講義Q&A」として集約し、学生に配布することで、周囲の学生の興味関心、理解状況を理解することができるようにした。授業者が終了時にまとめる形を取らず、受講者が、毎回レポートを作成し、それを採点して返却する形式をとった。

### 4) 人間関係学演習

2年次 後期前半

関根 剛

カウンセリングスキルを身につけさせるため、ロールプレイを中心に8回の演習を実施した。展開は従来通り、異なる想定状況を作成して実施した。想定状況は、健康問題、日常的な人間関係、不快なできごとなどのほか、人間以外を主人公とするイヌバラ法をヒントにした状況設定など多彩なものを用意した。

改善点としては、昨年に引き続き、カフェテリアにおける一斉授業としたために、ロールプレイ前後の指導、介入が容易になり、授業の質をあげることができた。また、最近の学生においては、カセットテープを利用した経験がない学生も多く、自宅での再生が難しいことから、ICレコーダーを一部購入した。これにより、データの保存、書き込みなどの失敗の回避、容易な音声データの提出が可能となった。来年度にむけては、全グループをICレコーダーの利用が可能となるようにしたい。

### 5) 行動療法論

2年次 前期後半

関根 剛

より実践と体験的な内容とするため、認知行動療法に関する講義、自分自身の日常的な健康行動の改善を試みるプログラム作成と実践を行わせた。これらにより、体験的に行動療法的なアプローチについて理解することが可能となったと考えられる。今年度は、実施した行動改善プログラムについて、個別のみではなく、全体にフィードバックをして、プログラムの作成テクニック、改善のポイントなどを共有させるように改善した。

## 6) カウンセリング論

1年次 後期、2年次 前期

1年次：関根 剛、2年次：吉村 匠平、関根 剛

今年度は、カリキュラム変更があり、新カリキュラムにおいては1年次に移行して関根が単独で受け持つこととなった。そのため、今年度は、2年次は従来通り吉村と関根による講義、1年次は関根による講義を実施することとなった。2年次については、講義前半を吉村、後半を関根が担当した。講義前半では、発達心理学領域をとりあげ、乳幼児期の言語発達、身体運動機能の発達のアウトライン、発達障がい（ダウン症、ADHD、自閉症、反応性愛着障がい）について講義した。発達障がいについては、障がいの個人差が大きいことを繰り返し確認しながら、必要最低限の発達障がいの特徴を知識として習得することを求めた。後半は、精神分析、クライアント中心療法などの代表的なカウンセリング理論、不登校や非行、犯罪や災害被害者への危機介入などテーマごとの理論についても解説を行った。また、1年次については、前半は従来のカウンセリング理論、テーマごとの理論の解説を行い、後半は2年次の人間関係学演習で実施していたカウンセリングスキルについての講義とロールプレイを行った。

## 7) 心理アセスメント論

2年次 後期前半

吉村 匠平

自分自身を対象として様々視点からアセスメントを行い、その結果を他者の前でプレゼンテーション（自己開示）させた。課題内容は、標準化された心理テストを自分自身に実施・解釈し、それをプレゼンテーションする、自分自身についてのコラージュの作成と品評会、写真投影法を用いたセルフプレゼンテーションの3つである。多くの受講者が「発表準備が大変だった」と回答する反面、「自分を振り返る機会になった」「看護教育という視点から考えて意味のある活動だった」とも回答していた。従来、受講者が1ケタ台であったが、今期は18名が受講し単位を取得した。

## 4 卒業研究

- ・保健所におけるエイズ検査対象者用パンフレットの試作
- ・看護学生のユーモアと看護職アイデンティティの関係
- ・眉の形状が看護師の印象に及ぼす影響
- ・自閉症児を対象とした音楽療法に関する文献的研究
- ・写真投影法による大学生が好む学内環境の分析

### 3-5-5 環境保健学研究室

#### 1 教育方針

環境保健学研究室では、環境保健学が直接カバーする知識や問題以外に、物理、化学、生物、統計学に関係する基礎的事項から社会的な問題まで広くカバーすることで、学問の奥深さを学ぶ機会を提供している。学部教育ではとくに基礎的な理解が重要であるが、社会的な問題まで広げている理由は学問に対するモチベーションを育成するためである。看護という名称からくる狭い認識を排除するために、健康がどんな要因と関係しているのか、そのことを知るためにどんなアプローチがとられていて、また、どんな考え方で健康に対処しようとしているのかを環境保健の講義から学ぶように指導している。一方で、放射線は医療において不可欠な存在であることから、放射線の基礎知識から健康影響、医学利用まで保健医療に携わる者が身につけるべき知識を教授している。

## 2 教育活動の現状と課題

国家試験との関係が比較的薄い内容であるためか、学年にあがるにつれて環境保健や放射線に対する関心が低下することは従来からの課題である。4年次の選択科目である環境倫理学は選択する学生が年々少なくなっている。応用倫理学のひとつである環境倫理を生命倫理と比較しながら、倫理問題のおもしろさと難しさを教えている。受講した学生には良い評価をもらうが、授業名からくる看護との距離が大きいという印象がモチベーションを下げているようである。授業名を再検討し、4年次生により関心の高い内容に修正していくことを検討したい。

## 3 科目の教育活動

### 1) 環境保健学概論

1年次 前期

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

環境保健全般をカバーすることではなく、基本的な考え方や健康との関係を理解するための方法を中心に講義をしている。講義内容は次の通りである。

1) 公害から環境リスクへ：歴史、2) 現代の環境問題、3) 健康影響の考え方、4) 環境疫学：基礎、5) 環境疫学：事例、6) 人における発がん、7) 動物実験 基礎と事例、8) がんの生物学、9) がん以外の健康影響、10) ライフスタイルと健康、11) 環境リスク論、12) 環境リスク心理学、13) リスクガバナンス、14) 環境リスクの諸問題とまとめ、15) 試験および解説

### 2) 生活環境論

2年次 前期後半

伴 信彦、甲斐 倫明

我々を取り巻く食環境、水環境、住環境に着目し、健康で快適な生活を送るための食品保健・環境保健の実際を各論的に講義した。それぞれのテーマに対して、健康影響の発生機序と実態を説明し、安全管理の考え方、法令等における規制について解説した。講義内容は次の通りである。食中毒、食品添加物と食品中の残留物質、BSE問題、温熱環境と気圧、上水道と下水道、室内汚染、騒音・振動・悪臭。

### 3) 放射線健康科学

2年次 後期

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

放射線と健康との関係を理解するために、放射線の物理、生物、医学、リスクまでの広範囲の知識をコンパクトにして講義を行っている。その際、物理や生物は同時期に実施している健康科学実験と合わせて理解できるように配慮している。また、医療における放射線利用に対する基礎知識を持たせる。講義内容は次の通りである。

1) 放射線影響と放射線防護の歴史、2) 放射線とは何か、3) 放射性同位元素と放射能  
4) 放射線と物質との相互作用、5) 放射線の線量、6) 身近な放射線・放射線源、7) 放射線の生体応答（DNA損傷と突然変異）、8) 放射線の生体応答（染色体異常と細胞死）、9) 放射線の健康影響（確率的影響）、10) 放射線の健康影響（確定的影響）、11) 放射線リスクの評価とその不確かさ、12) 安全の考え方と放射線防護基準、13) 患者のための放射線防護、14) 医療における放射線利用、15) 試験および解説

#### 4) 環境保健学演習

2年次 後期

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

3つの課題を与え、課題ごとにレポートにまとめる作業を教員が支援するやり方で演習を行っている。課題は基本的な理解を必要とする内容を選び、コンピュータのエクセルと用いて計算とグラフ作成を行う技術も合わせて学ぶように工夫してある。課題は次の通りである。1)メダカの死亡数分布によるデータのばらつきを調べる、2)全国のがん死亡統計およびがん罹患統計から、部位別性別年齢階級別死亡率・罹患率のグラフ作成を通してがんの統計を理解する。罹患率の上位5位のがんを対象に、年齢調整罹患率を計算する。3)生命表を用いた平均余命の計算

#### 5) 環境リスク論

3年次 後期後半

伴 信彦、甲斐 倫明

現代の環境問題の背景と複雑さ、解決へ向けた取り組み等について、リスクをキーワードに、社会・政策的な側面も交えて論じた。テーマとして取り上げたのはいずれも現在進行形の問題であり、学生に多角的な視点を提供するとともに、最新の情報を伝えるよう努めた。講義内容は次の通りである。環境リスク論とは、食品安全とリスク、環境ホルモンのリスク、新型インフルエンザのリスク、地球温暖化のリスク、化学物質の発がんリスク、生態リスク。

#### 6) 環境倫理学

4年次 前期

甲斐 倫明

環境倫理が看護とは距離のある名称であることから学生の関心は高くないため、生命倫理との比較を交えながら、現代の環境倫理問題を考える講義にしている。講義内容は次の通りである。1)倫理とは、2)代理母などの生殖問題、3)現代の生命倫理学の考え方、4)人間中心主義と生命中心主義、5)現代の環境問題と倫理、6)自然の生存権の問題、7)世代間倫理の問題、8)地球全体主義

#### 7) 健康科学実験 VI 放射線

小嶋 光明

本実験では、自然環境中の放射線の存在と量を理解させた。また、医療の現場で一般的に用いられている診療用X線照射装置からの散乱線を定量的に測定し放射線防護のあり方について考察した。

#### 8) 健康科学実験 VII 空気汚染と水質汚染

甲斐 倫明

2009年は豚インフルエンザのパンデミックに襲われ、日本においても多大な社会的な影響まで発展したことから、「インフルエンザ対応の基礎」というタイトルで行った。医療従事者として理解しておくべき対応の基礎について簡単な実験を通して理解する。実験内容は次の通りである。1)ビデオの視聴でウイルスの付着したエアロゾルの挙動を理解する、2)サージカルマスク（外科用マスク）の着用法、3)N95マスクの着用法、4)ユーザーシールチェック、5)フィットテスト（定性的フィットテスト）、6)サーモグラフィによる体温測定

## 9) 健康科学実験 VIII 染色体異常

伴 信彦

染色体の実体と染色体異常の発生機序について理解を深めるために、正常染色体および放射線によって誘発した異常染色体の標本を、学生一人一人に検鏡させた。また、染色体異常が疾患の原因となり得る例としてダウン症候群と慢性骨髄性白血病を取り上げ、核型分析等を通して異常染色体を同定させた後、疾患との関係について簡単な解説を加えた。

## 4 卒業研究

- ・食道がん放射線治療後の心血管障害に関する実験的考察
- ・BRCA1/2遺伝子変異が及ぼす放射線乳がんリスク推定のための統一モデリング言語 (UML) を利用した考察
- ・In vivo における放射線誘発DNA損傷の経時的観察
- ・CT診断からの放射線被ばくに伴う発がんリスクを検証するための疫学調査のあり方
- ・造血系転写因子PU.1を中心とする白血病化パスウェイの解析 —ヒト白血病とマウス白血病の比較—
- ・バイスタンダー効果による放射線適応応答の誘導
- ・放射線の繰り返し照射によるDNA損傷の蓄積性の検討

## 3-5-6 健康情報科学研究室

### 1 教育方針

科学的根拠に基づいた看護実践に不可欠な、情報の収集と分析、発信のための知識・技術を身につけるという目的に対応して、内容の検討と教育にあたっている。

指定規則上の疫学、保健統計（情報処理を含む）に対応した教育の充実はもちろんであるが、大学時代からその後を通じた学習・情報処理のツールとして、コンピュータおよびネットワークを適切に利用できる知識・技術を早期に習得できるように配慮している。

また、選択科目においては、さらに高度な内容を扱い、学生の将来の目標に応じて、高度な能力を養成することを目指している。

### 2 教育活動の現状と課題

情報を取り扱うICT技術の習得状況と、情報の分析・評価のための基盤となる知識の乖離がますます進行する中、学習の定着状況の確認とフィードバックが、講義・演習において重要であると考えられる。

当研究室担当科目においては、演習では3名の教員で40数名の学生を指導し個別に進度と理解を確認しながら演習を進めるという取り組みを継続している。講義科目においては教材提供・質疑応答のためのサーバを活用して、講義以外での自己学習を積極的に支援する体制を構築しつつある。

今後は、看護領域の共通の基盤となる知識・技術と保健師としての専門知識・技術に、担当する教育内容を分割して、再度教育内容の検討を進めるとともに、学生の個別の能力と理解を適宜把握し、きめ細かい指導を行う体制をさらに充実させる必要があると考える。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 健康情報学

1年次 前期

佐伯 圭一郎

保健師領域の「疫学、保健統計学」の講義科目として、集団の健康の指標の意味、現状、疾病と健康に関する事象の情報収集と分析の技法を教授した。基本的な数学的知識の確認と教育に「自然科学の基礎」の一部の講義を利用できたため、昨年度よりも内容的には余裕をもった進行が行えている。ただし、具体例の充実や演習との連携により、学生の意欲の向上や更なる学修の定着をはからなければならないと考え、今後も改善を継続する必要がある。

#### 2) 生物統計学

1年次 後期

佐伯 圭一郎、坂口 隆之

統計学の基本的な知識・技術を看護分野での実際例と関連付けながら教授している。本年度は遠隔講義システムによる配信も行うという初めての授業形態であったため、いくつかの新しい取り組みを試みた。1)講義の動画の配信、2)オンラインでの小テスト・小レポート、3)質疑応答や教材・資料配布のためのサーバ活用、の試みについて、学生側はあまり混乱なく対応できていたが、教育効果については例年以上の効果が上がったか、検討を必要とする。新カリキュラムに移行して1年目であり、今後3年次に開講される選択科目との内容的な連携の調整を行う予定である。

#### 3) 健康情報処理演習

1年次 通年

品川 佳満、坂口 隆之、佐伯 圭一郎

パーソナルコンピュータを活用して、学習や保健医療の場における情報管理の道具として役立つための技術について演習形式で教授した。主な演習内容は、ネットワークの利用（WWW、メール、ファイルサーバ）、ワードプロセッサ、表計算、プレゼンテーション、ホームページ作成、画像処理、データベースの利用、統計データの分析である。また、演習に加えて、実際に医療現場で扱う情報システム（オーダーリングシステム、電子カルテシステムなど）について講義形式で解説を行った。さらに、コンピュータの技術的な面だけでなく、ネットワーク、情報セキュリティ、情報モラルなど情報を扱う上で重要となる知識についても解説を行った。

#### 4) 応用情報処理学

2年次 前期後半

佐伯 圭一郎、坂口 隆之

選択科目であるが、ほぼすべての学生が履修する科目である。1年次の生物統計学で学習した統計学の基礎的内容を発展させた特に看護領域で必要性の高い各論を講義し、統計解析ソフトウェアの演習も行っている。毎回の小テストと解析演習のレポートにより、学習の確認を行っている。看護に関連した事例蓄積も進んだが、今後見直しと吟味を行い、より現実的で、学生の興味を持てる題材を充実した演習を増やしていきたいと考える。

## 5) 実務情報処理学

4年次 前期後半

佐伯 圭一郎

本年度も、主に保健師領域における具体的なトピックを扱い、各回の講義で一つずつ完結した形をとった。疫学調査の計画、尺度構成法、多変量解析法などの内容の他に、外部講師として商業デザイナーを招へいし、印刷物・プレゼンテーションのデザインや医療施設の環境デザインに関する演習形式の講義を行い、実務における応用力を養った。

## 4 卒業研究

- ・「健康日本21」中間評価値を用いた都道府県比較の試み ―肥満者割合について―
- ・Web上で発信される妊婦の食生活についての情報の現状
- ・大分県におけるインフルエンザの流行の地理的パターンの可視化に関する研究
- ・乳がん患者への心理的援助 ―臨床研究と教育、30年の変遷をみる―
- ・筋萎縮性側索硬化症の心・血管系自律神経機能異常に関する文献的研究
- ・近赤外光を用いた意思伝達装置の開発に向けた基礎的研究 ―脳血流量に変化をもたらす思考とは―
- ・日本のHIV/AIDSの疫学的特徴 ―日本の文化的背景に着目した文献研究―

## 3-5-7 言語学研究室

### 1 教育方針

言語活動の四技能であるSpeaking, Listening, Reading, Writingをバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション(Speaking, Listening)に取り組ませている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるよう、CALL (Computer Assisted Language Learning: コンピューターを用いたウェブ学習システム) によるTOEIC対策英語学習プログラムを実施している。

## 2 教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション (Speaking, Listening) を練習する。1年次生の講義内容は、一般的な日常生活の話題 (Food, Shopping, Home, その他)、2年次の講義内容は、看護英語である。各話題について3～4週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫している。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行う。また、1年次生前期の授業では、CALL学習を必修授業として取り入れている。授業を二部構成とし、上記の自作教材を用いたグループでの英語コミュニケーションの練習と、CALL学習を行なう。1クラスを2グループに別け、グループ毎に交互に講義を行っている。両者をバランスよく組み合わせ、学生の英語運用能力の維持、向上を目指す。

日本人教員の授業では、授業を二部構成とする。前半では、英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることで、テキストの内容を理解、把握させ、それをもとに、課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行う。こうした基本的な理解を基盤として、ネイティブ・スピーカーの発話を音声テープで確認し、実際に発声の反復練習を行う。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてることが課題となり、次週には実際に暗唱 (含む筆記) できるかの確認を行う。後半では、易しい英語で書かれた書物を、辞書を用いることなく読み、総読書語数100万語を目指す多読を実施する。「辞書は使わない・分からない部分は飛ばす・つまらない本は途中でやめる」を原則に、学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機を維持しつつ、英語運用能力の維持、定着、向上を目指す。

言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。そこで、年間を通し、全ての学生 (1～4年次生、大学院生) が自ら自由に英語学習に取り組めるよう授業外での多読教材の貸し出しや、CALLシステムによるTOEIC対策のための英語学習、学習期間前後のTOEIC IP試験を実施している。前期は、1年次生必修。後期は、全ての学生を対象に希望制にて実施している。受講した学生は、真剣に取り組み、結果として学習効果の向上がみられた。

学生の英語学習に対する意欲の維持や学習活動の継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索している。さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な学習へのきっかけ作りをいかに構築していくかが今後も継続課題である。

## 3 科目の教育活動

### 1) 英語I-A1

1年次 前期

宮内 信治

英語の音声については、母音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読では、ディケンズやエマーソン、ソローなど19世紀以降に著された文学、哲学の英語名文集を教科書として用いた。テキストに併記されている日本語訳を参考に、その解釈に至る基本的な文法の理解を深め、添付の音源CDを活用してスムーズな音読を習得すべく、発声練習を試みた。学んだ英文を帳面に書写し、次の講義までに暗唱音読ができるようにすることを課題とした。現代においてもなお規範となる英文テキストの一部を暗唱をすることにより、英語の世界の教養の一端を体得できたと思う。多読による総読書量は、前期期間中一人平均121,600語。最も多く読んだ学生の語数は197,400語。

## 2) 英語I-A2

1年次 後期

宮内 信治

英語の音声については、子音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読では、前期と同じ教科書を用いて、ホイットマン、ラッセルの作品に触れて理解を深めると同時に、国際的に著名な日本人が英語で著した規範的名文の一端に触れた。新渡戸稲造『武士道』、岡倉覚三『茶の本』、鈴木大拙『禅と日本文化』を読むことで、日本人とはいかなるものか、という問いに答える英語を、書写と音読、暗唱で体得した。多読による総読書量は通年で一人平均141,000語。最も多く読んだ学生の語数は240,000語。

## 3) 英語I-B1

1年次 前期

Gerald T. Shirley

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session, and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

## 4) 英語I-B2

1年次 後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

## 5) 英語II-A1

2年次 前期

宮内 信治

講読内容として、人間の精神活動の中核である脳について、様々な角度からの知見を紹介した英文テキストに取り組んだ。知的に高度な内容を扱う複雑な英文を読み解くカギとして文中の前置詞と接続詞の役割に着目し、文の構造の把握の仕方と解釈方法の習得に取り組んだ。同時に、前置詞や接続詞を基準とした意味のまとまりを意識して英文を音読する演習を実施し、それをもとに暗唱などの自主学習を促し、習得を確認した。記述内容を正確に理解し、発話時の音の英語らしさを実践、体感できたようである。また、ナイチンゲールの簡単な伝記にも英語で触れた。多読による総読書量は、一年次からの通算で前期終了時一人平均171,000語。最も多く読んだ学生の語数は346,000語。

6) 英語II-A2

2年次 後期

宮内 信治

英語で著された学術論文の解釈に取り組んだ。分野にかかわらず学術論文がどのように構成されているかという基本的な知識を教授した後、看護倫理の分野で実際に出版された英語論文を通読した。記述内容における文法的な説明と解釈を行い、それをもとにして、現実の看護師の実態に関するデータや看護学の知識の一端に触れた。多読による総読書量は一年次からの通算で後期終了時一人平均180,000語。最も多く読んだ学生の語数は354,000語。

7) 英語II-B1

2年次 前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

8) 英語II-B2

2年次 後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

9) 英語III-A

3年次 前期

宮内 信治

講読担当 医療、看護、心理に関係のある英単語に関して、ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識をもとに単語の意味の成り立ちを理解させ、関連する語彙の習得と英語語彙数の増強を図った。

## 10) 英語III-B

3年次 前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

## 4 卒業研究

- ・救急外来における外国人への対応の調査と分析
- ・英語児童書における語彙の分析
- ・九州圏内の自治体ホームページにおける外国人向け医療情報提供の実態調査
- ・0市内における救急救命士の外国人傷病者の対応に関する現状と課題
- ・訪問看護の日米比較—時代変遷を通して—
- ・看護学生の英語に対する意識と学習効果の関連—CALLシステム・TOEIC導入に焦点をあてて—

## 3-5-8 基礎看護学研究室

### 1 教育方針

看護学の導入部分として看護の歴史やその発展及び看護理論を理解するとともに援助方法の基礎について学ぶカリキュラムを実施している。初学者であり、自らの看護に対する姿勢、看護の本質を考える機会としている。講義・演習・実習を行うにあたっては、個々の科目の学習進度にそって具体的な看護実践と関連づけたり、一人ひとりの学生の理解度や興味・関心について考慮しながら教授している。特に少ない講義・実習時間の内容をより効果的に履修させるための講義・実習前の予習プリントや講義・実習後のレポート指導などの事前・事後指導を強化している。

### 2 教育活動の現状と課題

さまざまな背景をもつ学生に対して、看護専門職について理解し、将来の進路に対しても方向づけができるように、教材の準備には時間を割いている。実技指導のデモンストレーションでは細やかな技術がよく視聴できるように、教員の演示と同時にビデオを撮影・放映して、技術手順が学生にも十分理解できるように視聴覚器材の活用に努めた。しかし、学生が反復して技術手順を視聴するには、教材が十分とは言えない。今年度は従来の看護技術評価表に基づき、技術の展開に応じた技術ポイントの解説内容を入れたDVDを試作した。今後、基礎看護技術のe-learningシステムの構築を図り、学生が主体的に学習し、看護技術が習得できるようシステムの完成に努力したい。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 看護学概論

1年次 前期・後期前半

志賀 壽美代、伊東 朋子

看護学の導入として看護とは何か、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動について理解させ、自らの看護に対する興味関心を高揚させることができるように配慮した。初期体験実習の事前準備も兼ねて、看護の場である様々の領域について調べさせ、グループワーク活動を通じて、成果発表の時間なども設け、積極的な参加が可能となるように教材を精選した。

#### 2) 看護理論入門

1年次 後期

志賀 壽美代、伊東 朋子

さまざまな理論を学び、対象理解のための概念や理論を学習することで実践に活用できるように、講義、演習、グループワークを行った。

1)看護理論とは、2)患者理解のための基礎理論、3)フローレンス・ナイチンゲールの理論、4)ヴァージニア・ヘンダーソンの理論と演習、5)ヒルデガード・E・ペプロウ、アーネスティン・ウィーデンバック他の理論で構成した。

評価は出席状況、レポート（グループワークでの役割や学びと実習にどのように活用するか）で評価した。

#### 3) 生活援助論

1年次 前期後半・後期、2年次 前期前半

志賀 壽美代、伊東 朋子、小野 さと子、塩月 成則、神取 美恵子、石田 佳代子、赤星 琴美、高波 利恵、佐藤 弥生、桑野 紀子、下山 優恵

1年次前後期に、生活過程、生命維持、2年次前期に、診断治療の各1単位を担当した。学内実習は援助技術習得のために2人1組を基本的枠組みとして2コマ続きの展開としているため、少ない時間数を補うためにも積極的に課外での時間を有効活用させて技術試験や筆記試験に臨ませている。

#### 4) 臨床看護総論

2年次 前期

志賀 壽美代、伊東 朋子

看護実践を展開するための問題解決法について学習させ、できるだけ平易に具体性を持たせて展開しながら、看護過程について学ばせ、臨地実習への方向づけを行った。思考過程を訓練するために担当以外の研究室内教員にも、授業に参加してもらい、学生への指導に携わってもらった。

## 5) 基礎看護学演習

2年次 後期

志賀 壽美代、伊東 朋子

看護の目的、目標を達成するための方法論である「看護過程」を事例を通じて展開させた。発表会を設け、グループワークした内容を共有できるように配慮した。また4年次後期に履修させる総合看護学への動機づけも行った。2段階実習を前にして、発表会では臨地実習での担当教員にも参加してもらい、学生の学習状況の把握と同時に学生の取り組みに対する助言や感想を聞いた。

## 6) 基礎看護学実習

2年次 後期後半、1年次 後期後半

志賀 壽美代、伊東 朋子、藤内 美保、石田 佳代子、小野 さと子、塩月 成則、神取 美恵子、河野 梢子、田中 佳子、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳、薬師寺 綾、大賀 淳子、津隈 亜弥子、高波 利恵、佐藤 弥生、下山 優恵

既習科目の理論と実践が統合できるように実習前指導・実習後指導には特に力を入れている。患者1名を受け持つ、本格的な実習としては初めての学習であるため、実習施設の看護部長による講話を依頼し、実習に対する動機づけ等も実施した。また3実習施設、14病棟での実習が望ましい形で展開できるように担当教員や学生の構成メンバーを十分に検討し、実習施設での備品・消耗品等の整備にも努めた。

## 7) 看護と遺伝

2年次 前期後半

吉河 康二、定金 香里、岩崎 香子

講義前半では、22年の看護師国家試験に遺伝分野が組み込まれたことを考慮し、基礎的な遺伝の仕組みをしっかりと学習することに重点を置いた。メンデル遺伝および遺伝疾患発現、遺伝子変異が関与する疾患や体質との関連について講義を行い、看護師として知るべき単一遺伝子疾患の遺伝メカニズムを理解できるよう配慮した。講義後半では臨床遺伝学の立場から、メンデル遺伝病、多因子遺伝病、ミトコンドリア遺伝病、および染色体異常症について概説した。さらに、遺伝学的検査の概要を述べるとともに、実際の遺伝カウンセリングのおいてどのように応用されるのかについて述べた。

## 4 卒業研究

- ・ 介助動作の身体負担軽減のための効率の良い上肢の力発揮の検証  
～生理学的視点からの改良～
- ・ 認知症の人々の嚥下機能評価法の現状と課題～文献検討から～
- ・ 在宅人工呼吸器装着患者の介護者の睡眠に影響する要因  
～ALS患者の介護者のインタビュー調査より～
- ・ 筋委縮性側索硬化症患者に対する睡眠援助  
～ラベンダーの香りを付加した手浴を用いて～
- ・ 手記にみる余命告知後の別れの準備
- ・ 臨床看護師のやりがいに影響する要因について～文献検討より～

## 1 教育方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を科学的にアセスメントできる能力を養うことを目的としたカリキュラムを実施している。看護学の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的・心理的・社会的側面から看護学の視点でアセスメントできることがねらいである。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」「看護アセスメント方法論」「看護アセスメント学実習」である。身体的な側面をアセスメントするために必要な知識を学ぶことが主な目的である。主要な疾病の理解や病態の理解に加え、これらの知識をもとにどのような方法で健康問題をアセスメントするか具体的な方法論を教授している。

## 2 教育活動の現状と課題

フィジカルな部分を重点におき、対象の健康問題をアセスメントするための能力を高めるには、疾病や病態などの基本的・専門的な知識が必要である。人間科学講座での生体科学、生体反応学などの知識を想起させ、さらに成人・老年看護学へつなげられるための内容を教授するように配慮し、教授している。具体的な科目は、「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」「看護アセスメント方法論」「看護アセスメント学実習」である。基礎的な知識を確実に身につけられること、臨床的な見方や考え方ができることが課題である。

## 3 科目の教育活動

### 1) 看護アセスメント方法論

2年次 前期後半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

看護アセスメント方法論は、フィジカルアセスメントの基礎知識、健康歴聴取、全身状態の観察、消化器系、循環器系、呼吸器系、感覚・運動系、脳・神経系の患者のアセスメントを中心に教授した。3コマ連続の講義で前半は病態の説明、後半は学内実習室でフィジカルイグザミネーションとした。3人の教員で80人の学生を指導するにはきめ細かな指導が困難であるため、フィジカルイグザミネーションのデモンストレーションでポイントを強調するように配慮するとともに、学内実習の終了時にまとめを行い、学生全員の理解が深まるよう工夫している。高齢者のボランティアの方々の協力を得て、全身のフィジカルアセスメント演習を行い、インタビューや計測によって得られたデータをグループメンバーで共有し、解釈分析して健康問題について検討した。

また、臨床現場で遭遇しやすい場面を提示し、臨床判断する課題を提示した。同様の場面を2グループが検討する演習形式をとり、発表では同じ場面でも判断した内容が異なりディスカッションでき、学生の気づきも大きい。最終日に筆記試験と実技試験を実施した。

## 2) 看護疾病病態論 I

1年次 後期後半

藤内 美保、石田 佳代子

看護疾病病態論Iは、循環器系、呼吸器系、消化器系、運動器系、腎・泌尿器系の疾患を教授した。各系統の解剖学、生理学を復習し想起させながら、疾患の概念や病態、症状のメカニズム、検査、診断、治療を中心に教授した。可能な限り図式して理解を得やすいように配慮した。教科書は系統看護学講座シリーズを使用し、学生が1冊の本をしっかりと読むことが重要であると考え、教科書に基づき教授した。また進級試験の範囲でもある病気の地図帳や健康の地図帳の内容も教授するとともに配布資料も提供した。後期後半の3ヶ月間、週に4コマのペースで専門的な内容が膨大となり混乱しやすいため、各系統別の講義が終了するごとに中間試験を実施した。

## 3) 看護疾病病態論II

2年次 前期前半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

看護疾病病態論IIは、運動器系、脳・神経系、代謝・内分泌系、アレルギー・膠原病、生殖器、耳鼻咽喉、眼、皮膚の疾患を教授した。解剖学、生理学を復習し想起させながら、疾患の概念や病態、症状のメカニズム、検査、診断、治療を中心に教授した。前期前半の3ヶ月間、週に4コマのペースで専門的な内容が膨大となり混乱しやすいため、各系統別の講義が終了するごとに中間試験を実施した。

## 4) 看護アセスメント学実習

2年次 後期後半

藤内 美保、志賀 壽美代、石田 佳代子、伊東 朋子、河野 梢子、田中 佳子、小野 さと子、塩月 成則、神取 恵美子、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳、高波 利恵、佐藤 弥生、桑野 紀子、薬師寺 綾、津隈 亜弥子

看護アセスメント学実習においては、県立病院8病棟と赤十字病院4病棟および今年度からアルメイダ病院4階東西、5階東西の計16病棟に学生5～6名を配置し、患者1名を原則的に受け持たせ、アセスメントのプロセスを学ぶための実習を行った。実習目標の到達は、個人差があるものの、実習目標を到達し、学生は積極的に学ぶ姿勢があった。各実習施設の実習指導者からも大変熱心な指導の協力が得られている。新型インフルエンザ対策もワクチン接種など万全におこなっていたので、実習中の罹患者はいなかった。インシデントの発生もなかった。

## 4 卒業研究

- ・ 新人看護師のフィジカルアセスメント実践能力の実態と実践上の困難  
－看護基礎教育への提案－
- ・ 医療サービスが充実している地域におけるNP（診療看護師）導入の可能性
- ・ ALS患者の家族からみた「よい看護師」に関する記述的研究
- ・ 高齢者の脱水症予防に必要な知識を災害時の看護に応用するための検討
- ・ 患者のADLの拡大のために看護師間で情報を共有することの意義  
－急性期病棟に勤務する看護師へのインタビューを通して－
- ・ 過疎地・無医地区で求められているNP（診療看護師）とは

## 1 教育方針

成人・老年看護学の学習は、成人期・老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標としている。そのため、成人看護学概論、老年看護学概論、成人・老年看護学援助論Ⅰ、Ⅱ、成人・老年看護学実習の各教科を設定している。成人・老年看護学に関する講義では、専門的知識を習得するとともに、臨床で働く様々な医療職者（医師、看護師、管理栄養士、言語聴覚師）を学外講師として招き、実際に医療・福祉現場に即した対象者の理解や援助方法を学ぶことができるようにしている。さらに成人・老年看護学演習において、急性期・慢性期・終末期の模擬事例へのケアについて考え学びを深め、ロールプレイを通して関連の看護技術や患者指導の実際を学ぶ機会を取り入れている。その上で、成人・老年看護学実習では、医療機関や老人施設において、知識・技術・態度を統合した看護の実践を学ぶことができるようにしている。

## 2 教育活動の現状と課題

成人・老年看護学は青年期から老年期までの長いライフスパンにある対象者への看護の学びであり、その学習範囲は非常に広範囲にわたっている。そのため限られた時間数の中での学習内容と方法を吟味しながら展開している。成人・老年看護学概論では基礎となる対象者の理解と看護について学生が考えることが必要であり、見近な成人・老年者をとらえながら思考を深められるように配慮している。特に対象者を理解するための理論の学習を重視しているが、講義方式だけではなく事例展開つながる学生の主体的学習方法が今後の課題である。また、成人・老年看護学援助論や成人・老年看護学演習では、幅広い年齢層の対象理解や多様な疾病とその治療方法や援助方法の理解を助けるために、具体的な事例、機械器具を提示し臨床経験のない学生の関心と学習意欲を高め印象に残る講義をするようにしている。試験問題・解答に関する解説の時間を確保することを課題とし、取り組を行っているが、講義時間を用いた解説は時間制限があり、学生との通信ネットワークを用いた試験解説や授業に関する質疑対応を取り入れるなどフレキシブルな方法を導入することが課題である。

## 3 科目の教育活動

### 1) 成人看護学概論

2年次 前期前半

小野 美喜

成人期に生じる多様な健康問題と対象へ看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける成人期の位置づけと特徴を発達・行動、健康の側面から総合的に理解し、看護を実践していく上で必要な知識を教授した。成人期の発達課題および成人の健康増進、疾病予防、健康障害のレベルに応じた看護について、事例をもとにイメージできるように工夫をした。特に成人を理解するための理論として学習理論や危機理論等の教授を強化した。成人の生活であらわれうる健康問題と関連させながら講義を行い学生の理解を深めたが、概念の理解には個人差がみられた。来年度から新カリキュラムとなり成人看護学概論の講義時間数が増加することから、学習形態にグループワークを取り入れるなど、学生自身が理論を使い思考を深めていくことを課題としている。

## 2) 老年看護学概論

2年次 前期前半

小野 美喜

老年期に生じる健康問題の特徴と高齢者への看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける老年期の特徴、健康問題をもつ高齢者の身体的、心理的、社会的問題を理解し、慢性疾患や機能障害を持ちながら日常生活を送る対象への看護援助に必要な知識を教授した。特に加齢による変化をとらえ、ADLの援助と自立の拡大について、思考を深められるように教授した。しかし、講義時間の中では1つ1つのADLについて十分に時間をかけることができなかった。来年度から新カリキュラムでは時間数が増加することから、学生がより主体的に学習ができるよう授業方法を工夫していきたい。また、実習施設である老人施設から外部講師を招き、施設で生活する高齢者の実情について講義する機会を設けた。認知症に伴う症状や援助役割などが実例をもって示され、学生の理解が深められた。

## 3) 成人・老年看護援助論 I

2年次 前期後半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳

成人期・老年期にある対象を身体的、心理的、社会的、精神的側面から総合的に理解し、急性期および慢性期、終末期の健康問題への援助を学ぶ目的で様々な領域の看護援助について教授した。手術期、循環器系、消化器系、内分泌代謝系、感覚器系の障害をもつ対象の看護援助について、学生が必要な知識と技術を習得できるように講義媒体や教授方法を工夫して授業を展開した。特に技術については、点眼技術やストマのパウチ交換など、できる限り自ら患者体験や技術を実施する機会を設け、他学生との意見交換やレポートをまとめるなどの活動を取り入れ、学生の積極的参加を促した。また、臨床現場で活動する外部講師による講義を取り入れることにより、援助論の学習内容が強化されるよう実施した。

## 4) 成人・老年看護援助論II

2年次 後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳

成人期・老年期にある対象を身体的、心理的、社会的、精神的側面から総合的に理解し、急性期および慢性期、終末期の健康問題への援助を学ぶ目的で様々な領域の看護援助について、教授した。呼吸器系、血液・免疫系、生殖器系の障害をもつ対象者や、終末期にある対象者への援助について、学生が必要な知識と技術を習得できるよう、講義媒体や教授方法を工夫して授業を行った。特に終末期の看護については、外部講師を招きホスピスケアの実際について学ぶ機会をつくり、学生が人の終末期について考えを深められるよう展開した。

## 5) 成人・老年看護学演習

3年次 前期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳

成人期・老年期の対象の健康問題に応じた看護過程の展開を学習する目的で、学内演習を取り入れている。学生はすでに基礎看護学で看護過程の展開を学んでいることから、ここでは、成人期・老年期の急性期、慢性期、終末期の健康問題に着目し、紙面患者を用いた対象の理解、アセスメント、看護の診断、ケアプラン、評価修正の一連を展開した。講義にて演習に必要な知識を確認し、特に患者の個別性のあるケアプランや評価について教授した。その後、急性期、慢性期、終末期の紙面患者をグループに割り当て、記録による看護展開を個人およびグループで実施した。また今年度は、実際に立案したプランをロールプレイする機会を設け、模擬患者の反応から評価する学習を強化した。学生がプランの現実性や個別性を自己評価できる機会となり効果が大きかったことから来年度以降も継続することにした。例年のように学生一人一人に担当教員が面接指導することで、細部にわたる指導ができた。

## 6) 成人看護学実習

3年次 前期後半・後期前半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳、小野 さと子、塩月 成則、神取 美恵子、河野 梢子、田中 佳子、高波 利恵、佐藤 弥生

成人看護学実習は、各看護領域別の看護の特性や看護過程をふまえ、個々の対象に応じた看護実践を学ぶことを目的として、大分市内の総合病院で実習を行った。実習施設の事情により昨年より少ない8病棟にて、一病棟あたり5～6名で実習を展開した。急性期病棟では、早期退院のため受け持ち対象者の確保に難しい面があり、来年度は実習施設を新たに加えて配置部署を増やし、1グループあたりの学生人数を減らすことを課題としている。また、新型インフルエンザの影響があり、実習前に対策マニュアルを作成し臨んだが、実際に発症したケースでは、学生・担当教員・専任教員・施設指導者の情報伝達が円滑ではなかったため、来年度は即時性のある情報伝達になるよう改善して臨みたいと考えている。実習内容については、各担当教員が常時臨床で個別指導にあたるため、学生個々の到達目標や技術の習得などが図られ実習効果をあげている。特に今年度活用いた看護技術修得確認シートを使用した実習であり、学生の主体的学習が充実した。

## 7) 老年看護学実習Ⅰ

3年次 前期後半・後期前半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳、小野 さと子、塩月 成則、神取 美恵子、河野 梢子、田中 佳子、高波 利恵、佐藤 弥生

老年看護学実習Ⅰは、各看護領域別の看護の特性や看護過程をふまえ、老年期にある個々の対象に応じた看護実践を学ぶことを目的として、大分市内の総合病院で実習を行った。実習施設の事情により昨年より少ない8病棟にて、一病棟あたり5～6名で実習を展開した。急性期病棟では、早期退院のため受け持ち対象者の確保に難しい面があり、来年度は実習施設を新たに加えて配置部署を増やし、1グループあたりの学生人数を減らすことを課題としている。また、新型インフルエンザの影響があり、実習前に対策マニュアルを作成し臨んだが、実際に発症したケースでは、学生・担当教員・専任教員・施設指導者の情報伝達が円滑ではなかったため、来年度は即時性のある情報伝達になるよう改善して臨みたいと考えている。実習内容については、各担当教員が常時臨床で個別指導にあたるため、学生個々の到達目標や技術の習得などが図られ実習効果をあげている。特に今年度活用いた看護技術修得確認シートを使用した実習であり、学生の主体的学習が充実した。

## 8) 老年看護学実習II

4年次 前期前半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳

施設に入所している高齢者の生活の支援を通して、対象を理解し、保健・医療・福祉分野における看護職の役割と課題を学ぶ目的で、大分市内および由布市内にある介護老人保健施設3施設、介護老人福祉施設2施設の合計5施設において2週間の実習を行った。1グループあたり6～10名配置であり、前半・後半に分けて実習を行った。短期間の実習ではあるが、各担当教員が施設で実際に指導にあたり、学生の学習課題が達成できるようにした。ただ、実習では多職種との連携も大きな学習課題の1つであり、学生が教員に依存しすぎず、自ら連携行動がとれることができるようにすることが課題である。さらに、例年のように実習最終日に共通テーマを設け、グループ討議を実施しているが、多人数で議論するために意見の集約が難しく、テーマ設定に時間を要し、実際の討議に時間が不足するなど効率的ではなかった。来年度からはディスカッションテーマを複数に分科し、討議が充実するよう図る。

## 4 卒業研究

- ・ホスピス・緩和ケア病棟の看護師が行う遺族ケアによる影響を与えた要因
- ・救急外来に勤務する看護師のやりがいに関する研究
- ・在宅酸素療法を受けている療養者の緊急の判断基準と対処
- ・ある認知症高齢者のグループリビングでの看取りにおける関わり
- ・乳がん患者会の活動とレジリエンス及び精神的回復力との関係
- ・終末期患者を受け持った看護学生が感じた「生きること」の尊さ
- ・地方都市の二次救急医療機関における救急外来トリアージの実態－高齢者に焦点をあてて－

## 3-5-11 小児看護学研究室

### 1 教育方針

小児看護学の講義と演習、実習を通して、発達過程にある小児の保健と小児看護の特殊性を理解することをねらいとしている。そのため、小児看護学では対象である小児の成長と発達について発達理論を学び、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を包含する小児看護の特殊性について理解を深め、小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶことが目的である。

小児看護学では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族への関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができるよう成長することを期待して教育を行っている。学生が健康・不健康に関わらず小児とその家族への援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築できるよう配慮している。

## 2 教育活動の現状と課題

小児看護学の講義は、3年次前期に小児看護学概論で小児を取り巻く保健、福祉、看護などの課題を学び、学生が自分自身の「子ども観」をレポートし、自己の特性を認識するように工夫している。3年次前期・後期の講義、学内演習、実習を通して、学生は多くの小児に関する専門的知識を学ぶ。学んだ専門的知識を実習で実践し、看護場面に知識を応用することは容易なことではないだろう。学生は対象である小児とその家族と出会い、小児看護とは何かを悩みつつ、看護職あるいは大人としての役割を意識し、看護活動ができるように成長するようにカリキュラムを構成している。

最近は少子化で兄弟姉妹も少なく、小児が周囲にいない、また接したことがないという学生が少なくない。講義では視聴覚教材を多用して、動的な子どものイメージを持たせるように配慮している。毎回の講義終了後に、講義内容に対する質問や意見を求め、次の講義時間に質問に答え、学生の疑問を残さないようにしている。学生の評価アンケートを2年次の小児看護学概論で実施したが、休講などで連続性が維持できず十分ではなかった。しかし、欠席も少なく学生は意欲的に参加していた。

小児看護学の学習内容の定着については、3回に分けて小テストを行い、重要な内容の知識の定着のために工夫したり、再試験を実施してフォローした。次年度は講義コマの変更も考慮して、講義の内容を見直しする。

## 3 科目の教育活動

### 1) 小児看護学概論

2年次 前期前半

高野 政子

小児看護の特質と概要を理解することを最終的な目的としている。基本的概念として小児の特徴を発達的にとらえ、小児と小児を取り巻く環境を考え、小児保健、小児医療の動向を述べ、教育や福祉の視点からも小児看護の役割と重要性について教授した。具体的な内容は次の通りである。1) 小児看護学の変遷と小児看護の特殊性、2) 世界の子どもの健康と医療、3) 子ども観の変遷と子どもの権利、4) 日本の母子保健・行政と母子福祉、家族と親子関係、5) 小児の成長と発達総論、6) 小児の形態・機能的発達、7) 心理的・社会的・言語的発達である。最終回には、学生のフィールドワークの親と子の観察レポートを発表して意見交換することで、子どもを意識的に観察するように動機づけを行った。

### 2) 発達と援助論

3年次 前期前半

高野 政子、田中 美樹、薬師寺 綾

小児の発達過程の特質を理解するための主要理論に基づき、小児の行動を多面的に捉え、発達過程の応じた日常生活の援助方法と保健を講義し演習を行った。また、健康障害のある小児とその家族への援助方法を教授した。主な講義項目は、1) 小児期の主要な発達理論、2) 小児各期の発達アセスメント、3) 乳児期、幼児期の保育理論と技術、4) 学童期、思春期の保健と看護、5) 病気の子どもと家族、6) 小児の健康障害と看護、7) 障害のある子どもと療養生活の援助、8) 親子関係に問題のある場合の看護ほかであった。学内での技術演習は、大学院生の協力を得て6名で、援助技術として検温、静脈点滴の固定、服薬介助や離乳食の実際などを指導した。指導の方法や内容は指導者間で統一して、20名ずつの4グループに分けてローテーションする方法で指導した。一方、看護過程の展開は、グループワークで実施した事例を2グループずつ発表し意見交換を行った。

### 3) 小児看護援助論

3年次 前期後半

高野 政子、田中 美樹、薬師寺 綾

前半は小児領域の主要な病態と疾患について講義形式で解説を行い、後半は学生のグループワークによる主要な疾患と看護について調べ学習の作業とその発表形式で行った。後半は臨地実習でよく出会う事例を5事例提供し、グループワークで看護過程を検討しまとめ発表する。演習では2つのグループワークを行い、学生には積極的な参加を期待している。学生個々に事例展開を求め、グループワークを通して互いの疑問点を話し合い発表する方法で行っている。真面目な取り組みが見られたが、一部の学生が個人ワークを軽視する傾向もあり、グループワークに全員が取り組んでいるかに注意している。

### 4) 小児看護学実習

3年次 後期前半

高野 政子、田中 美樹、薬師寺 綾、神取 美恵子

小児看護学実習は、大分県立病院に1グループ学生9-10人で6グループ(合計57人)、別府発達医療センターに学生4人で6グループ(合計24人)の配置で、専任教員と担当教員と臨床実習指導者の連携により指導を行った。学生1人に対象児1人の受け持つことを目指したが、在院日数の短縮化に伴い、約1/3の学生は実習中に2人の受け持ちを経験した。1人の子どもを継続できた場合は、学生が遊びの工夫などもみられたが、複数の子どもを受け持った学生は看護実践まで至らないということに指導側に課題となった。3日間の保育所実習は、子どもの理解やコミュニケーションができるようになり、病気を持つ子どもと家族への関わりがスムーズであった。7日間のうち外来実習を半日行っている。外来診療の場面に立会い子どもや家族の様子、外来看護師の指導のもと、子どもの発達に合わせた看護技術について学ぶことができた。実習では、受け持ち患児のバイタルサイン測定は全員が1~3回以上経験できた。本年は新型インフルエンザの影響で、受け持ち以外の患児の処置などに関わる機会が少なかった。最後の2グループは外来実習もできなかった。特に最後の6グループの学生は体調不良者が多かった。日常生活援助、処置などには積極的に取り組むよう指導された結果、検温(100%)、呼吸音聴取(92%)、心音聴取(84%)、血圧測定(71%)、清拭(65%)、食事介助など小児看護技術を実施できた。実習終了後、実習施設の実習指導者と専任、担当教員で実習反省会を持ち、意見交換を行った。学生の実習到達度や記録に差があると報告された。実習に対して学生が動機づけられ積極的な実習を行えるように指導することが課題と考える。

## 4 卒業研究

- ・大分県の農山漁村地域における病気の子どもの受療行動と医療ニーズ
- ・特別支援学校における看護師と養護教諭の医療的ケアの実施と連携
- ・食物アレルギーをもつ児と保護者に対する保育所看護師の取り組み
- ・思春期のてんかん患児(者)の病気認知に関する研究
- ・小児喘息の在院日数短期化にともなう看護師が行う退院指導の実際

## 1 教育方針

母性看護学では、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は母性看護学概論、母性病態論、母性看護援助論Ⅰ、母性看護援助論Ⅱ、臨床母性看護総論、母性看護学実習で構成している。特に母性看護学実習は周産期に重点をおいて実習を展開している。

助産学（選択科目）では、独自の判断で助産過程（母性各期および新生児期）を展開し、さらに母子および家族の健康と福祉を促進するための理論と方法を学ぶことを目的としている。科目は助産学概論、助産診断・技術学Ⅰ、助産診断・技術学Ⅱ、助産診断・技術学Ⅲ、助産診断・技術学Ⅳ、地域助産活動論、助産学実習で構成している。助産学実習の分娩取り扱いについては、指定規則において助産師または医師の監督下において1学生10例程度取り扱うことが定められており、本学では学部生9例以上、ダブルスクール学生（大学院生）12例以上取り扱うことを基本的姿勢としている。助産師教育では、卒業時点までに、変動し複雑化する社会の健康上のニーズに対応でき、母子の安全性（正常・異常の区別）が守れる判断力と実践力を持つことを教育目標としている。

## 2 教育活動の現状と課題

母性看護学では、学内で学んだ理論と技術を実習で実践し、理論と実践を結びつけることを目標としている。母性看護学実習では、実習施設は2か所であり、実習期間中の分娩数が施設によって異なり、学生81名中25名が分娩を見学できなかった。受け持ち患者の症例も正常褥婦だけでなく、帝王切開術後の褥婦や妊婦を受け持ち対象者として工夫している。また、施設によっては受け持ち患者の対象者が少なくなっており、受け持ち患者が初日に決定しない学生がいたので、今後に向けて実習方法等の検討が必要である。

助産学は3年次に助産学専攻者を決定している。助産学の講義開始にあたっては母性看護学援助論、臨床母性看護総論と並行して講義を行っている。また、助産学実習（分娩介助実習）は6週間で正規の期間では分娩例数が到達できず夜間実習と夏休みに実習期間を延長（2～3週間の延長）して、学生と教員の自己努力によって目標数に到達しているのが現状である。学部の助産学教育は時間外実習時間が多く非常に過密であることが課題である。今後は助産学を大学院教育へ移行させて講義時間、実習時間をしっかり確保した教育を行っていく必要がある。

## 3 科目の教育活動

### 1) 母性看護学概論

2年次 前期

林 猪都子

母性看護学の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖の側面から、女性の生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への援助活動を学び、母性各期における母性看護の役割と重要性について認識を深めることをねらいとして、母性の概念、リプロダクティブヘルス/ライツの概念、セクシュアリティ、母性看護の歴史、母子保健施策、母子保健統計からみた動向、母性看護に関する組織と法律、母性看護の対象の理解、ライフサイクル各期の健康と看護などについて教授した。本年度は初年度の講義なので講義資料作成に重点をおきわかりやすい授業展開に努めた。来年に向けて講義資料や内容を見直し、講義の充実に努めたていきたい。

## 2) 母性病態論

2年次 後期

関屋 伸子、宇津宮 隆史、上野 桂子、谷口 一郎、肥田木 孜、堀永 孚郎

母性看護つまり女性のライフサイクルにおける看護を实践するうえで主要な疾患の病態や生理を理解することを目的として、主要な女性生殖器疾患及び周産期の異常の病態生理と検査・治療などを教授した。講義回数は全15回であり、科目終了後に筆記試験を実施し評価をした。授業内容は女性生殖器疾患の主な症状及び産婦人科学的検査と治療や、女性生殖器疾患の病態生理と治療（子宮頸がん、子宮筋腫、月経異常、性感染症、人工妊娠中絶他）、ハイリスク妊娠・分娩についてであった。近年の女性における出産年齢の高齢化や少子化に伴って需要が増加している不妊治療を受ける対象への支援に関する内容が充実しているが、今後は産科学領域の疾患内容の強化と充実が検討課題である。授業内容は事例を通したものが多く学生は大変興味を示していた。

## 3) 母性看護援助論Ⅰ

2年次 後期

関屋 伸子、戸高 佐枝子

母性看護の实践者となるために、第一に必要な妊娠が母児及びその家族に及ぼす影響とその看護について学ぶことを科目の目的とした。講義回数は全8回で、科目終了後に筆記試験を実施し学習の評価をした。授業内容は、妊娠期の母体及び胎児の生理的变化とその影響因子や母子とその家族の看護として、妊娠の定義からはじまり、胎児の成長と健康状態の観察、妊娠による母体の身体的・心理的特徴と看護、妊婦健康診査と妊娠期の保健指導、妊娠がその家族に及ぼす影響と看護についてであった。講義では、DVDやVTRなど視聴覚教材を用いて看護アセスメントと看護実践を関連して学生がイメージしやすいようにした。実際に視聴覚教材を用いた際の学生は画面に見入って声を出して驚いたり感動したりする反応が見受けられた。今後は、学生自身の母性観・父性観の成長を図り得る授業方法を検討することで、母性看護学を自らの問題として印象付ける工夫が必要である。

## 4) 母性看護援助論Ⅱ

3年次 前期

関屋 伸子、渡辺 しおり、石岡 洋子

保健師助産師看護師法に規定されている看護師業務である「じよく婦に対する療養上の世話又は診療の補助を行う」を实践しうるために、主に産褥期の母子及びその家族のニーズと母性看護について学ぶことを主な目的とした。そのために2年次までの既習学習である妊娠期・分娩期の看護に関する内容を踏まえた内容とした。講義回数は全14回で、科目終了後に筆記試験を実施し評価をした。講義は、褥婦を取り巻く家族や新生児への援助が理解できるように努めた。また、臨床実習施設のひとつから助産師長を非常勤講師に迎えて実際の臨床での事例を通して講義が展開できるように工夫し学生の満足度も高かった。

## 5) 臨床母性看護総論

3年次 前期

関屋 伸子、軽部 薫、石岡 洋子

ウェルネスの視点で褥婦と新生児およびその家族の看護が展開できることを科目の目的とした。そのため、全8回の講義回数においてブルームのTaxonomyである認知・情意・精神運動領域3領域を意識した授業展開とし、学習評価はレポート、出席および参加態度とした。母性看護過程ではペーパーペイシェントを用いてグループワークあるいは個人ワークにおいて一人の学生が正常と異常のいずれの事例も看護過程の展開が経験できるように工夫した。また、看護実践に必要な基本的な母性看護技術である妊婦計測や沐浴などをモデル人形などの教育教材を用いて修得させ、学生の「あたま、こころ、からだ」が一体となって母性看護技術を実践しうるように努めた。今後の課題としては、学生の既習学習であるウェルネスの視点以外の看護過程を用いることが母性看護学において学生の学習に効果的であるか否かを検討する必要がある。

## 6) 母性看護学実習

3年次 後期

林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 信子、乾 つぶら、軽部 薫、石岡 洋子、石川 幸

母性看護学実習施設は2施設であり、実習期間は1グループ2週間(延べ12週間)であった。学生および教員の人数は、堀永産婦人科医院は学生4名配置(合計24名)、担当教員1名配置、大分県立病院は学生9名~10名(男子学生1名~2名)(合計57名)、担当教員2名配置した。実習は学生1名につき妊婦または褥婦を1名受け持ち、妊産褥婦、新生児の看護について学び、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開を学習した。すべての学生に生命の誕生の場面を通して自己を振り返る実習を期待し、母性各期の保健指導をそれぞれ工夫して取り組むように努力した。本年度は分娩に見学ができなかった学生が25名いた。また、受け持ち対象者が初日で決定しない学生がいたため、学生間2人ペアで行動した。さらに、帰学日を1週目金曜日にした施設は対象者が継続的に受け持つことができ実習が効果的であった。2週目は木曜日に帰学日を設けることで、記録のまとめや技術の見直し、最終カンファレンスの準備がスムーズに行えた。今後の課題は施設によっては受け持ち患者の対象者が少なくなっているため、今後に向けて実習方法等の検討が必要である。また、本年度より他施設と一緒に実習を行い控室の過ごし方や受け持ち患者の援助等、教員が配慮することで実習がスムーズに行えた。今後も学生が実習にスムーズに行えるように教員の関わりが必要である。

## 7) 助産学概論

3年次 前期

林 猪都子、関屋 伸子、石岡 洋子

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と心理、社会的変化の中で期待される役割と重要性について理解する。また、日本および諸外国における助産の歴史、助産師教育、助産師活動について理解を深め、助産師活動に積極的に取り組む姿勢を養う。さらに、生命倫理や職業倫理について学び、職業人としての倫理観を醸成することをねらいとして教授した。本年度は初年度の講義なので講義資料作成に重点をおき、小人数制で学生が授業に参加しやすい参画型の授業展開に努めた。来年に向けて講義資料や内容を見直し、講義の充実に努めたていきたい。

## 8) 助産診断・技術学Ⅰ

3年次 前期後期

乾 つぶら、佐藤 昌司、戸高 佐枝子

正常な妊娠・分娩の健康水準を診断するために必要な基礎的知識、及び、正常からの逸脱を識別するために必要な妊娠・分娩の異常に関する基礎的な知識を学ぶことを目的に、妊娠期・分娩期の助産診断、助産ケアの実施するための援助技術、保健指導等についての講義、演習、グループワークを行った。妊娠期画像診断に関しては、産科医師、及び、開業助産師と協力妊婦を外部講師に依頼し、妊娠期の超音波診断の講義と演習を実施した。学生は画像を見学したり機械操作を実施することを学んだ。産前教育では学内で指導案、補助教材等を作成して模擬両親学級を体験した。分娩期の診断技術ではレオポルド触診法、胎児心音聴取等の復習と内診・クスコ診を経験し、分娩経過と児頭回旋との関連が理解できるように骨盤模型と内診モデルを活用して講義と演習を行った。

講義、演習、グループワークすべてが参加型の活動であり、学生は積極的に発言を行い参加していた。

## 9) 助産診断・技術学Ⅱ

3年次

梅野 貴恵、軽部 薫、和田 美智代

女性のライフサイクルにおけるセクシュアリティに関する諸問題を理解し、マタニティサイクルにある褥婦および新生児の助産診断を行い、助産を実践するために求められる内容を教授した。授業方法は講義と演習を組み合わせで行った。産褥ケアの母乳育児支援については、実践で活躍する外部講師に2コマ依頼し、講義と演習を行った。学生は助産師の支援で母乳育児を推進していくことが可能であることを学び体験を通して実感していた。新生児の演習では、「新生児蘇生法アルゴリズム」に則り、新生児モデルで体験した。産褥期の退院指導では、4グループに分かれ、指導案、パンフレットの作成を行い、ロールプレイで発表し意見交換を行った。学生は、すべての講義、演習に積極的に参加した。

## 10) 助産診断・技術学Ⅲ

3年次 前期後期

佐藤 昌司、飯田 浩一、宇津宮 隆史、中村 聡、軸丸 三枝子、嶺 真一郎、豊福 一輝、後藤 清美、林下 千宙

マタニティサイクルにおける女性の医学的管理と異常、並びに婦人科疾患とそれに関する健康管理、新生児医療について理解を深めるため、各専門分野の産婦人科医師、新生児科医師による講義が行われた。学生は積極的に受講し、各領域の知識を深めることができた。

## 11) 助産診断・技術学IV

4年次 前期前半

梅野 貴恵、乾 つぶら、軽部 薫、石岡 洋子

分娩期の助産診断に基づき、助産過程の展開を行い、助産学実習で活用できるように教授した。日本助産診断・実践研究会のマタニティ診断の概念枠組みを活用し、助産診断の考え方について講義を行い、正常経過をたどる初産婦の事例を用いて分娩期の助産過程の展開を行なった。学生は個人課題で取り組んだのち、グループワークと全体検討会を実施することで理解を深めた。ダブルスクールの5名は、さらに1事例異常事例に取り組み、時間外に検討会を行った。評価は、提出されたレポート、および助産過程に必要な助産の基礎知識に関する筆記試験を行い、総合的に評価した。

分娩介助演習では、助産学実習で活用できるようにするために、側面介助法、正面介助法の2通りの介助法を教授した。演習では、VTRで一通り確認したのち、教員がデモンストレーションを行い、3グループに分かれ、役割（直接介助者、間接介助者、新生児係、産婦）を決め、教員の指導のもとで実施した。学生は、最初は手順に沿って実施し、その後、空き時間を利用して一通りの分娩介助技術が行えることを目標に分娩介助評価表を用いて各自5回以上の直接介助を練習した。技術の評価は、グループの評価者、教員が技術チェックを行った。

## 12) 地域助産活動論

4年次 後期前半

宮崎 文子、林 猪都子、乾 つぶら、戸高 佐枝子

助産管理の概念について、その本質と機能、助産管理（経営管理）の歴史的変遷、開業件を持つ専門職業人としての概括的な知識・考え方および地域助産活動について必要な理論と方法について教授した。

講義内容は学生の興味を重視して、事例を踏まえての展開と最新情報の提供に留意している。改善策は、特に助産師の自律の視点から助産所経営管理の中のマーケティング手法と財務管理に焦点を絞り事例演習を強化した。課題としては、今後、経営管理の理解を深めるためには助産所の関連性を強化することである。

## 13) 助産学実習

4年次 前期

林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 信子、乾 つぶら、軽部 薫、石岡 洋子、石川 幸、姫野 綾

助産学実習は、人間尊重の基本理念に基づき助産の診断および技術を用いて助産を実践する。母子とその家族を受け持ち健康的な生活を営むうえで必要な援助を行う能力を養うことをねらいとして実施した。本年度の助産学選考学生は16名（うちダブルスクール5名）である。実習施設は分娩介助ができる病院、診療所4施設と助産所3施設、合計7施設である。例年分娩介助数を学部生10例程度（9例以上）、ダブルスクール学生（大学院生）12例以上を目標に実習に取り組んでいる。課題は、分娩介助例数到達のためには、夜間実習と実習期間の延長（5名10日間、6名3週間の実習延長）によって、時間外実習時間が多く、学生と教員の自己努力によって9例に到達していることである。今年度の学生の平均分娩介助数は10.5例であった。昨年に比べて平均分娩介助数が多いのはダブルスクールの大学院生が多いからと思われる。今後は実習期間を延長して正規の時間で実習することが望ましいと考える。

## 4 卒業研究

- ・ハイリスク褥婦とローリスク褥婦の母乳育児指導に関する意識の相違
- ・父親の育児参加に関する研究 ―育児雑誌の分析―
- ・祖母の母乳育児に対する意識に関する研究―祖父母学級受講の有無による比較―
- ・助産師外来に対する妊婦の期待と満足と比較
- ・母子健康手帳に対する父親の意識～父親の現在の母子健康手帳の活用状況の実態～
- ・家族計画に関する夫婦の意識
- ・施設選択理由と出産の満足に関する研究―助産ケアに焦点をあてて―

### 3-5-13 精神看護学研究室

#### 1 教育方針

精神看護学の学習では、すべての領域において「人の心に焦点を当てた看護を行う」ために必要な、視点・知識・技術・態度を習得することをめざしている。そのためのカリキュラムは、精神看護学概論・精神看護援助論の2つの講義、学内での精神看護学演習、臨地での精神看護学実習、という流れで構成されている。精神看護学においては「対象者との相互作用の中で、対象者について、および自分について理解し、互いの関係性に着目すること」の意義を理解することが重要なので、これらは特に演習・実習を通して体験的に学習できるよう努めている。卒業研究に関しては、できるだけ各学生の関心に沿ったテーマで研究を進められるよう配慮している。

#### 2 教育活動の現状と課題

講義では、心の健康と疾患、精神医療史、精神的健康問題をもつ人への援助方法などを扱い、できるだけ具体例を紹介して、学生がイメージをもちやすいよう努めている。演習では、自己理解や、互いの関係性に目を向けることについて学ぶための体験的学習を行い、また、当事者やその家族の実際にふれたり、実習施設院長の話を聴いたりする機会をもっている。以上においては、小レポートなどで学生の感想・疑問・希望などを把握し、次回以降に反映させることを心がけている。実習は、精神科医療機関において、精神疾患をもつ人、その家族、およびさまざまなスタッフの協力により行っている。実習に出るときには不安を抱えている学生も多いが、その不安も含め自分について、相手について、互いの関係性について振り返ることを支援した。初めはとまどいがちの学生も、さまざまな人との関わりを通して、座学では経験できない学びと、精神科医療に対する認識を深めたようであった。教材・学習支援ツールの開発に努めること、科目間の連携をいっそう密にすること、個別の学生の状況に応じた指導を行うことなどが、引き続きの課題である。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 精神看護学概論

2年次 後期

影山 隆之

授業内容に大きな変更はないが、新しいテキストを採用したことから、順序を組み替え、必要部分はハンドアウトを配布して補足した。精神疾患をもつ当事者にふれることができる視聴覚教材をできるだけ紹介した。授業内にペーパーで学生の意見を集め、その時間の講義進行に活用した。授業の最後に、興味・理解・自由質問についての無記名式アンケートを自由提出させ、これに基づいて次の時間に補足説明をしたことで、「わからないまま」にすることはある程度防げたと思われる。関連領域の国試過去問を、次の時間の冒頭にできるだけ紹介した。授業順序の組み替えに伴い時間配分が予定通りにゆかなかったことから、ハンドアウトのタイムリーな準備、およびハンドアウトとテキストとの対応箇所を明示することが、次の課題である。

#### 2) 精神看護援助論

3年次 前期前半

大賀 淳子

講義内容の精選方針は例年にならい、精神科医療および実習施設の現状を重視した。精神科医療の地域移行を踏まえ、講義の早い段階で地域における精神科医療と看護師の役割について扱った。さらに、毎回のミニレポート、ミニテストのフィードバックは今年度も踏襲し、学生の講義への積極的な参加を促すことができていると判断している（授業アンケート結果より）。ハンドアウトの資料の質を高めることが次年度への課題である。

#### 3) 精神看護学演習

3年次 前期後半

影山 隆之、大賀 淳子、津隈 亜弥子

実践を見据え対象者との相互作用の中で、対象者を理解すること、自分自身を理解すること、互いの関係性に注目することが、看護する上で実践的にどう役立つかを考えること、また入院医療以外の精神保健医療サービスについて具体的に学ぶことをねらいとした。

上記のことを具体的に学ぶために、精神疾患を有する当事者と活動等の視聴覚教材や、当事者の家族・実習施設の病院長による特別講義を取り入れ、現実的で実践に即した内容を構成した。

また、自身の知覚・思考・感情への気づきを重視し、全体でのディスカッションや各回のリフレクションをしながら、学生の理解度に応じて学習を進めた。入院医療以外の精神保健医療サービスを学ぶためのグループワークは実践で出会う場面を想定しながら進めた。

授業後に毎回提出されたミニレポートには学生の高い興味や関心が示された。しかし、個別の理解度の把握や授業への積極性を把握するには限界があり、演習での学びを実習指導に生かせるような連続性の工夫の検討が必要である。

#### 4) 精神看護学実習

3年次 後期前半

影山 隆之、大賀 淳子、津隈 亜弥子、桑野 紀子、下山 優惠、佐藤 貞子

対象者の精神的健康に焦点を当てた看護を提供するために、対象者との相互作用の中で、対象者について理解するだけでなく、自分自身についても理解することや、互いの関係性に注目することの必要性を、大分丘の上病院において具体的に学ぶことをねらいとした。また、実習を通して精神科医療について再考し、理解を深めることを目的とした。

今年度の大きな変更点は、学習の場を2つ（入院治療・通院治療）に分けてスケジュールを構成し、ほぼ全員が病棟の実習と地域生活を支えるサービス（デイケアや訪問看護など）の実習を経験できたことである。この配置により、精神科医療の一連の流れを知ることができ、対象となる人々を「生活者」として捉えやすくなった。また、実習スケジュールによって学生編成が変わり、多彩なカンファレンスが展開され学習効果が高まった。さらに他職種の関わりについて情報共有ができ、精神科医療について理解を深めることができた。また、実習で出会うあらゆる人との人間関係の中で生じてくる感情を取りあげて、その内容を吟味することによって、自分、相手、相手との人間関係、双方を取り巻く状況についての理解を深めるものとなった。学生自身も治療的環境の一部であること、自身の感情をアセスメントの道具として相手との関係を構築していくことが、精神疾患を有する人への看護において重要であることをカンファレンスやレポートで述べていた。

今後、学生が意欲的に臨めるような実習構成、講義・演習との連続性について、引き続き検討を重ね改善を図ってゆきたい。

#### 4 卒業研究

- ・看護学生のアサーションに影響を与えるもの-感情ルールとの関連の考察から-
- ・日本における産後うつリスク要因に関する文献的研究
- ・離島の在宅高齢者における睡眠健康と就寝・起床時刻の規則性との関連
- ・統合失調症を抱える人に対するイメージと態度-精神科勤務経験がある看護師とない看護師の比較-
- ・精神疾患を持つ人々に対する看護師のスティグマ-精神科勤務年数・性格特性との関連-

### 3-5-14 保健管理学研究室

#### 1 教育方針

地域社会で生活する人々の健康を支える看護職者に必要な知識と技術を習得するとともに、学生が自律して学習する態度を身につけて欲しいと考え、教育プログラムを組み立てている。1年次は、講義により「健康」という概念を理解するとともに、初期体験実習を通じて看護職者の活動する領域と各領域における対象者の多様な健康ニーズを学び、今後の学習の動機付けができることを目指した。2年次には、保健・福祉・医療に関する諸制度・法体系の構造とその活用に必要な基本的な考え方を、3年次では、専門職に求められる行動原則としての倫理および、地域・学校・産業などの具体的な場面における保健活動の実際を学ぶとともに、演習では健康教育の展開を通して、実践に視点をあてた保健活動が理解できるような講義・演習の内容とした。

## 2 教育活動の現状と課題

講義においては、今日の社会の変化に応える最新の知識の提供を目指すとともに、多様な健康ニーズと社会の要請に対応できるよう内容の検討を行っている。また、1年次、2年次で学習した内容から、3年次以降の講義・演習を通して、地域で活動する看護職の活動の理解に結びつけていくために、学生が具体的に実践をイメージし理解しながら知識と技術を獲得し、さらに地域実習につなげていけるよう教授することが課題であった。昨年度から、3年次・4年次の地域看護学の生活援助論の演習等に参加することで、学生の学習状況を把握することができ、その後の地域看護学実習の指導につなげることができたと考える。

今後も、保健師の教育という視点で、広域看護学講座として、国際看護学を含め、お互いの教授内容を理解し学生の学習状況について情報交換を行い、学生の学びが効果的になるよう検討していくことが重要であると考えます。

## 3 科目の教育活動

### 1) 健康論

1年次 前期前半

桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、佐藤 弥生

健康の概念と健康に対する考え方の歴史の変遷を理解し、健康の意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。さらに人々の健康ニーズを把握し、健康増進活動における看護職の役割を認識するとともに、生活習慣と健康との関連を意識し、学生が自らの生活体験を通して健康を考え、また生活習慣を見直すきっかけとなるよう講義を行った。

担当（講義回数）と概要

草間 朋子 (1) 大分県立看護科学大学における教育方針、

桜井 礼子 (5) 看護の視点から健康を考える、ライフサイクルと健康、健康づくりと健康

日本21の展開、健康づくり 健康と栄養、健康と運動、こころの健康

平野 互 (2) 疾病構造とライフスタイル、健康度の評価、

高波 利恵 (1) 健康と環境

佐藤 弥生 (1) 喫煙・飲酒

坪山 明寛 (1) 看護職の役割と感性

林 猪都子、高野 政子、小野 美喜、影山 隆之、江藤 真紀、李 笑雨 各専門分野における健康課題と看護職の関わり

## 2) 保健福祉システム論

2年次 後期

平野 互

社会保障が、憲法に謳われた基本的人権である生存権を実現するための制度的保障であることを理解するために、まず「権利」について論じたのちに、社会保険、社会福祉、国家扶助および保健・医療を内容とする社会保障制度の概要とその意義を論じた。また保健師に必要な行政・財政について理解するため、その概要を教授した。社会保障システムについては、社会の転換期にあたって、医療・保健関連法規や福祉制度も毎年のように変わっているため、法体系と諸制度を体系的に理解できるよう整理するとともに、国家試験の出題傾向に対応できるよう講義を構成した。加えて、システム・マネジメントに必要なリスクマネジメントや、臨床におけるルールであるインフォームド・コンセント、プライバシー権と個人情報保護法、ノーマライゼーションの理念など患者・障がい者の諸権利を保障するための基本理念について論じ、専門職としての判断に必要な基礎知識を獲得できるようにした。

学生の授業評価および定期試験の結果からは、おおむね学生が講義の意図を理解し、社会保障制度に対する関心を高めて、制度の枠組に対する理解ができたことが伺えた。その一方、今年も学習意欲が低く出席率が低いために成績も良好でない学生が存在し、学習意欲の向上と講義出席への動機付けを図るためのさらなる工夫の必要性があると考えられる。

## 3) 保健活動論

3年次

桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、佐藤 弥生

地域、学校、産業における法令に基づく保健活動のあり方と実際を教授した。看護職として個人及び集団の健康の保持・増進、疾病予防のための支援のあり方を理解するとともに、保健活動の具体的な実践方法とその評価について学ぶことができるよう講義を構成した。また、地域の救急医療の現状と災害看護活動、及び救命活動の実際を理解し、救急救命処置の一つとして心肺蘇生術の実践、AEDの使用ができるよう、日本赤十字社の協力を得て演習を行った。

担当（講義回数）と概要

桜井 礼子(10) 地域保健活動、救急医療と災害看護活動、学校保健

平野 互 (2) 健康教育

高波 利恵(4) 産業保健活動

日本赤十字社(4) 救急救命処置の基礎（講義1，実技演習3）

## 4) 保健管理学演習

3年次 後期後半

桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、佐藤 弥生

保健・医療・福祉の場において、看護職の視点から個人および集団の健康問題に対して、保健活動のひとつである健康教育の展開方法とその実践力を養うことを目指した。演習は、地域、学校、産業などの保健活動の場での事例を用いて、それぞれの健康問題を明確にして、どのような健康教育を行うか、小グループに分かれてグループワークを行った。また、保健活動の根拠法、社会制度や社会資源の活用について理解するために、事例を展開するために必要な事項に関して学生一人ひとりに課題を提示し、レポートにまとめ、学生間で共有する資料を作成した。最後に発表会で各事例についてロールプレイを含むプレゼンテーションを行い、他のグループの学びを共有するとともに、ディスカッションを通してより深い考察ができるような場とした。

学生は、対象が個人及び集団へのアプローチとなるため、対象の具体的にイメージすることが難しい様子であったが、グループワークで対象の背景などをきちんと形作ることができたグループは、健康教育の展開ができていたと考える。

## 5) 初期体験実習

1年次 前期（7月8日（火）～7月15日（火）の6日間）

赤星 琴美、井伊 暢美、江月 優子、大賀 淳子、小野 朱美、小野 さと子、神取 美恵子、河野 梢子、桑野 紀子、佐藤 弥生、塩月 成則、下山 優恵、高波 利恵、田中 佳子、田中 美樹、津隈 亜弥子、津留 英里佳、濱崎 美津子、福田 広美、薬師寺 綾、平野 互、桜井 礼子

初期体験実習は、3日間の施設実習と学内でのグループワーク、発表会で構成されている。施設実習を通して、看護職の活動を見学し自ら体験することにより、保健・医療・福祉の場において、看護の実践の場の広がりや看護の役割を理解すること、また対象となる人々の多様な健康ニーズを理解することを目指している。さらに、施設実習後に学内でのグループワーク、発表会を通して、各施設での学びを共有し、今後の学習の動機付けをすることも目標としている。初期体験実習は学生にとって第一段階の初めての臨地実習であり、学生が実習で自らが体験して学ぶプロセスも重要な課題ととらえ、学生へのオリエンテーションを充実させるとともに、担当教員に密に係わってもらいながら実習をすすめている。

実習施設：20ヶ所

事業所：九州電力株式会社、新日本製鐵株式会社大分製鐵所、昭和電工株式会社大分事務所

保健福祉施設：大分県精神保健福祉センター

健診機関：大分労働衛生管理センター

学校：大分県立新生養護学校、大分大学保健管理センター

病院：大分県立病院、農協共済別府リハビリテーションセンター、湯布院厚生年金病院、別府 発達医療センター、緑ヶ丘保養園、大分赤十字病院、国立病院機構 西別府病院

介護老人保健施設等：介護老人保健施設 わさだケアセンター、介護老人保健施設 健寿荘、特別養護老人ホーム 百華苑、特別養護老人ホーム 寿志の里

地域保健：大分市、由布市

## 6) 看護の倫理

3年次 前期前半

平野 互、小野 美喜

看護職に必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく判断のための思考訓練を行うことを目的に、6回の講義と3回の事例演習を行った。講義は、「Bioethics・新しい医療倫理の展開」・「生命倫理の方法」・「Profession の責任と倫理」・「出生と死に関わる倫理と患者の権利」および「人間の尊厳、個人の尊重そして自立支援」を平野、「看護職の価値観と文化、社会規範」を小野が担当した。事例演習は、「ケースブック医療倫理」（医学書院）をテキストに、志願者を募ってスモール・グループによる発表・討議を9題行った。事例の発表者についてはグループ・レポート、その他の学生については課題に対する個人レポートにより成績評価を行った。

今後の課題としては、事例演習が討論の場にならず、発表と論評に終始することがあげられる。議論への参加と他グループの発表からの学びが不十分であるため、次年度からは、任意の発表者による事例演習を中止し、予習を前提として講義の中に組み込むよう変更することを検討している。

## 4 卒業研究

- ・ A 県内の病院における診療情報管理規定の実態調査
- ・ 訪問看護師に求められる能力と現任教育のあり方  
～訪問看護ステーションに勤務する看護師へのアンケート調査から～
- ・ 高齢女性の体力づくりのための健康関連体力指標を用いた評価項目の検討
- ・ 自閉症児の体格と生活習慣に関する実態調査 ー食習慣と余暇活動に着目してー
- ・ 事業所保健師の保健指導における環境要因への着目と活用の現状
- ・ 三次元動作解析を用いた高齢女性の起き上がり動作と腹筋力との関連

### 3-5-15 地域看護学研究室

#### 1 教育方針

看護を展開する対象として個人・集団・地域へと視点を拡大し、地域全体を包括的に捉えた看護活動をおこなうために必要となる基本的な思考力を身に付け、支援方法を学ぶことを目的とし、地域看護学概論、在宅看護論、家族看護学概論、地域生活援助論Ⅰ、地域生活援助論Ⅱ、地域看護学実習を展開している。特に地域生活援助論Ⅰでは、保健所や市町村で働く保健師の講義を取り入れ、地域看護活動の現状や課題について学習が深められるようにしている。また、地域保健関連の法改正には常にアンテナをはり、学生には最新情報を提供できるように努力している。担当科目および関連領域科目との講義と演習、実習の連動性を考慮して、演習や実習の内容や展開方法に工夫を凝らしている。

#### 2 教育活動の現状と課題

地域看護学概論、地域生活援助論Ⅰの講義では実践活動との連動性を重視し、保健所や市町村で働く保健師の講義を取り入れている。さらに、実習の場において個人・家族、集団、地域を対象とした具体的な看護展開が実施できるように、学内演習では実習場面を意識した事例を用いて、ロールプレイ等をおこなっている。開講時期が実習直前である地域生活援助論Ⅱでは、地域の健康問題を踏まえた活動内容が理解できるよう、実際に学生が実習をおこなう市町村の既存資料を基に、地域看護診断をおこなっている。また、個人・家族を対象とした支援では、新生児や生活習慣病などの事例を基に、保健師がおこなう家庭訪問における看護過程の技術を展開することで、地域での看護活動の視点や具体的な支援技術について理解し習得できるように工夫している。今後も社会の変化に対応し得る看護支援を目指して、常に教育内容を繰り返し検討していく必要がある。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 地域看護学概論

2年次 後期前半

江藤 真紀

地域における個人・家族、集団への看護活動をおこなうために、地域住民の主体性を重視し地域看護学の基本的内容について講義をした。主には地域看護学の概念、プライマリ・ヘルスケアとヘルスプロモーション、地域看護活動の場の特性、地域看護活動の対象と方法（個人・家族、集団、地域社会）、地域看護の変遷、大分県の地域看護活動等であった。常に資料やパワーポイント、DVDなどを活用することで学生が保健師像をイメージでき、かつ地域看護学についての理解が深められるように教授した。

#### 2) 地域生活援助論Ⅰ

3年次 後期後半

江藤 真紀、赤星 琴美、下山 優恵、桜井 礼子、平野 互、久澄 千里、渡辺 淳子

保健所、市町村を基盤とした行政機関における地域看護活動の展開や対象別地域看護活動について講義と演習をおこなった。内容としては、地域看護活動の展開、地域におけるケアシステム、家庭訪問、健康相談、地区組織化活動（セルフヘルプグループの育成）、対象別地域看護活動（母子保健活動、難病保健活動、成人保健活動、高齢者保健活動、障害者保健活動、精神保健活動、感染症保健活動、災害看護活動）、市町村における地域看護活動などであった。保健所や市町村の保健師を講師として招くことで、地域看護活動の実際や課題などについて活動方法や事例を使いながら講義をおこなった。また、地域看護活動の一部では演習を組み入れることで、二次データの使い方、地域の健康問題の抽出、生活の場としての地域の捉え方を教授した。さらに感染症保健活動では講義と連動させた感染症法に基づく二類感染症である結核の事例を用いた演習を実施し、保健師がおこなう看護過程の展開をすることで、具体的な支援方法について学習をおこなった。演習終了後には常に学生へのフィードバックをおこない、演習内容の自己評価とともに学習に深みを持たせられるように配慮した。

教育方法については、学生が知識やイメージを深められるようにパワーポイント、DVDや資料を活用した。今後も授業の進捗状況と学生の理解度に合わせた教材の選出と効果的な活用方法について検討を重ねていきたい。さらに地域保健領域での目まぐるしい法改正や保健事業の見直しなど、常に新しい情報をすばやくキャッチし、新鮮な情報を学生へ提供しつつ、複雑化する行政機関における地域看護の役割・機能を具体的に理解できるよう努力をする必要がある。

#### 3) 地域生活援助論Ⅱ

4年次 前期前半

江藤 真紀、赤星 琴美、濱崎 美津子、下山 優恵、高波 利恵、桑野 紀子

地域看護学実習の直前の演習として位置づけ、実習地域の二次的データを用いた地域診断の実施、新生児家庭訪問時の育児指導と児の計測実技、生活習慣病の事例に対する家庭訪問時の保健指導、高齢者の入浴介助等のロールプレイをおこなった。毎時、グループワークをおこなう中で学生の理解度、技術習得状況に応じて指導をした。特に二次的データを用いた実習地域の地域看護診断の結果を実習開始時に実習指導者に提出し、実習指導の反映させていただく資料をするなど、地域看護学実習との連動性を高く維持した。さらに新生児家庭訪問での母親に対する育児に関する訪問指導では、知識と技術の統合の重要性を実感できるように工夫した。

#### 4) 在宅看護論

3年次 後期前半

江藤 真紀、赤星 琴美、下山 優恵、佐藤 弥生、小野 朱美、寺嶋 和子

疾病や障害を持ちながら在宅療養をする人びととその家族に対する看護をおこなうために、在宅看護の基本的な考え方と援助方法について講義と演習をおこなった。内容としては、在宅看護の意味と位置づけ、在宅看護の場と特性、社会資源の種類と活用、ケアマネジメント、家族の特性と生活支援の方法、在宅看護過程（講義、演習）、家族の特性と生活支援の方法、医療依存度の高い人へのケア、在宅ターミナルケア、訪問看護ステーションにおける看護活動の実際であった。在宅看護過程の演習ではグループワークによって、在宅療養をしている高齢者の事例を作成し、具体的な初期訪問計画を立てる学習をおこなった。

#### 5) 家族看護学概論

3年次 前期前半

江藤 真紀、赤星 琴美

家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と支援方法について講義と演習をおこなった。内容は、家族看護学の概念、家族の機能と家族看護、家族を理解するための諸理論、家族看護における看護職の役割、家族看護過程、家族看護過程の演習である。特に家族看護過程の演習では、家族をひとつのユニットとして捉えて援助するカルガリー看護アセスメントを取り上げ、その意義や方法が理解できるようにロールプレイによる家族インタビューを用い、具体的な体験を通して学習が深まるように工夫した。

#### 6) 地域看護学実習

4年次 前期前半

江藤 真紀、赤星 琴美、濱崎 美津子、下山優恵、桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、佐藤 弥生、桑野 紀子、小野 さと子、塩月 成則、神取 美恵子、河野 梢子、田中 佳子、薬師寺 綾、津隈 亜弥子、小野 朱美

大分県下全域の保健所（保健支所含む）9か所と市町村保健センターおよび支所20か所、訪問看護ステーション25か所、合計54か所の施設に、それぞれ2～4名の学生を配置し1～2週間（大分市保健所のみ3週間）の実習をおこなった。

実習指導体制は、それぞれの施設の看護職（保健所と市町村は保健師、訪問看護ステーションは看護師）が実習の現場で直接的な指導をおこない、担当教員は各施設を巡回することで学生と指導者の双方の状況把握をおこないながら、中間カンファレンスや修了カンファレンスでの指導、記録物の指導などをおこなった。実習内容は、市では少なくとも1件の訪問指導を、訪問看護ステーションでは数件の訪問看護を体験せきるように調整をおこなった。また、全員の学生が保健所または市で健康教育について計画・立案、実施、評価の一連の過程を体験し、集団を対象とした看護支援を学習した。

今後は、学生が法改正や保健事業の見直し等に対応できる実習を展開できるよう実習内容や形態の工夫がさらに必要となる。

#### 4 卒業研究

- ・地域高齢者における転倒と義歯との関連
- ・父親の育児に関する意識・行動から考える育児満足感と社会的役割の検討
- ・大学生の生活行動の実態とメタボリックシンドローム予防の検討

## 1 教育方針

International nursing courses aim at the development of an understanding of global cooperation and networking of health and of nursing, and the development of an understanding of global health issues and strategies; and the realization of roles and responsibilities of nursing profession in the global era in the diverse socio-economic, cultural, and eco-geological context. The age of transculturalism and the trend of globalization of nursing are essential today. Globalization necessitates a comparative perspective with the maintenance of holistic care and the prevention of illnesses. Transcultural Nursing as well as International Nursing has also emphasized a comparative and holistic perspective. Nurses must move beyond an international focus of studying the relationships between two cultures to that of considering several cultures from a transcultural comparative focus. This means expanding one's views and using critical analysis by contrasting insights and knowledge from several country cultures.

Three mandatory courses for baccalaureate students, one for sophomore class and two for junior students are planned and carried out.

## 2 教育活動の現状と課題

Language used for the classroom activities: Texts, presentations, questions and answers are carried out in English. To promote the understanding, texts including the lists of references with exercise questions are distributed at least one week ahead of actual lectures. English proficiency of the students are to be promoted.

Autonomy of the study; Detailed seminar orientation such as on the themes of self-study, references, methods of presentation, and a locus of group-study were planned and presented by the faculty at the beginning of the Quarter. Grouping of students for self-study and choice of the themes are assigned to the students for the student's autonomy by the class-leader.

Activities and autonomous participation by the students are to be promoted.

Evaluation of the courses by the students; Students were provided with the opportunities to evaluate the course. Evaluation for the level of achievement of the aims and objectives of the course, contents of the course, time allotment and teaching methodology etc. were planned by the faculty and carried out by the students.

### 3 科目の教育活動

#### 1) 国際看護学概論

2年次 後期

S. W. Lee, N. Kuwano

Objectives and contents;

1. To develop an understanding of the concept of, and to define international health and international nursing.
2. To describe the background, course and trends of international cooperation and globalization of health care.
3. To understand the context, scope, principles and approaches of international nursing.
4. To develop an understanding of the perspectives of international health issues and strategies.
5. To develop an understanding of the international health and nursing networks.

Contents ;

1. Orientation and introduction to the nature of international nursing - definition, characteristics, aims-
2. Introduction to the nature of international nursing - relations with some factors: preparation, history-
3. Main nursing concepts and trends of international nursing and health -Globalization nursing, transcultural nursing, international cooperation-
4. Trends of international nursing and health, -Global health care problems, history, models for services-
5. Risks to health and life in the world - Introduction, risks factors, mortality causes, communicable disease -
6. Risks to health and life in the world - Non-communicable disease -
7. International networking of health; WHO
8. Wrap-up, evaluation of the course

## 2) 国際看護比較論

3年次 後期

S. W. Lee, N. Kuwano

Objectives:

1. To develop an understanding of the context, scope and approaches of international nursing and international health.
2. To develop a global perspective of issues and strategies on health and of nursing
3. To develop an understanding of the need for human resources development for global health and nursing.
4. To develop an understanding of the role of the international health, nursing and relief networks and the impact of international aids during war and disaster.

Contents ;

1. Overview of international nursing  
From international health & nursing to global health perspectives Issues & challenges for health development (Poverty, Gender, Culture & Health Care, Environment)
2. Global strategies for all health  
Human resources
3. Work force related to ICN  
International Relief Organization: JICA
4. International Relief Organization Red Cross

## 3) 国際看護学演習

3年次 後期

S. W. Lee, N. Kuwano

Objectives of the Course:

1. To develop an understanding of the concept, scope and approaches of international nursing/health in the diverse eco-geological, socio-economic, cultural and political context.
2. To develop understanding of the system of and the need for planning and development of the human resources for global nursing and health.
3. To develop an understanding of the role of the international nursing, health and relief networking.

Activities:

Orientation to the course activities includes;

Aims and objectives of the course, grouping, designation of role of each member, themes of the group study and presentations, time allotment and place allocation, references, soft and hard computer aids and equipments for the study and presentation.

Group-works / studies:

Carried out by students; grouped into 4Gr.-5Gr., according to prior planned schedule.

Themes for the group-works / studies and presentations:

- I. Health issues and strategies; of a population group
- II. Health issues and strategies; of a nation
- III. Human resources for health or/and nursing of a nation
- IV. Foreign Country' s Impact and context of aids by JICA

## 4 卒業研究

- ・日本の看護師の死生観について —韓国・インドネシアの看護師と比較して—  
(Study on Japan nurse' s perception of life and death  
— compared to Korea and Indonesia —)
- ・日本人大学生のストレス反応 —韓国・インドネシア・アメリカの大学生と比較して—  
(Survey Study on Japanese student' s stress response  
— Compared to Korean, Indonesia and America —)
- ・NPに対する日本の看護職の意識 —韓国・アメリカの看護職と比較して—  
(Japan nurse' s perception about Nurse Practitioner  
— Compared to Korean and America —)
- ・大分県における外国人留学生のカルチャーショックの実態  
(Foreign student' s culture shock in Oita)

## 3-5-17 共通科目

### 1) 自然科学の基礎

#### 1年次 前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、岩崎 香子、定金 香里、伴 信彦、吉田 成一、品川 佳満、佐伯 圭一郎、坂口 隆之

高校までの選択科目の違いによる学力のバランスを確認するために1年次生が入学し時点で基礎学力試験を実施し、あらかじめ学力の違いを把握し講義の進め方に参考にしていく。講義では専門科目の学習に必要な生物にウエイトを置いた構成をとっている。講義内容は次の通りである。1)全体：科学的自然観とは、2)生物：細胞とは、3)生物：細胞分裂の仕組み、4)生物：DNA複製の仕組み、5)生物：遺伝子・遺伝の仕組み、6)生物：遺伝の仕組み、7)生物：タンパク質合成の仕組み、8)生物：生物の発生(1)受精、9)生物：生物の発生(2)胚発生、10)物理：力とエネルギー、11)物理：熱・温度と相変化、12)物理：電気と磁気、13)化学：原子の構造と化学結合、14)化学：モルと濃度計算、15)化学：化学変化：酸化と還元、酸とアルカリ、16)化学：有機化合物の構造、17)数学：数学の基礎1、18)数学：数学の基礎2

### 2) 健康科学実験

#### 2年次 後期

本健康科学実験は2年次生に実施している。本実験は基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的として、今年度は血液生化学実験を除き、9テーマからなる実験を行った。1)組織学実験、2)血液検査、3)基礎微生物学実験、4)ラットの解剖、5)室内空気汚染と水質汚染、6)放射線、7)染色体異常、8)最大下負荷での呼吸循環器系持久力の測定、9)心電図の成り立ちと心拍解析。

### 3) 総合人間学

4年次 後期前半

さまざまな分野で活躍され、かつ造詣の深い講師の物の見方や考え方を通して、人間として、医療者として備えておくべき豊かな知識と感性を養うことを目的としている。なお、本科目は公開講義とし、県内に広く情報を提供して参加を促している。本年度の開講日、テーマ、講師を以下に示す。

- 第1回：地域医療における訪問看護。川村佐和子
- 第2回：日本脳炎ウイルスの越冬の謎。三舟真人
- 第3回：看護師への惨事ストレスのケアについて。松井 豊
- 第4回：いのちの作法。海野 順子
- 第5回：子どもと教育。牧野 桂一
- 第6回：看護に必要な医療安全。森 照明
- 第7回：社会人のマナー。酒井 祐一
- 第8回：医療改革/教育改革提言。草間 朋子

### 4) 総合実習

4年次 前期後半（6月22日（月）～7月3日（金）の2週間）

看護系教員全員

平成21年度は、6月22日（月）～7月3日（金）までの2週間で、学生数は76名で、46施設に配置した。今年度は、学生数が増えることもあり、新たなフィールドとして3施設（黒木記念病院、大分岡病院、健康保険南海病院に依頼し、大分こども病院を加えた。担当教員27名、専任教員4名の体制で指導にあたった。今年度は、初めて総合実習の指導を経験する教員も多く、実習準備の段階から専任教員との連携が重要であった。学生は、3年次の2月から、担当教員の指導のもと実習準備を始め、目的・目標を明確にして、実習に望むことができていた。

### 5) 看護研究の基礎 I

3年次 後期後半

本科目は、卒業研究の意義や論文作成迄の一連の過程で必要とされる基本的な考え方、進め方、知識や技術を修得することを目的としている。2日間の集中講義で行なった。講義のテーマと講師は以下のとおりである。

平成22年2月15日

- (1) 卒業研究の意義 : 高野 政子
- (2) 研究の倫理と安全 : 吉村 匠平
- (3) 実験研究の進め方の基礎 : 小嶋 光明
- (4) 文献的研究の進め方の基礎 : 赤星 琴美

平成22年2月16日

- (5) 調査研究の進め方の基礎 : 石田 佳代子
- (6) 質的研究の進め方の基礎 : 藤内 美保
- (7) データ解析の基礎 : 坂口 隆之
- (8) 文献検索の方法・文献の入手法 : 稲垣 敦
- (9) 論文のまとめ方・発表の方法 : 伴 信彦

## 6) 看護研究の基礎Ⅱ (原著購読)

4年次

本科目は卒業研に究関連する原著、原書を検索、選択、購読し、専門論文の大意を把握し、研究を進める上での論理的な展開法、論文の書き方、作成法を学ぶことを目的としている、学生は卒業研究の期間中に3編の英語の原著論文について内容をまとめ、それぞれの研究室で行なう抄読会で発表した。

## 7) 看護研究の基礎Ⅱ (総合看護学)

4年次 後期前半

桜井 礼子、藤内 美保、赤星 琴美、小野 さと子、小野 美喜、桑野 紀子、関屋 伸子、田中 美樹、津隈 亜弥子

基礎看護教育の仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を有機的に統合し、適切なアセスメント能力および看護技術を提供できる能力を養うことをねらいとしている。医療・保健現場において遭遇しやすい6事例(小児、母性、急性期、慢性期、ターミナル、在宅)を用いてそれぞれの課題にそってグループワークを行い、適切にアセスメントし看護計画を立案し、対象者のニーズや状況にあわせて安全安楽な看護技術を提供できることを目標とし、その成果をロールプレイにて発表した。

各グループともグループワークは熱心に取り組んでいた。発表のロールプレイの場面では、教職員が患者役等をつとめ、予測しない反応が返ってくる場面もあったが、学生は対象を理解しようとし、またその場の状況を判断し、適切な看護ケアを展開することができていた。また、発表後のディスカッションで学生の発言も見られ、事後の学生レポートも多くの学びを表出することができていた。さらに、ロールプレイ終了後、患者・家族役をした教職員の方々から、どんな気持ちだったのかといったコメントをもらうことで、学生自身が対象の思いを改めて知る機会となっていた。

昨年度のグループワークの際の学生指導について、どこまで指導を行うのかについて教員自身が迷うとのことであった。そこで、今年度は学生がグループワークを始める際に、この課題から看護過程を展開するにあたって何がポイントについて文書化したものを提示し、それをもとに学生がディスカッションできるようにした。また、発表後にも学生へのコメントをできるだけ具体的に伝え、学びが深まるように配慮した。今後は、新カリキュラムにおける単位認定化を目指して、総合看護学のあり方を検討する必要がある。

### 3-6 大学院における教育活動

#### 3-6-1 博士（前期）課程

##### 1) 看護アセスメント学特論

1年次 後期

藤内 美保、伊東 朋子、高野 政子、石田 佳代子

オムニバス方式により講義および演習を行った。

藤内：看護師のclinical judgmentについての文献検討のレポート課題を課し、演習を行った。

伊東：難病について解説し、演習として、特に保健師が関わる難病保健活動についてレポートを課した。

高野：小児のフィジカルアセスメントについて講義した。また小児の看護過程をヘンダーソン看護論を用いて解説した。その後で小児気管支喘息の事例展開を演習としてレポート課題とした。

石田：看護師の役割に関する文献検討の演習を行い、医療現場における看護のあり方を考察した。

##### 2) 精神保健学特論

1年次 前期前半

影山 隆之、大賀 淳子

前半では最近のトピックスとして、ストレス、睡眠、自殺、災害精神看護について講義と討論を行った。

後半では、精神保健に関連する看護理論をとりあげ、履修者による発表・討論を行った。

##### 3) 老年アセスメント学演習

2年次 後期

立川 洋一、小野 美喜、福田 広美、松本 初美、桜井 礼子、江藤 真紀

老年期の対象者への包括的健康アセスメント及び看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開した。

1名の学生が、初期症状を伴う高齢者と慢性期疾患をもち継続的に治療を行っている高齢者の2事例が展開できるように実施した。履修者は3名であった。演習場所は大学内と実習施設でもある岡病院で実施した。立川講師の協力を得て、実際に療養している対象者にモデルを依頼し、実際に問診、フィジカルアセスメント、必要な検査の選択と結果の解釈、診断、ケアプランの作成を行った。実際に対応することで、学生は各自学習課題を明確にし、今後の学習計画につなげられた。また、大学内では、疑問を解決しながらすすめることができ、大学内と臨床現場とで相互に演習をするプログラムは効果があったと考える。最終的に大学内でアセスメント内容とマネジメントプランをプレゼンテーションを行い、初めての演習の学びの共有ができた。これまで前例のない演習のため、課題が多くあり、特に来年度は演習に至るまでの知識と技術を学ぶ講義の充実を図るとともに、看護診断や看護理論を取り入れた思考の展開を強化する。

#### 4) 小児NP特論

後期後半

玉井 友治、高野 政子、田中 美樹

EBNに基づいたケアを提供できる実践能力を高めるためのカリキュラムを構成した。1) 医師による小児診療時の診察診断の診かた、所見の解釈、2) 小児の理解と小児看護の実践で用いられる家族理論、3) 小児の主要な症状の理解として感染症マネジメント、4) 慢性疾患患児（糖尿病、気管支喘息、腎疾患）の子どもと家族の看護、5) 急性期症状特に皮膚症状のケア、6) 小児の緩和ケアとQOL、7) 小児医療における倫理とは、8) レポート発表を行った。評価は出席状況、試験とレポートを評価した。

#### 5) 小児疾病特論

前期後半

玉井 友治、井上 敏郎、岩松 浩子、飯田 浩一、岩永 知久、福永 拙、高野 政子、田中 美樹

小児NPが小児医療の場で自律的な看護実践を行うために必要な小児の慢性・急性疾患の知識と技術等を学び、小児の疾病に関する診断能力を高め、より高度で専門的な知識と技術を修得することを目的としている。講義内容は、1) 小児医療と小児慢性特定疾患の現状と課題、2) 小児医療におけるインフォームド・コンセント、3) 小児医療におけるチームアプローチと調整、4) 小児の病態と生理総論、5) 小児の病態と生理各論、6) 小児感染症の症状と治療、7) 呼吸器系の特性および病気の症状と治療、8) 先天性心疾患の症状と治療、9) 後天性心疾患の症状と治療、10) 小児外科疾患（消化器管）の解剖生理的な特徴、11) 血液・造血器の生理的な特徴および症状と治療、12) 内分泌・代謝系の病気と症状と治療、13) 腎と尿路の解剖生理的な特徴および症状と治療、14) 運動器系の解剖生理的な特徴、15) 運動器系の病気と症状と治療、16) 神経系の構造と機能的特徴、17) 神経系の病気と症状・治療、18) 免疫系の特徴および病気の症状と治療、19) 悪性腫瘍の種類と特徴20) 心の病気と症状・治療、21) 小児虐待の診断と治療などを実施した。

#### 6) 老年NP特論

1年次 後期後半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、桜井 礼子、安部 眞佐子、影山 隆之、佐藤 豊秀、宮成 美弥、木本 ちはる、佐藤 重行、安藤 由紀子

EBNに基づいたケアを提供できる実践能力を高めるために、加齢に伴い生じる身体的・精神的・社会的機能の変化と、老年期の発達課題を理解し、NPとしての看護を実践する理論、方法を探究することを目的として講義を行った。NPの看護の対象者は、健康増進や疾病予防を必要とする高齢者や、慢性疾患をもち生活している高齢者であり、各健康レベルでの看護を専門とする教員や臨床で活動する看護師、ソーシャルワーカー、認定看護師などがオムニバス方式で講義およびグループワークなど多様な方法で行った。最終的に、学んだことを統合し、学生の身近かに存在する高齢者のケースを例に、アセスメントやマネジメントプランをまとめてみることを課題提出した。それにより学生がNPとして対象者といかに関わるかという理解につながった。今回は時間の制限で看護診断や看護理論に十分な時間をかけられず、課題と学生の自己学習による所が大きかった。来年度は時間の使い方や講義の順序性を改善し、効果的な学習につなげる。

## 7) 老年疾病特論

1年次 前期後半

菅野 公浩、小寺 隆、武居 光雄、増井 玲子、永田 裕二、植山 茂宏、竹下 泰、石田 哲也、一木 康則

老年期にある対象者に適切なプライマリケアを提供するために、NPに必要な老年期によくみられる疾病について学び、その診断・治療（検査・処方）について理解することを目的に行った。各専門領域の診療医の外部講師や本学教員が、老年に特有な症状、循環器疾患、呼吸器疾患、消化器疾患などに関して教授した。外部講師がNPの役割を理解できるよう情報交換を行いながら講義をすすめた。しかし多様な疾患を全て講義に網羅することは困難であり、めざすNP活動としてどのような症状や慢性疾患を教授する必要があるかを検討することが引き続き課題として残った。今年度は改善点として実際に診療器具みながら講義が受けられるように工夫した。この点では学生の理解を深められた。また、学びの効率性から病態生理学特論の後に老年疾病特論を教えるように変更し改善がみられた。来年度は改善として、グループワークを用いながら、老年者の呈する症状をアセスメントする教授方法や、診療ガイドラインを用いた授業を取り入れるよう工夫をしていく。

## 8) 生殖看護学特論

1年次 前期前半

林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 伸子、乾 つぶら、宮崎 文子

思春期、成熟期、更年期、老年期の各期における女性とその家族の健康の維持・増進、健康逸脱時の援助のための対象の捉え方を性と生殖の側面から理論的に探究するとともに、各ライフステージにおける女性の身体的、精神的、社会的特徴とウェルネスを考察し、その看護援助の方法及びセルフケアのための教育のあり方について教授した。さらに周産期にある女性と家族の親役割の獲得、愛着形成及び生殖機能の正常性維持のためのリスク回避に関する看護援助活動について追及した。

## 9) 助産学特論

1年次 前期後半

林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 伸子、乾 つぶら、宮崎 文子、佐藤 昌司、西本 真由美

近年の産科医療は急激な勢いで産科医師不足・産科病棟閉鎖という事態が生じている。妊産婦の生活圏内に出産場所を堅持するためにも、本来の助産師の専門性を生かした働きを推進することが急がれている。そこで正常分娩における医師との役割分担を担い、病院の助産師が自律（自立）して助産ケアを行う体制作りの仕方及び自信を持って助産外来、院内助産ができるための知識・助産診断を深め、多様化するお産に対応できる即戦力と自律した助産師の育成をねらいとして教授した。

## 10) 助産学演習

1年次 後期

梅野 貴恵、林 猪都子、関屋 伸子、乾 つぶら、軽部 薫

周産期にある対象と女性のライフサイクルにおける健康問題を身体的・精神的・社会的側面から総合的に理解し、科学的根拠に基づいた診断技術および支援方法を学び、その後の妊娠期診断学実習、妊産助くふ保健指導実習、NICU実習に活かすための科目とした。内容は、妊娠期の超音波診断、妊娠期の保健指導、分娩監視装置の見方、新生児蘇生法、母子愛着形成、NICU看護、マタニティビクス、アフタービクス、性教育である。演習方法は、課題に基づき学生が主体的に企画し参加できるものとした。

## 11) 妊娠期診断学実習

1年次 後期

林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 伸子、乾 つぶら

人間尊重の基本的理念に基づき、妊娠期の助産診断および技術を用いて、妊婦および胎児の健康水準を診断し、科学的根拠に基づいた実践ができる即戦力をもった助産師の育成をねらいとした。渡邊助産院、掘永産婦人科医院に3名、生野助産院、アルメイダ病院に1名、大分県立病院周産期母子センター、サエラ助産院、貞永産婦人科医院に4名配置して妊娠期の経過診断の実習を行った。

## 12) 妊産褥婦保健指導実習

1年次 後期

林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 伸子、乾 つぶら

助産師は、助産および妊婦・褥婦もしくは新生児の保健指導を業とする専門職であり、実務実践には、より高度の知識・技術が要求されている。この保健指導実習においては安全性・快適性を踏まえて、ニーズに寄り添う妊婦・産婦・褥婦の一貫した継続支援およびより高度な保健指導技術の獲得・充実をねらいとした。渡邊助産院、掘永産婦人科医院に3名、生野助産院、アルメイダ病院に1名、サエラ助産院、貞永産婦人科医院に4名配置して妊産褥婦保健指導実習を行った。

## 13) NICU実習

1年次 後期

梅野 貴恵、林 猪都子、乾 つぶら、軽部 薫、南 智子

ハイリスク新生児の生理的特徴を理解し子宮外生活適応の過程をアセスメントし、基本的ニーズに応じた看護が展開できる助産師の育成を目指す目的で、大分県立病院総合周産期母子医療センターNICUで実習を行った。4名の学生は1グループで2週間実習した。学生1名に対してハイリスク新生児1名を受け持ち、受持ち児と保護者のニーズに応じた看護過程の展開を実施し、保護者への退院指導の一部を実施した。また、NICUに入院中の超低出生体重児の看護援助の見学等を実施した。産科とNICUとの連携も見学により理解を深めることができた。学生は、母子分離された両親への愛着形成促進のためのケアや助産師としての役割を学ぶことができた。

## 14) 地域看護学特論

1年次 後期後半

江藤 真紀、佐藤 玉枝

ヘルスプロモーションを基盤としたコミュニティエンパワメントの視点から、地域における個人、家族、集団へのアプローチの方法や地域看護診断の手法と理論を用いながら教授した。さらに行政システムの看護の視座から、新たな健康ニーズへの対応や地域看護の機能についてもディスカッションを含めて講義を展開した。

## 15) 国際看護学特論

前期

S. W. Lee

This course is an introduction to the global perspectives of health and nursing issues using some nursing theories. The nature of scientific explanation and inquiry of theoretical conceptualizations in nursing for analyze and evaluation of the international nursing and health are examined.

## 16) 放射線保健学特論

1年次 後期

甲斐 倫明、伴 信彦

外国人留学生を対象にした講義となったため、学生の専門性と問題意識などを考慮した内容となるよう配慮した。講義内容は次の通りである。

1) What is radiation ? Historical view, 2) Radiation and medical application, 3) Diagnostic X-ray and its use, 4) Health effects: Cancer and hereditary effects, 5) What is radiation-related cancer ? 6) Radiation therapy: Radiation oncology, 7) Pregnancy and radiation, 8) Fetal effects: malformation and cancer, 9) Hospital visit to Radiological Department

## 17) NP論

1年次 前期前半

草間 朋子、林 猪都子、桜井 礼子、高野 政子、川村 佐和子

米国および韓国から学ぶNPの歴史の変遷、NPの役割と実践活動と、日本におけるNPの必要性と教育カリキュラム、NPの求められる能力、在宅療養支援のための医療処置管理看護プロトコルについて教授し、今後の自分たちの目指すNPの活動の場と実践内容について検討した。

## 18) フィジカルアセスメント学特論

1年次 前期後半

藤内 美保、石田 佳代子

対象者の身体的健康状態のアセスメント能力を高めることを目的に教授した。五感を駆使した問診、視診、触診、打診、聴診の基本技術を身につけるため、講義および演習方式でおこなった。全身・頭部・頸部・胸部（肺および心血管系）・腹部・直腸・四肢・神経系のフィジカルアセスメントを系統的に実施した。演習では異常な状態の把握ができるように、フィジカルアセスメントモデルや眼や耳のシミュレーションを使用した。最終日は、筆記試験およびOSCE、プレゼンテーションを行った。

## 19) 病態機能学特論

前期

菅野 公浩、市瀬 孝道、岩崎 香子、卜部 省吾

体の基礎的な仕組みを理解させる為に、先ずヒトの構造や機能について講義した（菅野・岩崎）。また疾病の基本的事項を理解するために生体防御システムに関わる炎症、免疫やアレルギー、腫瘍、更に系統別の疾患についてハンドアウトを用いて詳しく講義した（市瀬）。また、病理標本の作成法、病気の肉眼標本やプレパラートを用いた顕微鏡観察を行い、種々の臓器に発生した炎症やがん組織・がん細胞を理解させた（卜部）。

## 20) 臨床薬理学特論

1年次 後期後半

吉田 成一、伊東 弘樹

診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。最終日に筆記試験を行い、当該科目の理解度を確認した。

また、昨年度の講義の反省の元、各論ではほぼ毎回、簡単な確認試験を実施し、受講者に最低限理解して貰いたい部分について、周知した。

全ての学生は看護職のため、自身の勤務先で使用している医薬品に関しては商品名での理解は高いものの、一般名に触れる機会がないため、習得が難しい部分が散見された。一般名の理解を徹底することが次年度以降の課題と考える。

## 21) 診察・診断学特論

1年次 後期

岩波 栄逸、伴 信彦、山田 健治、法化 陽一、山本 明彦、三重野 龍彦、矢野 庄司、石飛 裕和、阿部 航、吉岩 あおい

病態の把握のため、症状・徴候から原因を臨床的に推測・鑑別するための診察および検査の基礎的な知識を修得することを目的に教授した。4施設の医師9名により、後期の期間をかけて講義が行われた。エコーやレントゲンの読影など、専門的な知識が教授された。講義場所は医師所属の各施設、本学の看護研究交流センターなどで実施した。最終日には筆記試験を実施した。

## 22) 健康増進科学特論

前期

稲垣 敦、桜井 礼子、江藤 真紀

保健事業や健康教育の立案や実践のため、ヘルスプロモーションの概論、健康度評価法、行動変容理論、Precede-Proceedモデル等について講義した。また、臨地で運動メニューの作成や運動指導ができるようにするため、加齢と体力、エネルギー代謝、運動強度、身体活動量、呼吸循環器系持久力、筋力トレーニング、ストレッチ、運動処方、運動療法等について講義し、測定実習等を行った。

## 23) 人間関係学特論

前期

関根 剛、吉村 匠平

前半では、臨床の現場で必要とされるコミュニケーションスキルについて講義した。後半は、効果的なプレゼンテーションの方法についての講義の後に、受講者が選定したテーマに基づきプレゼンテーションを行わせた。その様子を録画した映像を受講者全員で見直し、プレゼンテーションの問題点や、改善点などについて討論を行った。

## 24) 看護科学研究特論

前期

佐伯 圭一郎、品川 佳満、田中 美樹、濱田 佳代子、乾 つぶら

EBNの基礎をなす看護科学研究の理論および手法を整理し、研究を進める上で必要な技術的側面について論じた。さらに、実際の研究例の輪読と検討により、研究活動に関する実践的能力の育成をおこなった。

## 25) 看護管理学特論

1年次 前期後半

志賀 壽美代、桜井 礼子、福田 広美

看護管理の基本となる理論とその展開についてオムニバス方式により講義を行った。

志賀：看護管理理論、管理プロセス、看護の質評価の方法論、看護業務と安全管理、看護職の専門性と倫理的責任

桜井：保健・医療・福祉に関する法制度、保健・医療・福祉施設における看護組織、人的管理のあり方

福田：看護職の能力開発と卒後の継続教育のあり方、看護職の業務管理のあり方  
評価は出席状況、レポートで評価した。

## 26) 看護理論特論

1年次 前期前半

S. W. Lee, M. Tonai, M. Tanaka

Course Description:

This course is an introduction to the nature of scientific explanation and inquiry of theoretical conceptualizations in nursing. Origins of and strategies for theory development in nursing are examined. Analysis of the role of theory in nursing practice and research are explored.

Course objectives:

1. Explains the nature of scientific inquiry and explanation
2. Explains how the components of a theory are related and function in description and explanation.
3. Explains philosophical controversies in current thought on nursing science and nursing knowledge development
4. Applies criteria for theories to evaluation of theories and conceptual models used in nursing
5. Evaluates alternative strategies for developing nursing sciences.

## 27) 看護教育特論

後期前半

高野 政子、伊東 朋子、大賀 淳子、宮崎 文子

看護を担う人材育成が質の高い看護ケアの基礎をなすという視点から、教育的機能の基本を理解し、看護教育の歴史的変遷と看護教育制度、今後の課題について考える。また、将来、診療看護師、高度実践看護師としての役割を果たすために、必要な教育原理と技法を学び、看護実践場面において、自己教育力、生涯教育力を備えた人材を育成することを学ぶ。講義内容は以下のような内容で実施した。1)看護教育制度、2)看護教育の歴史的変遷、3)看護教育評価、高度実践看護師制度（認定看護師、専門看護師など）、4)看護基礎教育と継続教育、5)教育コンサルテーション、6)看護教育方法論などをオムニバス形式で講義した後、最後にレポートの発表と全員で自己の課題についてディスカッションした。

## 28) 看護コンサルテーション論

1年次 前期

大賀 淳子

受講生は外国人留学生（1名）であったため、看護コンサルテーションに関する原著購読とディスカッションという方式を中心に講義を展開した。途中、学部生の精神看護学実習施設である大分丘の上病院での視察を行い、当施設において行われているコンサルテーションの実際についてスタッフとの交流を通して実践的に学んだ。

## 29) 看護倫理学特論

1・2年次 前期

平野 互、関根 剛、小野 美紀、志賀 壽美代

受講者が専攻する領域での臨床に活かせることを基本とし、必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的行動規範に基づく思考訓練を行うことを目的に、11回の講義と3回の事例演習を行い、さらに最終回には受講生の事例報告による評価を行った。講義は、「看護職の責任と倫理規程」・「看護職の価値観と倫理」を小野、「看護場面の倫理的ジレンマとその解決ステップ」を志賀、「Profession の責任と倫理」・「Bioethics・新しい医療倫理の展開」・「生命倫理の基本原則と思考方法」・「人間の尊厳と患者の権利」・「個人の尊重と自己決定権・プライバシー権」・「ケアとしての苦情解決」を平野、「倫理的行動とコミュニケーション」・「問題解決のためのコミュニケーション・スキル」を関根が担当した。事例演習は、3名の教員各々が講義と関連付けて行い、受講生による事例報告は3名の教員が出席して、評価を行った。

選択科目であるため、受講生が少ないことが課題であったが、教育上履修が必要と考えられる課程の学生へオリエンテーション時に履修促進を行い、多数が受講した。

## 30) 看護政策論

1年次 後期

草間 朋子、信友 浩一、三舟 求真、佐藤 玉枝、甲斐 倫明

看護政策の基本となる保助看法の歴史から現代の課題までをレビューすると共に、医療保健に関するトピックスを交え、看護政策を考え、討論する形式をとった。講義内容は次の通りである。

1) 看護政策・制度の決定プロセス、2) 保助看法の現状と課題 保健師の視点から、3) 看護職の自律を目指して、4) 医療経済と保健政策、5) 発展途上国における医療援助、6) 大分県における健康対策、7) 看護政策の課題、8) グループ討論

## 31) 原書講読演習

1年次 後期

宮内 信治

世界保健機関によるプライマリケアに関するアルマ・アタ宣言の文章などの抜粋文献やNONPFが設定しているナースプラクティショナーに求められる領域別能力についての文書を教材として英文解釈の基礎に取り組んだ。その後、各自の興味関心のある分野に関連する文献を学生自身が選択し、担当教員の助言を受けながら英文の内容解釈に取り組んだ。

### 32) Intensive English Study

1年次 前期

Gerald T. Shirley

Competence in English is important for graduate students. This course aimed at improving the basic English language ability of students through intensive practice in reading, listening and grammar. It was an eight-week course in which students practiced reading, listening and grammar problems to help them improve their basic language abilities in these important areas. The course used a Computer Assisted Language Learning (CALL) system. The CALL course is designed so that students can access and practice CALL at any time on their computers at home and in the Graduate Student Room. There were no classroom sessions in this course. Students practiced the CALL course problems during their own time. Their progress was monitored and evaluated by the instructor during the eight-week course. Individual assistance and instruction was available to each student through consultation with the instructor. The course consisted of an orientation session in the CALL classroom in which the CALL course was introduced and class guidelines were discussed. The CALL course was offered from May 7 to July 1. The TOEIC-IP test was administered before and after the CALL course, and it was mandatory that students take both tests.

### 33) 課題研究

林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 伸子、高野 政子、稲垣 敦、安部 眞佐子、乾 つぶら、吉村 匠平、甲斐 倫明、品川 佳満、佐伯 圭一郎、小嶋 光明、菅野 公浩、伴 信彦、吉田 成一、岩崎 香子、関根 剛、坂口 隆之、影山 隆之

1年次生課題研究の選択者は4名である。それぞれの大学院生の助産実践に関する課題を挙げ、テーマの明確化、研究方法および研究計画について指導した。中間発表会を平成22年3月4日に行った。

2年次生課題研究の選択者は7名である。下記の課題研究発表会を平成21年12月21日に行った。

- (1) 月経痛の緩和に対する運動の有用性
- (2) これからの助産外来記録の開発
- (3) 褥婦のバースプランの目的認識と出産満足度との関連に関する研究
- (4) 出産後の母親の求める理想の助産師像についての研究
- (5) 臨床検査技師学生における子宮頸がん検診の知識に関する研究
- (6) 若年者におけるHPVワクチンの認知に関する研究
- (7) 院内助産開設に向けての概念の構築～院内助産モデルケースの聞き取り調査から～

### 34) 研究のすすめ方

1年次 前期

佐伯 圭一郎、稲垣 敦、平野 互、伴 信彦、梅野 貴恵、福田 広美、岩崎 香子

以下の内容で、研究を進める上で必要な技術的側面について講義し、研究活動の実践に必要な知識と技術を養った。

- |                  |    |
|------------------|----|
| 1. 看護研究の意義       | 佐伯 |
| 2. 研究の倫理と安全      | 伴  |
| 3. 実験研究の進め方      | 岩崎 |
| 4. 文献研究の進め方      | 平野 |
| 5. 調査研究の進め方      | 梅野 |
| 6. データ解析の基礎      | 佐伯 |
| 7. 文献検索の方法       | 稲垣 |
| 8. 研究のまとめ方・発表の方法 | 福田 |

### 35) 放射線健康科学特論 I

1年次 前期

甲斐 倫明、伴 信彦

放射線の基礎から健康影響・医療利用について、テキスト「放射線基礎医学（第11版）」に沿って講義形式で行った。講義内容は次の通りである。

- 1) 物質の構造と放射線、2) 放射線と物質の相互作用、3) 放射線に関する量と単位、4) 放射線の測定、5) X線発生装置とX線撮影の原理、6) 放射線診断用装置の画像作成原理、7) 放射線治療装置、8) 線量分布と線量計算、9) 放射線生物作用の一般的特徴、10) 放射線生物作用の化学的過程、11) 放射線損傷と細胞応答、12) 放射線損傷と細胞死、13) 放射線損傷と修復、14) 放射線損傷と突然変異

### 36) 放射線リスク学特論

1年次 前期

甲斐 倫明、伴 信彦

テキスト「放射線基礎医学（第11版）」および関連論文を用いて行った。講義内容は次の通りである。

- 1) 個体に対する放射線の作用、2) 放射線による悪性腫瘍の誘発、3) 胎内被曝の影響、4) 放射線の寿命に対する影響、5) 放射線の遺伝的影響、6) 医療における放射線防護、7) 低線量放射線の理解、8) CT被ばくのリスク推定、9) CTスクリーニングのリスク便益

### 37) 健康社会科学特論

1年次 前期

平野 互

人間の健康に関する研究において、個々の人間行動に対する分析と並んで、社会政策など社会システムに対する分析、人間行動に対する社会学等の集団的アプローチが重要であるため、これら社会科学的思想と方法論の基礎を習得することを目的として、講義と課題演習を行った。講義は、「社会システム論1 法と行政」、「社会システム論2 生存権と社会保障制度」、「障がい論とノーマライゼーションの理論」、「社会科学の方法(概論)」、「人権と研究倫理」、「社会学の方法」、「医療人類学の方法」、「医療経済学の方法」の各講で、課題演習は、1) 日本における医療・保健・介護の各政策に関するレポート作成、2) 医療・保健領域における社会諸科学の方法論による文献検索、3) 「不平等が健康を損なう」(イチロー・カワチ/ブルース・P・ケネディ著 日本評論社)をテキストとした抄読を行った。

### 38) 健康科学研究特論

前期

佐伯 圭一郎、稲垣 敦、伴 信彦、吉村 匠平

健康科学領域における研究の理論および手法を整理し、研究を進める上で必要な技術的側面について論じた。さらに、実際の研究例の輪読と検討により、研究活動に関する実践的能力の育成をおこなった。

### 39) 特別研究

修士課程4名、博士課程3名の学生がパワーポイントを使用して発表を行った。教員からの質問とコメントを参考に、次のステップである詳細な研究計画に反映するように指導した。

以下の科目は開講しなかった。

メンタルヘルス学演習、メンタルヘルス学特論Ⅰ、英語論文作成概論、環境健康科学演習、環境健康科学特論Ⅰ、環境疾病演習、環境疾病特論、基盤看護学演習、健康運動科学演習、健康運動科学特論Ⅰ、健康栄養学演習、健康栄養学特論Ⅰ、健康情報科学演習、健康情報科学特論Ⅰ、健康生理学演習、健康生理学特論Ⅰ、健康統計学演習、健康統計学特論Ⅰ、広域看護学演習、小児アセスメント学演習、小児看護学実習、小児看護学特論、小児薬理学演習、身体機能適応科学特論、成人看護学特論、生体機能学特論、対人援助演習、対人援助特論Ⅰ、妊娠褥婦保健指導実習、老年看護学実習、老年薬理学演習

1) 保健情報科学特論

1年次 前期

佐伯 圭一郎、品川 佳満

1名の履修者に個別に対応する形で実施した。疫学・生物統計学の観点から、実際の研究計画の立案に関連して検討を深めるとともに、研究の遂行に必要なICT技術の応用について、個別の具体的事例を通じて技能の向上を目指した。

2) 生殖看護学特論

1年次 前期

林 猪都子、梅野 貴恵

助産師の質の向上と自律的な活動を活性化するための方策について、助産師教育や助産師活動の国際的比較や、助産院、院内助産システムでの活動について探求した。日本と米国における助産師教育・活動の現状についての課題と助産師外来・院内助産における活動についての実際を教授して、今後の大学院教育および専門職者のあり方についてディスカッションした。

3) メンタルヘルス学特論Ⅱ

1年次 前期

影山 隆之

精神的健康のレベルやこれに関連する要因（職業性ストレス要因、疲労、QOL、睡眠健康など）を測定する、質問紙や客観的評価法について、演習により実務的に教授した。また、メンタルヘルス教育や研究デザインへの応用について教授した。

4) 対人援助特論Ⅱ

1年次

吉村 匠平、関根 剛

講義前半では、学習心理学の知見に基づく、応用行動分析について、基本的な概念の習得を目的に講義を行った。後半では、主として保健師が関連する危機介入の理論や実践に関する講義と紹介を行った。

5) 特別研究

博士課程3名の学生がパワーポイントを使用して研究中間報告会において発表を行った。教員からのコメントは論文をまとめる際に参考にするよう指導した。

以下の科目は開講しなかった。

メンタルヘルス学特別演習、環境健康科学特別演習、環境健康科学特論Ⅱ、看護管理学特論、健康運動科学特別演習、健康運動科学特論Ⅱ、健康栄養学特論Ⅱ、健康情報科学特別演習、健康情報科学特論Ⅱ、健康生理学特別演習、健康生理学特論Ⅱ、健康増進科学特論、健康統計学特論Ⅱ、国際看護学特論、生活支援看護学特論、生命病態学特論、精神保健学特論、発達看護学特論、放射線健康科学特別演習、放射線健康科学特論Ⅱ、放射線保健学特論、看護基礎科学演習

### 3-7 ボランティア活動

#### 1) 第24回Young Wing Summer Camp

高野 政子、薬師寺 綾

4年次生：山田 剛弘

2年次生：安部 早紀奈、穴見 美穂、衛藤 裕美、渡辺 希

1年次生：高橋 美琴、濱田 亜樹

サマーキャンプは糖尿病をもつ子どもとその保護者を対象とするキャンプで、学生は他の大分大学教育学部、医学部、別府女子短期大学等の学生や医師、看護師等と協働して運営に参加した。サマーキャンプの活動は、同じ病気をもつ子どもの仲間づくりや、病気の正しい理解や自信を持たせるという目的がある。この目的を達成するために、学生は5月から、8回の事前ミーティングをもち企画や役割を担い、8月7日～12日まで活動を支援した。教員は準備の全体会議に参加し、また、短期ではあるがキャンプにも参加して学生を支援した。

#### 2) こどもの健康週間 2009

高野 政子、田中 美樹、薬師寺 綾

4年次生：安部 悠、三好 由紀、竹中 美穂、森本 愛弓、三宅 希実

こどもの健康週間は、日本小児保健協会の呼びかけにより全国で様々な取り組みを行われているボランティア事業である。例年、大分県小児保健協会では体育の日（10月12日）に大分市高尾山公園で市民、親子のための企画を実施している。障がいや慢性疾患をもつ子どもたちや、その保護者が屋外活動や交流することを支援している。内容は、蘇生法や紙飛行機など楽しく学び、遊んでもらっている。本学の学生も毎年参加しており、ゲームコーナーで子どもたちと楽しく遊びを支援した。

#### 3) 大分県自閉症協会 夏季療育キャンプ

平野 互

2年次生：川添 絢子、徳丸 裕恭

1年次生：佐藤 謙次、佐藤 真人、鳴海 興亮

平成21年8月1日（土）・2日（日）の両日、博愛会パルクラブ（久住）において開催された自閉症児療育キャンプにボランティアとして参加した。学生は自閉症児またはきょうだい児を担当して、食事介助、レクリエーション等の活動支援を行うと共に、保護者の活動時間帯にはレスパイト・ケアを行って、キャンプの運営に貢献した。

#### 4) 第15回日本ALS協会大分県支部総会

伊東 朋子

4年次生：越智 巧太郎、石井 めぐみ、田中 美智子、小野 友紀恵、藤田 愛美

2年次生：川添 洵子

1年次生：佐藤 謙次

平成21年5月24日に実施された第15回日本ALS協会大分県支部総会、患者・家族のつどいにボランティアサークル(旧神経難病研究会として参加)の活動の一環として参加し、車イス介助や家族の支援に関わった。

#### 5) 博愛ふれあいフェスタ2009

井伊 暢美

4年次生：鷹取 希美

2年次生：川添 淳子

1年次生：佐藤 謙次

平成21年6月13日に医療法人謙誠会による「博愛ふれあいフェスタ2009」にボランティアとして参加した。発達に障害のある子どもたちと一緒に競技にでたり、食事や移動などの援助を行った。

## 4 学内セミナー

### 4-1 100万語英語多読講座

英語教育の一環として授業に取り入れている英語多読について、内容の紹介と認知度の向上を目的に、若葉祭にて公開講座を実施した。5月16日（土）、17日（日）の両日、午前と午後それぞれ1セッションずつ合計4回開催し、実際に多読用教材を来訪者に公開し、英語多読を体験してもらった。

### 4-2 CALL英語学習システム講座

CALLシステムについて、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7月19日（日）のオープンキャンパスにて、午前・午後1セッションずつ合計2回の模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際にCALLシステムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

## 5 学内プロジェクト研究

### 5-1 健康増進プロジェクト

研究者 稲垣 敦、桜井 礼子、平野 互、江藤 真紀、赤星 琴美 (10.1.23~)

今年度に実施した研究成果を以下に示す。

#### 1. 三次元動作解析を用いた高齢女性の起き上がり動作と腹筋力との関連

高齢女性の起き上がり動作を三次元動作解析と表面筋電図を用いて検討し、以下の結果が得られた：①高齢者の多くが体幹を回旋させる起き上がり方を選択しており、動作の方法や速さ、回旋の大きさには個人差がみられた。②より腹筋への負担の少ない起き上がり動作を行うためには、頭部の挙上、膝の屈曲角度や傾け方、右上肢の動かし方、左肘の着く位置と体幹の傾き、回旋の大きさ、といった体の動かし方の5つのポイントがあり、力のモーメントを同一方向に向け、遠心力を高めることで、よりスムーズな重心移動を行うことが重要である。以上の結果より、高齢者はこれらの5つのポイントを個人の筋力や身体能力に合わせて選択することが重要である。

#### 2. 高齢女性の体力づくりのための健康関連体力指標を用いた評価項目の検討

高齢女性の健康関連体力を総合的に評価できる体力測定項目および問診項目を検討し、以下の結果が得られた：①脚筋力 (76.5%) 以外の実施可能率は90%以上。②内臓脂肪は、握力、長座体前屈、開眼片足立ち、重心動揺、ステップングと関連 ( $P<0.05$ )。③筋量・部位別筋量は、握力、脚筋力、長座体前屈、ステップングと関連 ( $P<0.05$ )。以上の結果より、高齢女性には、握力、長座体前屈、開眼片足立ち、部位別身体組成評価、問診 (生活習慣、ADL、筋骨格系障害) が望ましいと推測された。

#### 3. 自閉症児の体格と生活習慣に関する実態調査：食習慣と余暇活動に着目して

肥満傾向にあると言われる自閉症児の生活習慣と体格の関連性を検討し、以下の結果が得られた：①健常児 (23.8%) よりも肥満児が多く (34.3%)、特に12歳未満 (40.7%) で多い。②生活習慣病を心配して食習慣に配慮している保護者が多く、食事量や食事時間は保護者がいる程度コントロールできている。③余暇活動はゲーム等、運動強度の低い活動が多く、社会性を要するルールのある集団遊び等が苦手。以上の結果より、生活習慣病予防のためにも、児が楽しめる余暇活動支援を検討してゆくことが重要であることが示唆された。

#### 4. 地域高齢者における転倒と義歯との関連

義歯使用の有無と転倒との関連性を検討し、以下の結果が得られた：①転倒経験の有無は、開眼片足立ち、重心動揺、適性体重の認識、食事バランスと関連 ( $P<0.05$ )。②義歯使用の有無は、握力、脚筋力、1 km歩行能力と関連 ( $P<0.05$ )。③残存歯数は、脚筋力、開眼片足立ち、ステップング、咀嚼力と関連 ( $P<0.05$ )。以上の結果より、欠損歯を増やさないと欠損歯を補うこと (義歯) は、転倒予防につながる可能性のあることが推測された。

#### 5. 1回の運動の効果

たまにする1回の運動の健康効果について登山を取り上げて検討し、以下の結果が得られた：①抑うつが登山後9~29日で低値 ( $P<0.05$ )。②失敗に対する不安は29日後まで低値 ( $P<0.05$ )。③行動の積極性は29日後まで高値。④HRは29日後まで高値。⑤膝伸展筋力は9日目以降高値。⑥体重、体脂肪量 (特に体幹部) は29日後まで低値。⑦HFは15日後まで低値、LF/HFは3日後まで高値。以上の結果より、運動指導では運動の継続や習慣化が強調されるが、たまにする1回の運動でも健康効果は長期間持続し、漸進的な改善は得られないかもしれないが、全くしないよりも良いことが推測された。

#### 6. ストレッチの多面的効果

多くの介護予防運動に含まれているストレッチの即時的効果について多面的に検討し、以下の結果が得られた：①HRの低下 ( $P<0.01$ )、②DBPの低下 ( $P<0.01$ )、③下腿部後面筋硬度の低下 ( $P<0.05$ )、④肩関節屈曲角の増加 ( $P<0.01$ )、⑤抑うつ、怒りの低減 ( $P<0.05$ )、⑥HFとHF+LFの

増加、LF/HFの低下。以上より、ROMの改善だけではなく、交感神経活動の抑制および副交感神経活動の抑制、リラクゼーション、ストレス低減の効果もあると推測された。

#### 7. 高齢者用ROM測定機器の開発

竹井機器工業と共同で高齢者用柔軟性測定機器の研究開発を進めることとなり、試作機の作成を開始した。

### 5-2 NPプロジェクト

研究者 藤内 美保、草間 朋子、安部 陽子、江藤 真紀、小野 美喜、甲斐 倫明、桜井 礼子、高野 政子、田中 美樹、林 猪都子、福田 広美、宮内 信治

ナースプラクティショナー（診療看護師）の役割に対する社会のニーズに対する実態調査をテーマに行った。

本学は平成20年度からナースプラクティショナー養成コースを開始している。NPはまだ日本では制度化されていないが、医療過疎地や無医地区など医療サービスが行き届かない地域では、特にNPの役割が求められているのではないかと考えた。制度化のためには、まず社会的な需要の見込み、NPの必要性などについて、社会のニーズを示す必要がある。そこで、無医地区や医療が充実している地域の住民や、NPと協働する医師を対象に、NPはどの程度必要とされているのか、NPの活動に何が求められているのか、また今後検討すべき課題はなにかについて、明らかにすることを目的に調査を行った。

無医地区の住民は、24時間の対応や訪問による診療、また緊急時における初期診療など、タイミング良く診療が受けられることが期待されていた。一方医療が充実している地域でも無医地区とほぼ同様の結果であり、NPが活動することでタイムリーな診療のサービスが可能となることが重要である。また8～9割の開業医および勤務医が、NPは患者へのメリットおよび医師へのメリットがあると回答し、NPに対する社会的ニーズは高いと考えられる。

## 6 先端研究

### 6-1 腎不全における低代謝回転骨の骨組成変化と骨強度との関連

研究者 岩崎 香子（生体化学研究室）

最近の疫学調査より副甲状腺ホルモン（PTH）分泌の低い腎不全患者は死亡率が高いだけでなく、骨折頻度が高いことが明らかとなった。しかしながら骨折頻度が高い理由は不明である。一方、骨の強度は骨密度と骨質の2つ要因によって規定されるが、PTH分泌の低い腎不全患者では骨代謝回転が低下しているため骨密度の低下は認められない。そのため、これらの患者に見られる骨折頻度上昇には骨質因子の変動が関与している可能性が考えられるが、詳細は不明である。本研究では骨質因子の1つである骨組成に着目し、物性分野で用いられるスペクトル解析と動的粘弾性評価法を用い、骨組成の変化と骨強度との関連を検討した。スペクトル解析よりコラーゲン成熟度に関するパラメータの低下および架橋構造の蓄積が明らかとなった。これらのパラメータは腎機能程度と関連が見られた。また骨の弾性率は腎機能低下に依存して低下していた。これらの結果より腎機能低下による骨質の変化は骨の弾性率に影響し骨折リスクを上昇させる可能性が考えられた。

### 6-2 月経随伴症状の軽減に関する運動の有用性の検討

研究者 林 猪都子（母性看護学・助産学研究室）

月経随伴症状は、下腹部痛、腰痛、頭痛、便秘などの身体症状と眠気、イライラ、神経質、抑うつなどの精神症状が知られている。月経随伴症状に対する適度な運動は全身の血液循環を改善し、月経随伴症状の軽減に効果があるといわれている。そこで、本研究は、骨盤を動かす腰の回旋運動を考案し、月経時における月経随伴症状の軽減に対する運動の効果を検討することを目的に研究した。

対象者は月経がある20代女性で、月経周期における調査日は月経開始後24時間以上～48時間未満とし、調査内容は自記式質問紙と運動30分間の皮膚表面温度測定とした。質問紙は24項目、運動は足を肩幅に開き立位で腰を回す骨盤回旋運動とした。皮膚表面温度の測定はデータ収集型ハンディタイプ温度計LT-8を使用し、皮膚表面温度は運動実施前及び運動実施中5分・10分・15分・20分・25分・30分に測定を行い、プローブ装着部位は腹部・腰部・足部とした。

結果は平均月経周期29.4日、平均月経持続日数は5.7日であった。月経時のセルフケアで運動をするものは1名であった。運動実施前後における月経随伴症状において「いらいらする」「気が散る」「不安になる」「気分が変わりやすい」「憂鬱になる」「根気が低下する」「集中力が低下する」などの精神的症状が軽減したのは、運動を行うことによって気分転換ができたことによるストレス軽減と考えられた。「下腹部が痛い」「腰が痛い」「乳房が痛い」などの身体症状が軽減したのは、腰部、腹部、肋骨部周辺の循環動態が改善され、腰部の皮膚表面温度が運動開始後20分以後に上昇したのは、腰部周辺の血液循環が促進したことが示唆された。

### 6-3 中国降下煤塵がアトピー性皮膚炎に及ぼす影響について

研究者 定金 香里（生体反応学研究室）

黄砂は、中国内陸部の砂漠地帯から巻き上げられた二酸化ケイ素を主とする微小粒子と中国大都市工業地帯を通過する際に吸着した硫黄酸化物などで構成されている。当研究室の先行研究において、砂漠地帯の砂よりも中国北京市降下煤塵の方が、マウスのアレルギー性気管支喘息様病態を強く増悪することがわかった。本研究では、この降下煤塵がアトピー性皮膚炎に及ぼす影響をモデルマウスを用いて調べた。モデルマウスのアトピー性皮膚炎発症部位に降下煤塵の懸濁液を繰り返し塗布したところ、症状が悪化する傾向を示した。また炎症部位におけるマスト細胞の脱顆粒の亢進や血清中の総IgE抗体の産生が強まる傾向がみられた。一方、血清中サイトカイン量については降下煤塵塗布の影響は著明ではなかったため、今後、炎症局所における炎症性サイトカインの発現を調べる必要がある。本研究の結果から、北京降下煤塵がアトピー性皮膚炎発症部位に付着すると炎症が増悪する可能性が示唆された。

### 6-4 大気中に存在する粒子が惹起する炎症反応に関与する因子の探索

研究者 吉田 成一（生体反応学研究室）

マクロファージや樹状細胞の膜上に存在するToll様受容体（TLR）は自然免疫系のみならず獲得免疫系を作動させる重要なセンサー機能を有している。微生物などの外来性異物がToll様受容体に作用すると免疫系が作動し、その結果、炎症が生じる。これまでの研究で都市の粉じんや黄砂に炎症を惹起する作用があることが明らかにされたが、この炎症惹起が粒子そのものにより生じるのか、粒子に付着している微生物由来の成分などにより生じるか不明である。そこで、本研究では大気中の粒子（非加熱および加熱処理）と微生物由来の成分であるリポ多糖（LPS、グラム陰性桿菌由来）やペプチドグリカン（PGN、グラム陽性球菌由来）を用い、炎症惹起の起因子の探索を行った。その結果、非加熱の粒子は、炎症性サイトカインであるIL-1 $\beta$  mRNA発現を誘導したが、加熱処理した粒子では、その誘導は認められなかった。加熱処理により、粒子に付着している有機物は除去されたと考えられることと、LPS、PGN処理によってもIL-1 $\beta$  mRNA発現誘導が生じたことから、IL-1 $\beta$  mRNA発現誘導には粒子そのものではなく、粒子に付着・吸着している化学物質が関与していることが示唆された。

## 7 奨励研究

### 7-1 看護基礎教育におけるフィジカルアセスメント教育への提案～新人看護師に焦点を当てて～

研究者 田中 佳子、藤内 美保（看護アセスメント学研究室）

新人看護師を対象に19のフィジカルアセスメントについて自記式質問用紙と個人またはグループでの半構造的面接調査を行った。その結果から、1. 臨地実習でフィジカルアセスメントの実施を充実、2. 疾患の症状や全身状態の観察に関する項目は看護基礎教育で習得、3. 日常生活評価に関する項目の強化、4. 看護師養成機関でのフィジカルアセスメント教育水準の統一、5. 臨地実習での実践後に再度教育することを提案する。

### 7-2 In vivoにおける放射線誘発バイスタンダー効果の検討

研究者 小嶋 光明（環境保健学研究室）

放射線を照射した細胞が周辺の細胞に何らかの細胞生物学的影響を引き起こす現象をバイスタンダー効果という。本研究では、in vivo（生体内）で放射線を照射した末梢血リンパ球がバイスタンダー効果を引き起こすのかDNA損傷を指標として検討した。その結果、X線照射後1日目に、放射線を照射した末梢血リンパ球がバイスタンダー効果を引き起こすことが分かった。また、このバイスタンダー効果は照射後7日目でも観察されたことから、放射線を照射した末梢血リンパ球が比較的長期間バイスタンダー効果を誘発し続けている可能性が考えられた。また、興味深いことに、照射後30日目にも再びバイスタンダー効果の誘発が見られた。放射線を照射した末梢血リンパ球が遅延性にバイスタンダー効果を生じるのか更なる検討が必要である。

### 7-3 NPに対する看護職者の意識 —韓国・アメリカ・日本の看護職を比較して—

研究者 桑野 紀子（国際看護学研究室）

看護職の「NPに対する認識」に着目し、日本・アメリカ・韓国で質問紙調査を行った。日・韓・米の病院等に勤務する看護職者を対象とし、2009年6～9月に調査を実施した。日本では、NPの認知度が低く、その必要性についても肯定した人は約3割にとどまっていた。韓・米ではNPが一定の成果を出しているという認識が形成されていた一方で、日本では、NPに関する情報提供が十分ではないこと、看護職の役割拡大について看護職者自身が考える機会や判断材料の提供が乏しいことが示唆された結果であった。

日本でも各国のNPの活躍について十分に情報提供を行い、看護職が自ら積極的にその役割について問い直す機会を増やしていく必要があると考える。また、日本の文化や社会状況に即した法整備や教育体制のあり方等について社会全体で検討を重ね、制度面から看護職の役割拡大を牽引していくことも重要であろう。

#### 7-4 基礎看護技術のe-learningシステムの構築

研究者 小野 さと子、伊東 朋子、志賀 寿美代、塩月 成則、神取 美恵子（基礎看護学研究室）  
佐伯 圭一郎（健康情報科学研究室）

当研究室では、学生にいつでも主体的に学習できる反復学習システム環境の提供を目的に、視聴覚教材の開発とe-learningシステムの構築、実用化をめざして取り組んでいる。本システムは、既存のmoodle（Learning Management System: LMS）を活用し、いくつかのモジュールを組み合わせることにより、Webを活用した学習教材、学習進捗や履歴の管理、学習者支援の3つで構成した。学習教材は、音声による手順解説を備えた動画、技術項目に関連する知識確認のための問題と解説、およびメールによる質問窓口の設置とした。現在完成している看護技術項目は、おむつ交換の方法で、10分56秒の動画と10項目のテスト問題から成る。回答は誤答するたびに解説を設置し、2回答え直しができるシステムである。今後は、システムの完成と試行、成果の検証に取り組む予定である。

## 8 インターネットジャーナル「看護科学研究」

平成11年12月に「大分看護科学研究」として創刊し、平成17年に名称変更したインターネットジャーナル「看護科学研究」は、第8巻2号が12月に刊行された。論文および執筆要項等は本学ホームページ (<http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/index.html>) に公開されており、誰でも無料で投稿および講読することができる。

### 第8巻 第2号

#### 資料

外来看護の質向上のための環境システム整備に関する調査

大津 佐知江、佐伯 圭一郎、草間 朋子

#### 資料

保健師の業務・裁量範囲の拡大に関する一考察

江藤 真紀、赤星 琴美、草間 朋子

#### トピックス

日本の看護への期待: Nurse PractitionerとCertified Nurse Specialistの共存

エクランド 源 稚子

#### トピックス

時代が求める自律した助産師への期待

宮崎 文子

## 9 業績

### 著書

#### 平野 亙

- Q&A医療・福祉と患者の権利 第2版 2章Q2-2 カルテには専門用語が多いので、患者が見てもわからないという人もいます。本当ですか？ 58-61, 明石書店, 東京, 2009
- Q&A医療・福祉と患者の権利 第2版 2章Q2-4 患者には『知る権利』だけでなく『知らされない権利』もあるのですか？ 68-71, 明石書店, 東京, 2009
- Q&A医療・福祉と患者の権利 第2版 4章Q4-6 臓器移植をめぐって、患者にはどのような権利がありますか？ 142-146, 明石書店, 東京, 2009
- Q&A医療・福祉と患者の権利 第2版 5章Q5-5 『人は誰でもミスをする』といわれます。では、医療事故も防ぐことはできないのでしょうか？ 182-185, 明石書店, 東京, 2009
- Q&A医療・福祉と患者の権利 第2版 5章Q5-6 チーム医療を進めていくうえで、どのような事故防止対策が必要ですか？ 186-189, 明石, 東京, 2009
- Q&A医療・福祉と患者の権利 第2版 6章Q6-4 病院や介護施設における『拘束』とはどのようなことですか？それはなぜいけないのですか？ 229-232, 明石書店, 東京, 2009
- Q&A医療・福祉と患者の権利 第2版 6章Q6-5 『障がい者の自立』とはどういうことを指すのですか？ 233-236, 明石書店, 東京, 2009
- Q&A医療・福祉と患者の権利 第2版 6章Q6-6 『自立支援』とは、本当はどのような意味ですか？ 237-240, 明石書店, 東京, 2009

### 研究論文

- T. Ichinose, K. Hiyoshi, S. Yoshida, H. Takano, K. Inoue, M. Nishikawa, I. Mori, H. Kawazato, A. Yasuda, T. Shibamoto., Asian sand dust aggravates allergic rhinitis in guinea pigs induced by Japanese cedar pollen., *Inhal Toxicol*, 21 (12), 985-993, 2009
- Y. Totsuka, T. Higuchi, T. Imai, A. Nishikawa, T. Nohmi, T. Kato, S. Masuda, N. Kinae, K. Hiyoshi, S. Ogo, M. Kawanishi, T. Yagi, T. Ichinose, N. Fukumori, M. Watanabe, T. Sugimura, K. Wakabayashi, Genotoxicity of nano/microparticles in in vitro micronuclei, in vivo comet and mutation assay systems., *Part Fibre Toxicol.*, 3, 6, 23, 2009
- E. Konishi, M. Yahiro, N. Nakajima, M. Ono, The Japanese value of harmony and nursing ethics, *Nursing Ethics*, 16(5), 625-636, 2009
- Y. Tomotsune, S. Sasahara, T. Umeda, M. Hayashi, K. Usami, S. Yoshino, T. Kageyama, H. Nakamura, I. Matsuzaki, The association of sense of coherence and coping profile among research park city workers in Japan, *Industrial Health*, 47, 664-672, 2009
- J. Umemori, A. Nishi, A. Lionikas, T. Sakaguchi, S. Kuriki, D.A. Blizard, T. Koide, QTL analyses of temporal and intensity components of home-cage activity in KJR and C57BL/6J strains, *BMC Genetics*, 10(40), 2009
- H. Fujisawa, Y. Horiuchi, Y. Harushima, T. Takada, S. Eguchi, T. Mochizuki, T. Sakaguchi, T. Shiroishi, N. Kurata, SNEP: Simultaneous detection of nucleotide and expression polymorphisms using Affymetrix GeneChip, *BMC Bioinformatics*, 10(131), 2009

- R. Yanagisawa, H. Takano, KI. Inoue, E. Koike, Sadakane K, T. Ichinose, Size effects of polystyrene nanoparticles on atopic dermatitislike skin lesions in NC/NGA mice., *Int J Immunopathol Pharmacol*, 23 (1), 131-141, 2010
- N. Ban, M. Kai, Implication of replicative stress-related stem cell ageing in radiation-induced murine leukaemia, *British Journal of Cancer*, 101(2), 363-371, 2009
- S. Miyauchi, Phonetic Symbols in English Education, A Survey of Students in a Nursing University, *日本英語音声学会 学術論文集 「英語音声学」*, 13, 101-108, 2009
- S. Yoshida, K. Hiyoshi, T. Ichinose, H. Takano, S. Oshio, I. Sugawara, K. Takeda, T. Shibamoto, Effect of nanoparticles on the male reproductive system of mice., *Int J Androl*, 32(4), 337-342, 2009
- S. Yoshida, K. Hiyoshi, S. Oshio, H. Takano, K. Takeda, T. Ichinose, Effects of fetal exposure to carbon nanoparticles on reproductive function in male offspring., *Fertil Steril.*, 93(5), 1695-9, 2010
- S. Yoshida, K. Hiyoshi, T. Ichinose, M. Nishikawa, H. Takano, K. Takeda, Aggravating effect of natural sand dust on male reproductive function in mice., *Reprod Med Biol*, 8, 151-156, 2009
- 李 笑雨, Maki Konno, Rika Yatsushiro, A Study on image and self-care of menstruation of university students in Japan & Korea, *Japan Journal of Maternal Health*, 49(4), 628-636, 2009
- 李 笑雨, Bae, J., Wolpin, S. Kim, E. Yoon, S. An, K., Development of a user-centered health information service system for depressive symptom management, *Nursing and Health Sciences*, 11, 185- 193, 2009
- 李 笑雨, Sakurai, R. Yatsushiro, R. Ayame, M. Choi, K. Park K. Ryu, E., Comparison of job satisfaction between Japanese & Korean nurses, *J. of the Korean Data Analysis*, 11(5), 2303-2314, 2009
- 井伊 暢美、平野 互、高野 政子、宮崎 文子, 保健師に求められる広汎性発達障害児と保護者への支援ニーズの検討, *保健師ジャーナル*, 65(04), 318-323, 2009
- 島田三恵子、竜岡久枝、乾 つぶら、早瀬麻子、白井文恵、安達智美, 乳児の睡眠の発達を促す育児法, *保健の科学*, 51(1), 11-16, 2009
- 新川治子、島田三恵子、早瀬麻子、乾 つぶら, 現代の妊婦のマイナートラブルの種類、発生率及び発症頻度に関する実態調査, *日本助産学会誌*, 23(1), 48-58, 2009
- 岡崎 寿子、佐藤みつよ、高波利恵、岩崎香子, 中学生の放課後の活動および栄養摂取状況が踵骨量に与える影響, *Osteoporosis Japan*, 17(2)、234-237, 2009
- 小野 美喜 小西 恵美子, 臨床看護師が認識する「よい看護師」の記述—若手看護師の視点—, *日本看護学教育学会誌*, 18(3)25-34, 2009
- 小野 美喜、小西 恵美子、八尋 道子, 明治から現代までの教科書に記述された「よい看護師」の変遷, *日本看護倫理学会誌*, 2(1), 15-22, 2009
- 岡田 麻衣、影山 隆之, 大分県における性・年齢階級別の「病苦」自殺率および「経済・生活苦」自殺率, *看護科学研究*, 8, 1-8, 2009

軽部 薫、林 猪都子、安部 眞佐子、産後1ヶ月と産後4ヶ月における姿勢と体形の変化、母性衛生、50(2)、2009

塩月 成則、栗山 真由美、長期間人工呼吸器を装着したCOPD患者の栄養管理に関する考察 - 必要エネルギー・脂質代謝に焦点を当てて -、近畿中央病院医学雑誌、29、41-48、2009

高野 政子、森崎 美紀、母親の食意識と3歳児の肥満や食行動との関連についての検討、第39回日本看護学会論文集（地域看護）、39、51-53、2009

山本浩世、田中 美樹、高野政子、「母乳が不足している」という母親の母乳育児に関する認識、母性衛生、50(1)、110-117、2009

藤内 美保、菊池 志津子、小西 恵美子、CON(Client Oriented Nursing)に基づき「看護」を確立させる 改正カリキュラム「基礎看護」、看護教育、51(2) 158-163、2010

尾倉 愛実、福田 広美、立川 裕子、上尾 裕昭、乳がん手術後患者の術式によるQOLとソーシャルサポートの変化、がん看護、14(4)、523-528、2009

李 笑雨、韓国 専門性 高 看護職 活躍、Japan Journal of Nursing Business、3(8)、699、2009

李 笑雨、韓国 看護師 国際 移動、Japan Journal of Nursing Business、3(11)、976、2009

## その他の論文

影山 隆之、睡眠に対する環境騒音の影響、航空環境研究、13、17-22、2009

甲斐 倫明、放射線診断医が知っておくべき放射線被ばくの基礎知識(1) 放射線防護概論、臨床画像、25(6)、686-691、2009

影山 隆之、大分県の自殺関連調査から一であり、想像力、共有をキーワードに、こころの健康、24(1)、2-16、2009

李 笑雨、韓国 看護 基礎 教育 現状 & 課題、Japan Journal of Nursing Business、3(5) 419、2009

李 笑雨、韓国 看護職 継属教育 & 大韓看護協会 役割、Japan Journal of Nursing Business、4(2) 146、2009

宮内 信治、書評 『英語のイーザーリスニングとディクテーション』、日本英語音声学会中部支部 学術論文集 「応用音声学と複合領域研究」、2、353-354、2009

桜井 礼子、ウズベキスタンで看護教育を『変える』 JICA「看護教育改善プロジェクトの概要」、看護教育、51-1 66-71、2010

## 学術講演等

市瀬 孝道, 黄砂と中国大都市粒子状物質の健康影響, 日本気象学会2009年秋期大会, 福岡県, 2009. 11

市瀬 孝道, 黄砂の健康問題と今後の課題, 第3回環日本海域環境シンポジウム, 石川県, 2009. 10

市瀬 孝道, 黄砂の健康影響, 第5回全国環境研究所交流シンポジウム「PM2.5を考えるー実態、測定、モデル、影響」, 茨城県, 2010. 2

市瀬 孝道, 黄砂とアレルギー, 大気環境と気道疾患を考える会, 島根県, 2010. 2

稲垣 敦, 生活課題に関連づけた体力評価, 日本体育学会第60回記念大会シンポジウム, 東広島, 2009. 8

岩崎 香子, 至適な骨を得るためには, 第42回九州人工透析研究会総会 “CKD-MBDシンポジウム”, 福岡県, 2009. 11

岩崎 香子, 透析患者の食事摂取状況と骨量, 第21回ROD-21研究会, 兵庫県, 2010. 2

影山 隆之, 教員のメンタルヘルス, 日本学校メンタルヘルス学会第13回大会, 東京都, 2010. 1

平野 互, 医療における人権, 大分県 平成21年度単位民生委員児童委員協議会会長研修会, 別府市, 2009. 6

平野 互, 患者の権利

平野 互, 患者の権利オンブズマン

平野 互, 患者の権利論 ～医療をめぐる人権と具体的権利, NPO法人患者の権利オンブズマン 2009年度患者(利用者)アドボカシー研修講座, 福岡県, 2009. 10

平野 互, 苦情調査における調査・分析の手法

平野 互, 自閉症スペクトラムの理解, 第2回大分地域リハビリテーション・ケア研究大会 シンポジウム, 別府市, 2009. 11

平野 互, 訪問看護における患者の権利と意思決定の支援, 大分県看護協会訪問看護基礎研修(短期), 大分市, 2009. 11

宮内 信治, 物語朗読における音調変動の解釈, 平成21年度大分県立看護科学大学アニュアルミーティング, 大分市, 2010. 3

吉田 成一, 大気汚染物質による精子形成の悪化, 日本アンドロロジー学会・第28回学術大会, 富山県, 2009. 7

## 学会発表

- 安部 眞佐子、神菌 めぐみ、高松 伸枝、堤 ちはる，認可保育所給食担当者の食物アレルギーへの対応について，第63回日本栄養食糧学会，長崎県，2009.5
- 安部 眞佐子、中島 未貴、吉留 厚子，妊娠中の食物除去の状況について，第46回日本小児アレルギー学会，福岡県，2009.12
- 井伊 暢美，発達障害児・者のための就労支援-TTAPを活用して-，第15回 大分小児保健学会，大分県，2009.9
- 石田 佳代子，看護系大学の新人教員を対象としたFDに関する文献検討，第35回日本看護研究学会学術集会，神奈川県，2009.8
- 市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里、原田 名美子、石川 雄一，キノコと柚子抽出物のアレルギー抑制効果の検討，日本薬学会第130年会，岡山県，2010.3
- 伊東 朋子、西平 俊哉，透明文字盤を使用する筋萎縮性側索硬化症療養者にとって負担の少ないコミュニケーション方法の検討，第57回日本職業・災害医学会学術大会，大阪府，2009.11
- 稲垣 敦，ヨガの介護予防効果，日本体育測定評価学会第9回大会，川崎市，2010.2
- 岩崎 香子、大和 英之、深川 雅史，無形成骨症における易骨折性成因に関する検討—骨質の変化と骨強度—，第52回日本腎臓学会学術集会，神奈川県，2009.6
- 山田 紘実、衛藤 加奈、松山 和弘、野村 芳雄、中田 健、松山 家久、阿部 克成、三好 信行、友雅司、岩崎 香子，外来維持透析患者の食事療法の遵守とQOLとの関連，第54回日本透析医学会学術集会・総会，神奈川県，2009.6
- 衛藤 加奈、山田 紘実、松山 和弘、野村 芳雄、中田 健、松山 家久、阿部 克成、三好 信行、友雅司、岩崎 香子，外来維持透析患者の食事時のミネラル摂取と踵骨量，第54回日本透析医学会学術集会・総会，神奈川県，2009.6
- 岩崎 香子，腎性骨症における骨ミネラル代謝への終末糖化産物の関与，平成21年度CKD研究会，東京都，2009.7
- 岩崎 香子、大和 英之、深川 雅史，慢性腎臓病における無形成骨症では、骨コラーゲン成熟架橋、老化架橋などの骨質変化が骨脆弱性を惹起し、貯蔵弾性率を低下する，第27回日本骨代謝学会学術集会，大阪府，2009.7
- Y. Iwasaki, H. Yamato, M. Fukagawa, The Change of Bone Quality, which is an Accumulation of Enzymatic and Non-Enzymatic Collagen Crosslink, Leads to Increasing Bone Fragility in Adynamic Bone Disease., American Society of Bone and Mineral Research 31th Annual meeting, Denver (USA), 2009.9
- 田邊 愛季子、阿部 里美、宮野 康子、梅野 貴恵，膝押し操体法による分娩第I期経過時間の短縮，第11回日本医療マネジメント学会学術総会，長崎県，2009.6
- 梅野 貴恵，母乳育児と更年期の関係，2009年育児応援セミナー 第15期育児としつけの大学講座・食育推進ネットワーク，福岡県，2009.7
- 小嶋 光明，放射線誘発 DNA 初期損傷の線量率効果～放射線の繰り返し照射が DNA 初期損傷に与える影響～，第43回日本保健物理学会，大阪府，2009.5
- 小嶋 光明，放射線誘発DNA初期損傷の線量率効果～放射線の繰り返し照射が DNA 初期損傷に与える影響～，第56回放射線影響懇話会，湯布院，2009.7

小嶋 光明、田代 千佳、伴 信彦、甲斐 倫明、線量率効果の誘導メカニズムをDNA損傷・修復モデルで説明できるか？～放射線の繰り返し照射が DNA損傷に与える影響～、第52回放射線影響学会、広島県、2009.11

小嶋 光明、放射線誘発バイスタンダー効果による放射線適応応答の誘導、京都大学原子炉実験所専門研究会、京都府、2009.1

小野 美喜、よい看護師を育むものと阻むもの：臨床看護師の視点、日本看護倫理学会、長野、2009.6

E. Konishi, M. Ono, Japanese nurse's perceptions of the "good nurse work", International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, Kobe, 2009.9

甲斐 倫明、小野 孝二、長谷川 隆幸、勝沼 泰、吉武 貴康、伴 信彦、高橋 史明、佐藤 薫、遠藤 章、日本人ボクセルファントムによるCT診断時の線量評価システムの開発 - 1: 開発目的と全体計画 -, 日本保健物理学会第43回研究発表会、大阪府、2009.6

影山 隆之、「自損行為」で救急車搬送された事例の性・年齢分布に関する大分県実態調査、第33回日本自殺予防学会総会、大阪府、2009.4

影山 隆之、安部 留美、某工場で三交替勤務に従事する男性の不眠とその関連要因、およびヒヤリハット経験、第82回日本産業衛生学会、福岡県、2009.5

影山 隆之、中高年住民の自殺についての意識～大分県心の健康基礎調査から、第25回日本精神衛生学会大会、東京都、2009.11

影山 隆之、三交替勤務についている男性工員の不眠の関連要因；特に職場ストレスとの関連、第25回日本精神衛生学会大会、東京都、2009.11

影山 隆之、自殺についての住民意識とストレス対処行動の関連、第55回大分県公衆衛生学会、大分市、2010.2

影山 隆之、大海 美咲、漁村の在宅高齢者の睡眠健康と生活習慣、第55回大分県公衆衛生学会、大分市、2010.2

河野 梢子、藤内 美保、小西 恵美子、ボランティアに生きたある方の最期の半年；ボランティアの意味と望ましい死、第2回看護倫理学会、長野県、2009.6

鄭 佳紅、上泉 和子、内布 敦子、坂下 玲子、桜井 礼子、福田 広美、栗屋 典子、村上 眞須美、一般病棟における看護ケアの質評価 Web版看護ケアの質評価総合システムを用いて、病院管理学会、東京都、2009

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、小池 英子、井上 健一郎、オクチルフェノールによるNC/Ngaマウスアトピー性皮膚炎の増悪作用、第21回日本アレルギー学会春季臨床大会、岐阜県、2009.6

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、ユズ果皮成分のアトピー性皮膚炎軽減効果の検討、第21回日本アレルギー学会春季臨床大会、岐阜県、2009.6

小池 英子、柳澤 利枝、井上 健一郎、定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、ベンゾ(a)ピレン曝露によるアトピー性皮膚炎モデルマウスの所属リンパ節における変化、第21回日本アレルギー学会春季臨床大会、岐阜県、2009.6

柳澤 利枝、高野 裕久、小池 英子、定金 香里、市瀬 孝道、井上 健一郎、Benzo[a]pyrene(BaP)曝露がマウスアトピー性皮膚炎モデルに及ぼす影響、第21回日本アレルギー学会春季臨床大会、岐阜

県, 2009. 6

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、井上 健一郎、小池 英子、ダニ抗原誘発性アトピー性皮膚炎モデルマウスにカビ抽出物を気管内投与した影響, 第50回大気環境学会年会, 神奈川県, 2009. 9

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、小池 英子、井上 健一郎、好湿性真菌によるNC/Ngaマウスアトピー性皮膚炎様症状の増悪作用, 第59回日本アレルギー学会秋季学術大会, 秋田県, 2009. 1

佐藤 みつよ、竹林 可織、吉村 匠平、関根 剛, 青年期の愛着スタイルと携帯メール依存との関係, 九州心理学会第70回大会, 佐賀県, 2009. 12

関根 剛、中村 友紀、佐藤 みつよ、吉村 匠平, 発話速度が看護師の性格印象に与える影響, 九州心理学会, 佐賀大学, 2009. 9

関屋 伸子、原口 里恵、宮崎 文子, 妊婦の身体的変化による家庭における入浴の不便さ, 第23回日本助産学会学術集会, 東京都, 2009. 3

関屋 伸子、梅野 貴恵、高瀬 恵子、甲斐 洋子、伊東 くり子、河野 美知子、林 猪都子、宮崎 文子, 母性看護学実習における男子学生のストレスに関する研究, 第40回日本看護学会 - 看護教育 - 学術集会, 岡山県, 2009. 8

関屋 伸子、山根 千明、林 猪都子、宮崎 文子, 看護学生のQOL (自己健康感) からみたHPVワクチンに関する意識調査, 第50回日本母性衛生学会学術集会, 神奈川県, 2009. 9

加治佐 恵、釈迦利 美香、河野 亜矢、秦 博子、秦 喜八郎、神品 朱里、関屋 伸子, 褥婦の産後うつ傾向に関する実態調査, 平成21年度宮崎県母性衛生学会学術集会, 宮崎県, 2009. 1

山根 千明、関屋 伸子、林 猪都子、宮崎 文子、谷口 一郎, 看護学生の子宮頸がんに対する意識と希望する検診の在り方, 第6回大分県母性衛生学会学術集会, 大分市, 2009. 11

高波 利恵, 製造業大規模事業所労働者の保健行動取組のプロセスとそれに影響する要因, 日本産業衛生学会, 福岡県, 2009. 5

M. Takano, M. Ono, T. Kusama et al, Evaluation of Nurse Practitioner Education Program on Master Course in Japan, The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, Hyogo, Japan, 2009. 9

M. Takano, N. Murakami, H. Fujii, Development of an Internet-based System Linking In-hospital and School Class, The 7th International Nursing Conference (INC 2009), Seoul, Korea, 2009. 1

高野 政子, 小児救急に関わる看護師の意識調査から見えてくる実態と課題, 第14回日本看護研究学会九州沖縄地方会学術集会, 宮崎県宮崎市, 2009. 11

田中 美樹、高野 政子, 退院後にへき地に戻る母子に対する支援と地域連携—NICU看護職のインタビュー調査から—, 第14回日本看護研究会九州・沖縄地方大会学術集会, 宮崎県, 2009. 11

藤内 美保、林 猪都子、小野 美喜、高野 政子、桜井 礼子、江藤 真紀、福田 広美、田中 美樹、岡田 八重子、新野 峰子、関弘子、湯沢 八江、古都 昌子、山西 文子、草間 朋子, 大学院修士課程におけるナースプラクティショナー (NP) 養成教育のあり方, 第29回日本看護科学学会交流集会, 千葉県千葉市, 2009. 11

藤内 美保, 看護教育のこれからと大学が県病に求めるもの, 大分県立病院主催総合医学会総会, 大分市, 2010. 3

板井 里枝、林 猪都子、軽部 薫、健康女性の尿失禁とその要因に関する研究、第50回 日本母性衛生学会学術集会、神奈川県横浜市、2009.9

衛藤 菜々恵、林 猪都子、関屋 伸子、産褥期入院中における上の子どものファミリールーム宿泊による母親への影響、第50回 日本母性衛生学会学術集会、神奈川県横浜市、2009.9

I. Hayashi, A. Yoshidome, Changes in the attitude of Japanese high school students before and after sex education, The 19th WAS World Congress for Sexual Health, Goteborg Sweden, 2009.6

I. Hayashi, K. Karube, Y. Ishioka, Y. Umeno, N. Sekiya, T. Inui, A discussion on the effectiveness of reinforcement of the curricula for midwifery in clinical performance on the job -Focusing on knowledge and practice of bachelor/master degree graduates in terms of ultrasonography diagnosis and health guidance for pre-natal pregnant women-, First Academic Exchange on Nursing among Japan, ROK and China, China Beijing, 2009.8

林 猪都子、助産学教育課程における教育内容と就労後の活用状況—超音波診断、妊娠期保健指導に焦点をあてて—、日中韓看護学会、北京、2009.8

浦崎 康子、松原 聖子、佐藤 由枝、姫野 昭子、高橋 典子、田代 文恵、佐藤 加代、末清 寛子、衛藤 眞理、松原 美保、林 猪都子、乾 つぶら、産褥期の乳頭損傷・乳頭痛に対するユキノシタの有効性について、大分県母性衛生学会、大分、2009.11

F. Takahashi, A. Endo, K. Sato, T. Hasegawa, Y. Katsunuma, K. Ono, T. Yoshitake, N. Ban, M. Kai, Analysis of organ doses from computed tomography (CT) examination by the radiation transport calculation to develop the dosimetry system, WAZA-ARI, The Fifth International Symposium on Radiation Safety and Detection Technology (ISORD-5), 福岡県、2009.7

伴 信彦、渡邊 あや、甲斐 倫明、放射線照射後の造血系回復過程に関する実験・数理解析 —白血病リスクの照射時年齢依存性との関連、日本保健物理学会第43回研究発表会、大阪府、2009.6

伴 信彦、甲斐 倫明、放射線誘発マウス白血病における造血幹細胞老化の寄与、日本放射線影響学会第52回大会、広島県、2009.11

宮内 信治、学習者用文学読本『Sense and Sensibility』の音源における音調変動の違いの解釈と考察、日本英語音声学会 第12回関西・中国支部研究大会、大阪府、2009.9

吉田 成一、森 由美子、甲斐 貴雅、石川 雄一、矢野 遼太、長谷部 達美、市瀬 孝道、柑橘果皮中に含まれるアレルギー抑制作用を有する物質の探索、フォーラム2009：衛生薬学・環境トキシコロジー、沖縄県、2009.11

吉田 成一、高野 裕久、市瀬 孝道、大気中に含まれる微粒子の胎仔期曝露が出生仔の免疫系に与える影響、日本薬学会第130年会、岡山県、2010.3

吉村 匠平、電子メールを用いた現職教員への遠隔コンサルテーション、日本学校心理士会2009年度大会、大阪府、2009.8

吉村 匠平、看護学生の性格特性と好まれる看護教員のリーダーシップ特性の関係、第70回九州心理学会、佐賀県、2009.12

吉村 匠平、大学間・ライブ型・遠隔講義における学習環境の構築、第16回大学研究フォーラム（京都大学）、京都府、2009.3

李 笑雨、Comparative study on terminally ill children nursing care between Korea & Japan, Palliative Care 2009: combining the 10th Australian Palliative Care Conference & the 8th Asian Pacific Hospice Conference, Perth, Western Australia, 2009.9

## 10 地域貢献

### 講演等

- 安部 眞佐子 サプリメントはイワシのあたま？，平成21年度大分県立看護科学大学公開講座，本学，2009.7
- 石田 佳代子 看護過程，平成21年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会，大分市，2009.6  
はじめての介護技術― 楽しく学ぶ食事の介助―，大分県立看護科学大学公開講座「くらしの安全と健康」，大分市，2009.7  
教育実践能力の向上に向けて ～フィジカルアセスメントの教授法を学ぶ～，平成21年度看護師等学校養成所専任教員再教育研修会，大分市，2009.7  
フィジカルアセスメント1，平成21年度大分県看護協会研修会 ジェネラリストI，大分市，2009.8  
フィジカルアセスメント2，平成21年度大分県看護協会研修会 ジェネラリストI，大分市，2009.11
- 稲垣 敦 大分県立看護科学大学健康増進プロジェクトの活動，第68回日本公衆衛生学会総会，奈良，2009.10  
みんなで取り組む介護予防運動，大分市介護予防事業，大分市，2009.4  
みんなで取り組む介護予防運動，大分市介護予防事業，大分市，2009.4  
みんなで取り組む介護予防運動，大分市介護予防事業，大分市，2009.5  
みんなで取り組む介護予防運動，人生いきいきはつらつスクール，大分市，2009.5  
運動指導・体力テスト，大分丘の上病院スポーツデイ，大分市，2009.5  
みんなで取り組む介護予防運動，大分県介護予防事業，竹田市，2009.6  
介護予防運動指導，トリニータ介護予防教室，大分市，2009.7  
介護予防運動指導，大分市介護予防事業，大分市，2009.7  
介護予防運動指導，トリニータ介護予防教室，大分市，2009.8  
介護予防運動指導，大分市介護予防事業，大分市，2009.9  
介護予防運動指導，トリニータ介護予防教室，大分市，2009.9  
介護予防運動指導，トリニータ介護予防教室，大分市，2009.9  
健康チェック，トリニータ健康づくりプログラム，大分市，2009.9  
介護予防運動指導，大分市介護予防事業，大分市，2009.9  
健康チェック，健康チェックトリニータ健康づくりプログラム，大分市，2009.10  
健康チェック，第35回富士見が丘団地体育祭，大分市，2009.10  
介護予防運動指導，大分市介護予防事業，大分市，2009.10  
みんなで取り組む介護予防運動，大分市介護予防事業，大分市，2009.11  
介護予防運動指導，大分市介護予防事業，大分市，2009.11  
高齢者の健康と運動，大分市婦人会月例会，大分市，2009.11  
介護予防運動指導，大分市婦人会講演会，大分市，2009.12  
みんなで取り組む介護予防運動，大分市介護予防事業，大分市，2010.1  
介護予防運動指導，おおいた学びフェスタ，別府市，2010.2  
みんなで取り組む介護予防運動，大分市介護予防事業，大分市，2010.2
- 岩崎 香子 簡単な理科実験，大分県立看護科学大学公開講座，大分市，2009.5
- 梅野 貴恵 「看護研究の基礎」，平成21年度大分県看護協会研修会，大分市，2009.7
- 岡崎 寿子 簡単な理科実験，大分県立看護科学大学公開講座，大分市，2009.5

## 影山 隆之

- 職場のメンタルヘルス～管理監督者の役割，大分県職員平成21年度マネジメント研修，大分市，2009.4
- 働く人のメンタルヘルス：管理監督者の役割，大分県市町村職員研修協議会平成21年度新任課長級研修，大分市，2009.7
- 職場のメンタルヘルスと自殺予防，大分産業保健推進センター平成21年度第9回産業医研修，別府市，2009.7
- 大分県の自殺の現状と市町村における自殺対策の取組，平成21年度大分県市町村自殺対策担当課長会議，大分市，2009.7
- 警察業務に就く人の心の健康－管理監督者の役割，警察共済組合大分県支部管理監督者メンタルヘルスセミナー，大分市，2009.7
- 職場のメンタルヘルス，大分県中部産業保健センター「働き盛り層のメンタルヘルスセミナー」，大分市，2009.8
- 大切ないのち～自殺を防ぐためにできること，平成21年度豊肥地域自殺対策講演会（朝地町），豊後大野市，2009.8
- メンタルヘルス～心の健康確保，平成21年度大分市課長級メンタルヘルス研修，大分市，2009.8
- 大切ないのち－自殺を防ぐためにできること，平成21年度豊肥地域自殺対策講演会（三重），豊後大野市，2009.9
- 本県の自殺の実態と対策～実態調査から見えたもの，平成21年度 県・市町村障がい福祉担当職員研修会・障がい児（者）施設等職員研修会，大分市，2009.9
- 「ぼけ」予防をはじめましょう，平成21年度第6回姫島村高齢者教室，姫島村，2009.9
- 健康づくりと休養・睡眠，日出町健康運動普及推進員養成講座，日出町，2009.11
- 快眠と心の健康，平成21年度大分県計量協会研修会，大分市，2009.11
- 重荷を負う人に声をかけるには－地域の見守り・相談役にできること，平成21年度豊肥地域自殺対策実践研修会（地域の見守り・相談役編），豊後大野市，2009.12
- 自殺予防のためにケアマネ・介護職・看護職など対人援助職が知っておくべきこと，平成21年度豊肥地域自殺対策実践研修会（対人援助職編），豊後大野市，2009.12
- 自殺の現状と市町村における自殺対策の取組み，平成21年度中津市自殺対策人材養成研修，中津市，2010.1
- 自殺は減らせる死－地域で始める自殺予防，豊後大野市自殺対策講演会，豊後大野市，2010.1
- 女性のメンタルヘルス，玖珠町中央公民館平成21年度第5回女性のための教養講座，玖珠町，2010.1
- 自殺は減らせる死－現状と市町村における自殺対策の取組み，日田市自殺対策庁内学習会，日田市，2010.1
- 自殺は減らせる死－現状と市町村における自殺対策の取組み，第1回宇佐市自殺予防対策研修会，宇佐市，2010.2
- 病院職員のストレスマネジメント，大分県立病院平成21年度接遇研修会，大分市，2009.2
- 働く人のメンタルヘルス，平成21年度国東市役所・国東市教育委員会職員研修会，国東市，2010.2
- 自殺を減らすために私たちができること，平成21年度由布市市民講演会こころの健康講座，由布市，2010.3

## 河野 梢子

- 教育実践能力の向上に向けて～フィジカルアセスメントの教授法を学ぶ～，平成21年度看護師等学校養成所専任教員再教育研修会，大分市，2009.7
- フィジカルアセスメント1，平成21年度大分県看護協会研修会 ジェネラリスト I，大分市，2009.8
- フィジカルアセスメント1，平成21年度大分県看護協会研修会 ジェネラリスト I，大分市，2009.11

- 桜井 礼子 大学の看護教育、自己啓発、臨床実習指導者講習会、大分市、2009.5  
看護管理研究の活用、大分県看護協会セカンドレベル教育課程、大分市、2009.11  
看護教育のあり方と課題、大分県専任教員研修、大分市、2009.8
- 定金 香里、天尾 豊 きみはわかるかな？舌の感覚の不思議、大分県理科・化学懇談会主催 「夏休み子供サイエンス2009」、大分市、2009.7
- 佐藤 みつよ 簡単な理科実験、大分県立看護科学大学公開講座、大分市、2009.5
- 佐藤 弥生 訪問看護過程、平成21年度 訪問看護研修ステップ1、大分市、2009.6  
高齢者施設等における看取りケア、平成21年度社会福祉施設介護職員中堅研修会、大分市、2009.11
- 品川 佳満 データ解析入門、西別府病院 看護部看護研究研修、別府市、2009.10  
看護研究の基礎、西別府病院 看護部看護研究研修、別府市、2009.4  
データ解析入門、鹿児島大学 医学部保健学科 公開講座、鹿児島県、2009.10  
情報テクノロジー、大分県看護協会 認定看護管理者（セカンドレベル）教育課程、大分市、2009.10
- 関根 剛 訪問看護ステップI「面接技術」、大分県看護協会、大分市、2009.5  
カウンセリングの理論と実際、大分県看護協会、大分市、2009.7  
苦情に対するコミュニケーション、大分療育センター、大分市、2009.10  
苦情に対するコミュニケーション、大分療育センター、大分市、2009.11  
相談員活動のモラル向上について、いのちの電話全国研修会分科会、和歌山市、2009.11  
相談対応の基本、大分県警察学校、大分市、2009.6  
犯罪被害者とは何か、紀の国被害者支援センターボランティア養成講座、和歌山市、2009.6  
早期援助団体とは、紀の国被害者支援センターボランティア養成講座、和歌山市、2009.6  
直接支援員としての心構え、紀の国被害者支援センターボランティア養成講座、和歌山市、2009.6  
事例検討、紀の国被害者支援センターボランティア養成講座、和歌山市、2009.6  
被害者支援の倫理、紀の国被害者支援センターボランティア養成講座、和歌山市、2009.7  
支援者のストレスとサポート、紀の国被害者支援センターボランティア養成講座、和歌山市、2009.7  
同行プランの作成と検討、全国被害者支援ネットワーク九州沖縄ブロック研修会、宮崎市、2009.7  
ロールプレイ（電話対応）、全国被害者支援ネットワーク全国研修会、東京都、2009.9  
情報交換（共通カリキュラム担当）、全国被害者支援ネットワーク全国研修会、東京都、2009.9  
認知行動療法・ケース検討（1）、大分保護観察所、大分市、2009.12  
認知行動療法・ケース検討（2）、大分保護観察所、大分市、2009.12  
認知行動療法・ケース検討（3）、大分保護観察所、大分市、2010.1  
被害者の心理と全国の動向、大分県弁護士会、大分市、2009.6  
被害者と法、中央大学法科大学院、東京都、2009.12  
相談者の気持ちにそった電話対応について、大分市保健所、大分市、2009.5  
コミュニケーション技術、大分市保健所ヘルスボランティア講座、大分市、2009.12  
スクールセクハラ防止と具体的方法、大分県教育庁人権同和教育課、大分市、2009.7  
学校の内外での事件・事故後の心のケアについて、大分県高等学校教育研究会養護教諭部会、大分市、2009.6  
師長が現場で求められるコミュニケーションスキルリーダーシップとカウンセリングスキル、福岡県民主医療連合師長研修会、福岡市、2009.9

教員のコミュニケーション技術の向上，専任教員再研修，大分市，2009.8  
 学生のコミュニケーション能力の向上（3），専任教員再研修，大分市，2009.8  
 スクールセクハラのおよぼす影響，大分県教育庁人権同和教育課，中津市，2009.7  
 スクールセクハラのおよぼす影響，大分県教育庁人権同和教育課，大分市，2009.8  
 スクールセクハラのおよぼす影響（2），大分県教育庁人権同和教育課，大分市，2009.8  
 被害者を取りまく状況，大分被害者支援センター直接支援員研修，大分市，2009.10  
 被害者等基本法・支援制度を学ぶ，大分被害者支援センター直接支援員研修，大分市，  
 2009.11  
 被害者の声をきく，大分被害者支援センター直接支援員研修，大分市，2009.11  
 自殺予防のための相談技術ー日常の小さな悩みの支援から，別府市福祉保健部，別府市，  
 2009.1  
 教職員のメンタルヘルスー苦情への関わり方，中津市学校保健大会，中津市，2010.2  
 こころの健康作りー日常の小さな悩みへの相談，臼杵市生涯現役部保険健康課，臼杵市，  
 2010.2  
 自殺予防のための相談技術ー日常の小さな悩みの支援から，国東市役所市民健康課，国東  
 市，2010.2  
 自殺の現状と身近なメンタルヘルス，国東市役所市民健康課，国東市，2010.2  
 自殺の現状と予防のための連携，津久見市自殺対策ネットワーク会議，津久見市，2010.2  
 自分を知る演習，鹿児島被害者支援センター研修会，鹿児島県，2010.3  
 自分に気づく，大分被害者支援センター直接支援員研修，大分市，2009.3  
 自助グループの意義と方法，大分被害者支援センター直接支援員研修，大分市，2009.3  
 大分県内における出動報告，消防庁メンタルサポートチーム派遣事例検討会，神戸市，  
 2009.3  
 体験C R T，大分県こころの緊急支援研修会，大分市，2010.3  
 行動計画の策定，大分県こころの緊急支援研修会，大分市，2009.2  
 指導者としての技法（1），NPO 全国被害者支援ネットワーク コーディネーター研修  
 （中期），東京都，2010.2  
 調査研究の読み方，NPO 全国被害者支援ネットワーク コーディネーター研修（中期），  
 東京都，2010.2  
 プレゼンテーションⅠ，NPO 全国被害者支援ネットワーク コーディネーター研修（中  
 期），東京都，2010.2  
 プレゼンテーションⅡ，NPO 全国被害者支援ネットワーク コーディネーター研修（中  
 期），東京都，2010.2  
 つぐないの気持ちをはぐくむ指導，人吉農芸学院，人吉市，2010.3  
 つぐないの気持ちをはぐくむ指導，人吉農芸学院，人吉市，2009.12

#### 高波 利恵

禁煙について，禁煙講話，大分市，2010.1  
 第19回研究発表会講評，別府市看護職研修会，別府市，2010.2

#### 高野 政子

「たんの吸引の基礎」「たんの吸引の実際」，平成21年度第2回医療的ケア研修，大分市，  
 2009.8  
 「経管栄養の基礎」「経管栄養の実際」，平成21年度第3回医療的ケア研修，大分市，  
 2009.8  
 小児の緩和ケアとQOL向上に向けて，平成21年度市民公開緩和ケアセミナー，大分市，  
 2009.6  
 アウトドアにおける応急手当，平成21年度自然体験活動リスクマネジメント研修会，豊後  
 高田市，2009.7  
 保育所における看護と健康管理，平成21年度保育所健康・安全保育研修会，大分市，  
 2009.7  
 学校における応急処置，高教組養護教諭部夏季学習会，大分市，2009.8  
 「医療的ケア」に関する研修会ー導尿と熱中症について，大分県立大分養護学校教員研修  
 会，大分市，2009.8  
 思春期の体と心の話，大分県立日出暘谷高校保健講話，日出町，2009.12  
 高齢化社会における小児医療と看護，大分県立西高等学校出前講座，大分市，2009.10

- 田中 佳子  
 フィジカルアセスメント，平成21年度大分県看護協会研修会ジェネラリスト1，大分市，2009.8  
 フィジカルアセスメント1，平成21年度大分県看護協会研修会ジェネラリスト1，大分市，2009.11  
 教育実践能力の向上に向けて～フィジカルアセスメントの教授法を学ぶ～，平成21年度看護師等学校養成所専任教員再教育研修会，大分市，2009.7
- 田中 美樹  
 「たんの吸引の基礎」「たんの吸引の実際」，平成21年度第2回医療的ケア研修，大分市，2009.8  
 「経管栄養の基礎」「経管栄養の実際」，平成21年度第3回医療的ケア研修，大分市，2009.8  
 病をもつ子どもの認知とこころの発達，平成21年度大分県小児在宅ケア研修会，大分市，2009.11  
 研究の進め方，「看護のつどい」 社団法人大分県看護協会日田・玖珠・九重地区，日田市，2010.3
- 津隈 亜弥子  
 教育実践能力の向上に向けて～看護学生の看護実践能力の向上を図る～，平成21年度看護師等学校養成所専任教員再教育研修会，大分市，2009.8
- 藤内 美保  
 フィジカルアセスメントI，天心堂へつぎ病院研修，大分市，2009.5  
 フィジカルアセスメントII，天心堂へつぎ病院研修，大分市，2009.5  
 フィジカルアセスメントI，大分県看護協会第1回訪問看護研修ステップI，大分市，2009.5  
 フィジカルアセスメントII，大分県看護協会第2回訪問看護研修ステップI，大分市，2009.5  
 事例によるフィジカルアセスメント，大分赤十字病院 新人研修，大分市，2009.6  
 実習指導計画・実習指導案，大分県看護協会 実習指導者講習会，大分市，2009.6  
 呼吸器系フィジカルアセスメントI，大分医療センター 新人研修会，大分市，2006.6  
 呼吸器系フィジカルアセスメントII，大分医療センター 新人研修会，大分市，2009.7  
 看護研究の基礎，大分県看護協会教育研修，大分市，2009.7  
 フィジカルアセスメント，別府中村病院看護師研修会，別府市，2009.7  
 循環器系フィジカルアセスメントI，大分医療センター 新人研修会，大分市，2009.7  
 フィジカルアセスメント，湯布院厚生年金病院看護師研修会，由布市，2009.7  
 フィジカルアセスメントコース，大分県医務課主催看護教員再教育研修会，大分市，2009.7  
 フィジカルアセスメント，大分県看護協会 教育研修，大分市，2009.8  
 循環器のフィジカルアセスメントII，大分医療センター 新人研修会，大分市，2009.8  
 医療面接，アルメイダ病院 看護師研修会，大分市，2009.9  
 フィジカルアセスメント，別府医師会研修，別府市，2009.9  
 フィジカルアセスメント，鶴見病院看護師研修会，別府市，2009.9  
 チーム医療，認定看護管理者制度ファーストレベル教育課程，広島県広島市，2009.9  
 看護に必要な検査の知識，大分県看護協会 看護力再開発講習会，大分市，2009.10  
 看護過程と看護記録，大分県看護協会看護力再開発研修会，大分市，2009.10  
 消化器系のフィジカルアセスメント，アルメイダ病院研修，大分市，2009.11  
 循環器系のフィジカルアセスメント，アルメイダ病院研修，大分市，2009.11  
 フィジカルアセスメント，別府中村病院看護師研修会，別府市，2009.11  
 呼吸器系のフィジカルアセスメント，アルメイダ病院研修，大分市，2009.11  
 フィジカルアセスメント，大分県看護協会 教育研修，大分市，2009.11  
 学生と向き合う実習指導，アルメイダ病院実習指導者研修会，大分市，2009.12  
 フィジカルアセスメント：基本技術と呼吸器系，大分県豊肥地区新人看護職員研修会，豊後大野市，2010.1  
 NANDA看護診断の概要，大分県立病院看護師研修会，大分市，2010.3

林 猪都子

助産師教育課程，平成21年度大分県看護協会実習指導者講習会，大分市，2009.5  
今を大切に生きる，性教育，大分県立津久見高等学校，2009.7  
第2次性徴，性教育，大分市立三佐小学校，2009.10

伴 信彦

医療放射線に関するリスク評価，大分大学医学部平成21年度放射線業務従事者教育訓練講習会，由布市，2009.5  
放射線による人体影響の最近の話題：LNT仮説からLNTモデルへ，日本原子力研究開発機構東海研究開発センター核燃料サイクル工学研究所教育講演，茨城県，2009.6  
医療放射線に関するリスク評価，大分赤十字病院放射線診療従事者教育訓練，大分市，2009.7  
論文の書き方，認定看護管理者制度セカンドレベル教育課程，大分市，2009.9  
小論文の書き方，大分県看護協会平成21年度准看護師研修会，大分市，2009.10

平野 亙

特別支援学校に期待すること ―障がい児の生きる力を育てるために―，大分県教育委員会 平成21年度特別支援学校新任教員研修，大分市，2009.4  
福祉における権利擁護 ―権利としての自立，大分県社会福祉介護研修センター 県・市町村福祉担当新任職員研修会，大分市，2009.5  
発達障がいのある子どもの理解と支援，大分県教育委員会 平成21年度発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業に係る幼稚園、小・中学校管理職研修，大分市，2009.5  
医療をめぐる人権，大分県 市町村人権同和問題啓発担当者・職員研修担当者研修会，大分市，2009.6  
保護者が教師に期待すること ―障がい児の生きる力を育てるために―，大分県教育センター 平成21年度初任者研修「児童生徒理解」(特)，大分市，2009.6  
発達障がい児の未来のために ―専門職に寄せる親の願い―，大分県 平成21年度発達障がい者支援専門員養成研修，大分市，2009.6  
障がい者の権利と自立支援，大分県のぞみ園職員研修会，由布市，2009.6  
安全教育とリスク・マネジメント，大分県看護協会 保健師・助産師・看護師実習指導者講習会，大分市，2009.6  
学校と保護者の連携 ―発達障がいのある子どもの理解と支援，大分県教育庁平成21年度第3回特別支援教育コーディネーター専門研修，大分市，2009.7  
発達障がいのある子どもの理解と支援，豊後大野市小中学校教頭会 第1回全員教頭研修会，豊後大野市，2009.8  
子どもたちの生きる力を育てるために ―発達障がい児の特性理解と支援，中津市立沖代小学校PTA人権教育講演会，中津市，2009.9  
発達障がいのある子どもの理解と支援，大分県立宇佐養護学校校内研修会，宇佐市，2009.9  
生存権と社会保障 ―権利としての「自立支援」，平成21年度豊後大野市人権研修推進担当者研修，豊後大野市，2009.10  
子どもたちの生きる力を育てるために ―発達障がい児の特性理解と支援，大分県教職員組合玖珠支部「障がい」児教育推進委員学習会，玖珠町，2009.11  
発達障がいのある子どもの見方、育て方 ―生きる力を育てるためのネットワーク，平成21年度文部科学省依嘱事業「発達障がいのある子どもの理解・啓発フォーラム」国東，国東市，2010.1  
祉サービス第三者評価基準の理解と判断のポイント，大分県福祉サービス第三者評価事業推進組織 平成21年度第三者評価調査者継続研修会，大分市，2010.1  
健康推進員が築く地域ぐるみの健康，大分市 西部地区健康推進員協議会交流会，大分市，2010.3  
発達障がいのある子どもの理解と支援，大分県特別支援学校教員指導力向上事業 大分県立宇佐養護学校中津校校内研修会，中津市，2010.3  
子どもたちが教えてくれたこと ―発達障がい児の生きる力を育てる―，第8回福祉フォーラムinけんなん，臼杵市，2010.3

福田 広美	看護について，大分日田高校アドバイザーレクチャーズ，日田市，2009.8 臨床実習指導のあり方，大分赤十字病院臨床実習指導者講習会，大分市，2009.10 院内研究の進め方，大分赤十字病院院内研究，大分市，2009.11
吉村 匠平	コーチングの基本的な考え方，国東地区学校保健会講演会，大分市，2009.6 気休めプログラム，アルメイダ病院職員研修，大分市，2009.7 プリセプター研修，アルメイダ病院職員研修，大分市，2009.7 学生指導力の向上に向けて ～学生との関係性の構築を図る～，平成21年度看護師等学校 養成所専任教員再教育研修，大分市，2009.8 リストカットについて，竹田養護学校学内研修，竹田市，2010.3 グループによる問題解決演習，アルメイダ病院初年次研修，大分市，2010.3
李 笑雨	International Nursing's Issues and Trends, International Nursing Seminar of Korea National Open University, Graduate for Nursing, Korea National Open University, Graduate for Nursing, 2009.10 What do we teach for International Nursing, Korea National Open University, International Nursing Seminar , Korea National Open University, Graduate for Nursing, 2009.10
研究指導	大分県立病院 小野 美喜、関根 剛 大分赤十字病院 福田 広美、定金 香里 国立病院機構 大分医療センター 高野 政子、岩崎 香子 国立病院機構 別府医療センター 梅野 貴恵、小嶋 光明 国立病院機構 西別府病院 品川 佳満、江藤 真紀 大分市医師会立アルメイダ病院 小野さと子、吉村匠平
学会その他の役員等	
赤星 琴美	大分市建築審査委員 大分市風俗関連営業建築物審議会委員
井伊 暢美	TEACCHプログラム研究会大分県支部
石岡 洋子	大分県母性衛生学会 庶務 事務局 大分県看護協会 助産師職能委員会 職能副委員長
石川 幸	大分県母性衛生学会幹事 事務局
市瀬 孝道	環境省黄砂問題検討会委員 大気環境学会九州支部会役員 独立行政法人・国立環境研究所、病態生理研究チーム：客員研究員 地域連携研究コンソーシアム大分コーディネイター
伊東 朋子	日本ALS協会大分県支部運営委員

- 稲垣 敦  
 日本体育測定評価学会 副理事長・将来検討委員長・研究助成委員  
 日本体育学会 編集委員  
 看護科学研究 編集幹事  
 大分県スポーツ学会 運営委員  
 大分県運動機能向上専門分科会 委員  
 Nスポーツ 顧問  
 熊本大学 非常勤講師  
 大分大学 非常勤講師  
 地域連携研究コンソーシアム大分 サブコーディネーター
- 乾 つぶら  
 大分県母性衛生学会事務局会計  
 日本助産師会大分県支部教育委員
- 岩崎 香子  
 日本骨粗鬆症学会評議員  
 腎性骨症(ROD-21) 研究会幹事
- 梅野 貴恵  
 大分県母性衛生学会理事(事務局副局長兼会計)  
 第6回大分県母性衛生学会総会・学術集会実行委員
- 岡崎 寿子  
 別府医療センター附属 大分中央看護学校 非常勤講師
- 小嶋 光明  
 放射線影響学会評議委員  
 京都大学放射線生物研究センター将来計画専門委員  
 放射線影響学会幹事
- 小野 美喜  
 大分県脳卒中懇話会世話人
- 甲斐 倫明  
 国際放射線防護委員会(ICRP)第4専門委員会委員  
 文部科学省放射線審議会委員  
 文部科学省放射線審議会基本部会部会長代理  
 内閣府原子力安全委員会専門委員  
 経済産業省資源エネルギー庁総合資源エネルギー調査会臨時委員  
 独立行政法人放射線医学総合研究所客員研究員  
 独立行政法人日本原子力研究開発機構  
 原子力基礎工学研究・評価委員会委員  
 国連科学委員会国内対応委員会委員  
 日本リスク研究学会常任理事・編集委員会委員長  
 日本放射線影響学会幹事・評議員  
 日本医学放射線学会放射線防護委員会委員  
 日本歯科放射線学会防護委員会委員  
 九州大学非常勤講師
- 影山 隆之  
 日本精神衛生学会常任理事・編集委員長  
 日本自殺予防学会理事  
 日本学校メンタルヘルス学会運営委員  
 大分県自殺対策連絡協議会副会長  
 大分県地域福祉権利擁護事業契約締結審査会委員  
 豊後大野市自殺対策連絡協議会助言者

軽部 薫	大分県母性衛生学会 幹事 事務局庶務補佐
河野 梢子	ななせ生きがいクラブアドバイザー
桑野 紀子	大分市女性の健康支援対策事業企画・評価委員会委員
佐伯 圭一郎	日本民族衛生学会評議員 生涯健康県おおいた21推進協議会幹事
桜井 礼子	大分県福祉審議会民生委員審査専門分科会委員 大分地方労働審議会委員 大分県看護協会 セカンドレベル委員会委員 熊本保健医療大学認定看護師教育課程入試委員会委員
定金 香里	大分県理科・化学懇談会 幹事 大気環境学会誌 編集委員
佐藤 みつよ	別府医療センター附属 大分中央看護学校 非常勤講師
品川 佳満	別府医療センター附属 大分中央看護学校 非常勤講師
関根 剛	大分市男女共同参画審議会 会長 社団法人 大分被害者支援センター 理事 NPO 全国被害者支援ネットワーク 研修検討委員会 副委員長 大分いのちの電話 スーパーバイザー 紀の国被害者支援センター 評議員 内閣府 民間被害者支援団体におけるボランティア養成研修（入門編）DVD教材 作成 業務に係る技術審査会 審査員 消防庁緊急時メンタルサポートチーム メンバー 大分県臨床心理士会広報担当理事 内閣府 民間被害者支援団体におけるボランティア養成研修（入門編）DVD教材作成協 力者 大分県こころの緊急支援チームメンバー
関屋 伸子	第6回大分県母性衛生学会・総会・学術集会実行委員 大分県母性衛生学会理事 平成21年度第32回大分県看護研究学会実行委員 大分市「女性の健康支援対策事業」子宮がん、乳がん検診意識調査 事業業務委託 学内副 責任者
高野 政子	大分県小児保健協会副会長 理事 九州小児看護教育研究会 理事 日本看護研究学会九州・沖縄地方会役員
津隈 亜弥子	第6回大分丘の上病院スポーツデイ補助 第30回大分県少年の船看護師

- 藤内 美保 第41回日本看護学会（成人看護Ⅰ）準備委員会委員  
大分県医療費適正化推進協議会委員  
ウズベキスタンJICA教育改善プロジェクトワーキンググループ
- 林 猪都子 大分県母性衛生学会 副会長（事務局長）  
大分市女性の健康支援対策事業企画・評価委員  
第6回 大分県母性衛生学会学術集会 実行委員  
ウズベキスタン看護教育改善プロジェクト 母性WG  
平成21年度大分県助産師確保連絡協議会委員
- 伴 信彦 Fifth International Symposium on Radiation Safety and Detection Technology  
(ISORD-5), Organizing Committee Member  
厚生労働省 疾病・障害認定審査会 原子爆弾被爆者医療分科会 臨時委員  
放射線影響協会 国際放射線防護調査検討委員会専門委員（IAEA/RASSC担当）  
国連科学委員会国内対応委員会委員  
日本保健物理学会企画委員
- 平野 互 福岡大学法科大学院非常勤講師  
医療事故防止・患者安全推進学会 理事  
大分県発達障がい研究会 理事  
大分県人権尊重社会づくり推進審議会 副会長  
大分県地域・職域連携推進部会 委員  
大分県特別支援連携協議会 委員  
大分県発達障がい者支援センター連絡協議会 委員  
大分県福祉サービス第三者評価事業推進組織 第三者評価基準等委員会 委員  
大分健生病院 倫理委員会 委員  
九州大学病院 心臓移植外部評価委員  
別府発達医療センター 安全対策等審議委員会 委員  
大分県福祉サービス第三者評価事業推進組織 第三者評価基準等委員会 専門部会 部会長  
大分県発達障がい者支援センター連絡協議会 発達障がい者療育専門員養成研修運営委員会委員
- 福田 広美 実習指導者講習会運営委員
- 宮内 信治 大分県立芸術文化短期大学 非常勤講師
- 吉田 成一 東京理科大学薬学部客員准教授  
日本アンドロロジー学会 評議員  
精子形成・精巣毒性研究会 評議員  
環境省PM毒性文献レビューワーキンググループ委員
- 吉村 匠平 発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業に関わる専門家チーム委員  
平成21年度学習障がい児等支援体制整備事業に係る専門家チーム委員

李 笑雨

Korean healthy Family Movement  
Korean Hospice & Palliative Care Academic Society  
Korean Stress Research Academic Society  
Korean Nursing Education Academic Society  
Guild of, Korean National University Women's Professor  
Korean Hospice & Palliative Nurses Association

## 11 助成研究

### 市瀬 孝道

ナノマテリアルの遺伝毒性及び発がん性に関する研究

国立がんセンター研究所（厚生労働省がん研究助成金：化学物質リスク研究推進事業）

### 市瀬 孝道

ヒトがん発生に関わる環境要因及び感受性要因に関する研究

国立がんセンター研究所（厚生労働省がん研究助成金 19指-1）

### 市瀬 孝道、吉田 成一

黄砂感染症の健康影響評価を目指した実験的パイロットスタディ

日本学術振興会 科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究

### 市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

中国大陸から風送された汚染黄砂による呼吸器疾患の増悪と日本におけるその疫学調査

日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究（B）

### 市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

風送ダスト（黄砂・バイオエアロゾル）の飛来量実態解明に基づく予報モデルの精緻化と健康・植物生態影響評価に関する研究（FY2009－FY2011）

国立環境研究所（環境省地球環境総合推進費・H21地球環境問題対応型研究課題）

### 市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

ユズ抽出液を活用した「携帯型」抗アレルギー食品の開発

大分県産業創造機構（平成21年度地域資源活性化基金助成金事業）

### 乾 つぶら

妊娠中から産後の母親と乳児の睡眠覚醒リズムに影響を及ぼす要因に関する研究

日本学術振興会 科学研究費補助金 若手研究（スタートアップ）

### 江藤 真紀

高齢者の転倒発生に関わる視知覚と姿勢制御に影響する下肢筋力と柔軟性の検討

日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究（C）

### 甲斐 倫明、伴 信彦

日本人ボクセルファントムによるCT診断時の臓器線量計算とWEBシステムの開発

日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究（C）

## 甲斐 倫明

がん放射線診断における患者被ばくの実態調査と放射線誘発がんのリスク推定に関する研究  
厚生労働省がん研究助成金

## 影山 隆之

交替勤務者への生活習慣指導による睡眠改善プログラムの開発と勤務時の眠気への効果  
日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)

## 影山 隆之

定年退職と再雇用が労働者のメンタルヘルスに与える影響に関する産業看護学的研究  
日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)

## 坂口 隆之

非定常マルコフ空間点過程モデルにおける統計的推測  
日本学術振興会 科学研究費補助金 若手研究 (B)

## 桜井 礼子、小野 美喜、高野 政子、藤内 美保、林 猪都子、宮崎 文子

国際医療研究委託費「途上国における看護領域人材のマネジメント戦略に関する研究」  
国立国際医療センター

## 定金 香里

好乾性真菌がダニ抗原誘発性アトピー性皮膚炎の発症と増悪に及ぼす影響  
日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)

## 関根 剛

看護現場における犯罪被害者への対応の実態およびニーズの検討  
日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)

## 関屋 伸子、宮崎 文子、林 猪都子

マタニティ入浴用品の開発  
地域連携研究コンソーシアム大分平成21年度「学・学連携型研究助成事業」

## 高波 利恵

小規模事業所労働者に対する集団的健康増進活動の支援方法の検討とその評価  
日本学術振興会 科学研究費補助金 若手研究 (B)

## 高野 政子

インターネットを使った病院内学級と地域の学級を結ぶシステムの開発  
日本学術振興会 科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究

### 藤内 美保

生理学・バイオメカニクスの視点から分析する効率的な力発揮の介助動作の開発

日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)

### 藤内 美保、市瀬 孝道、吉田 成一

病院での臥床患者の足洗浄に関する技術の開発と応用

地域連携研究コンソーシアム大分 「学・学連携型研究事業」

### 藤内 美保、市瀬 孝道、吉田 成一

ベビーリーフの摘採後マイクロバブル洗浄に関する技術の開発と応用

地域連携研究コンソーシアム大分 「学・学連携型研究助成事業」 (分担)

### 福田 広美

外来化学療法を受ける乳がん患者の倦怠感マネジメントに向けたモニタリング指標の開発

日本学術振興会 科学研究費補助金 若手研究 (B)

### 吉田 成一

大気中の微小粒子 (CAPS) の胎仔期曝露が出生仔の肺のアレルギー増悪に与える影響

日本学術振興会 科学研究費補助金 若手研究 (B)

## 12 各種研究・研修派遣

### 宮内 信治

派遣先 イギリス バーミンガム大学 高等英語研究センター

研修期間：7月29日～8月27日

バーミンガム大学英語学部所属の教育陣および元所属教員と面会し、英語の談話音調分析と物語朗読内の直接話法における音調変化の分析について意見交換を行い、関連する知見と示唆を得た。今回の研修報告は、3月24日に行った。

### 石田 佳代子

派遣先 スウェーデン王国 リンショーピン大学・大学病院・災害医療教育研究センター (KMC)、ストックホルム南総合病院・災害医療センター (DEMC)

研修期間：10月5日～11月5日

災害医療の先進国であるスウェーデンにおける災害医療教育の実際を学ぶために、リンショーピン大学・大学病院・災害医療教育研究センター (KMC)、ストックホルム南総合病院・災害医療センター (DEMC) などを訪問した。当該施設における見学および関係スタッフへのインタビューを通して、災害対応を行う職種の役割分担の確立とそれに基づく職種間連携が、効率的な災害対応につながることを学んだ。その研修内容については、3月24日に学内の報告会で報告した。

### 乾つづら

派遣先 国立病院機構小倉医療センター、杏林大学医学部付属病院、済生会宇都宮病院、国立病院機構舞鶴医療センター、社会医療法人愛仁会千船病院

研修期間：6月～8月にかけて1施設3時間程度ずつ。

院内助産システムについて、各施設の取り組みや工夫、導入時の困難理由などについて聞き取りと設備や環境の見学を行った。院内助産システム(院内助産と助産外来)を円滑に運用するには、助産師の意識(意欲・自覚・責任感)が基盤にあり、ハード面のシステムづくりや助産師のスキルアップ、そして人員配置と連携等の具体的な課題はこの上に積み上がってくるものだというのを学んだ。

この研修に関して、平成22年4月6日学内で報告を行った。

### 津留 英里佳

派遣先 国立循環器病センター

研修期間：8月3日～8月6日

最新の医療、看護技術、管理システムを学び、実習指導を含む教員としての指導力を向上させることを目的とし、大阪府吹田市にある国立循環器病センターにて研修を行った。心臓移植や補助人工心臓患者の看護や管理方法、心臓リハビリテーションの実際、心臓系集中治療室で行われている看護の実際を見学、実施することにより、最新の看護や管理システムについて学ぶことができた。研修内容については、来年度の講義で学生にフィードバックする。また今回の研修内容は平成22年4月6日の学内報告会で報告を行った。

## 関屋 伸子

派遣先 東京都庁、東京都消防局、東京都母体救命対応総合周産期母子医療センター（昭和大学病院、日本赤十字社医療センター、日本大学医学部附属板橋病院）、杏林大学付属病院

研修期間：9月7日～9月17日

平成21年年3月から東京都では妊婦搬送拒否問題をきっかけとしてリスクの高い妊婦を必ず受け入れる「母体救命対応総合周産期母子医療センター」（通称・スーパー総合周産期センター）体制を取っている。そのため、国内研修として周産期母子医療システムの現状を知り、周産期母子医療において助産師が担う役割について理解することを目的として東京都に行った。まず、東京都庁と東京消防局を訪問し、東京都の東京都周産期母子医療システムの概要学んだ。その後、スーパー周産期センターである三施設（昭和大学病院、日本赤十字社医療センター、日本大学医学部附属板橋病院）を訪問し、各施設における周産期母子医療センターの産科・NICUを見学した。さらに、杏林大学付属病院において、搬送コーディネーターである助産師に同伴し臨床における助産師が担う新たな役割と医師および他職種との連携を学んだ。この研修内容について平成22年4月6日学内で報告を行った。

## 塩月 成則

派遣先 福田総合病院、京都大学地域医療研究センター

研修期間：12月24日～12月27日

上記施設にて地域医療の実際を学ぶために研修を行った。京都大学に勤務する医師の外来参加見学、生理検査の見学実施などを通してプライマリケアの実際を指導いただいた。今後の看護学実習、看護の自律教育への示唆となる研修となった。今回の研修報告は、3月24日に行った。

## 津隈 亜弥子

派遣先 滋賀医科大学医学部付属病院

研修期間：3月29日～4月1日

目的を、1) リエゾン精神看護専門看護師の役割の実際を知る、2) 優れた精神医療の実際を知る、3) 今後の看護教育のあり方、看護教員としての継続教育について考えを深めるとした。主に、精神看護専門看護師のリエゾナーズとしての活動の実際に同行し、精神看護の知識や学びを深めた。また、精神科神経科病棟看護師、臨床教育者とのディスカッションを通して、看護教育のあり方、看護教員としての自己研鑽について示唆を得た。なお、研修の詳細については、4月6日に報告会を行った。

## 13 学外研究者の受入

本学教員 甲斐 倫明

受入者 小野 孝二

所属：大分県立三重病院 放射線科

研究テーマ：文科省科研費「日本人ボクセルファントムによるCT診断時の臓器線量計算とWEBシステムの開発」

受入期間：平成21年4月1日～平成22年3月31日

本学教員 甲斐 倫明

受入者 和泉 志津恵

所属：大分大学工学部知能情報システム工学科 准教授

研究テーマ：低線量放射線の生体影響に関する実験データへの統計的手法の研究

受入期間：平成21年4月1日～平成22年3月31日

本学教員 市瀬 孝道

受入者 賀 森

所属：中国医科大学大学院博士課程

研究テーマ：環境中の様々なダストやナノ粒子の生体影響

受入期間：平成21年4月1日～平成22年3月31日

## 14 職員名簿

1 専任教員					
生体科学	教授	菅野 公浩	H21.7.31	退職	
	准教授	安部 眞佐子			
	助教	岩崎 香子			
生体反応学	教授	市瀬 孝道			
	准教授	吉田 成一			
	助教	定金 香里			
健康運動学	教授	稲垣 敦			
人間関係学	准教授	吉村 匠平			
	准教授	関根 剛			
環境保健学	非常勤助手	佐藤 みつよ	H21.4.1	採用	
	教授	甲斐 倫明			
	准教授	伴 信彦			
	助教	小嶋 光明			
健康情報科学	教授	佐伯 圭一郎			
	講師	品川 佳満			
	助教	坂口 隆之	H21.4.1	採用	
言語学	教授	G.T.Shirley			
	准教授	宮内 信治			
	非常勤助手	岡崎 寿子	H21.4.1	採用	
			H21.8.31	退職	
	非常勤助手	渡邊 寿子	H21.9.1	採用	
基礎看護学	教授	志賀 壽美代	H21.4.1	採用	
	准教授	伊東 朋子			
	助教	秦(小野) さと子			
	助手	塩月 成則	H21.4.1	採用	
	臨時助手	神取 美恵子			
看護アセスメント学	教授	藤内 美保			
	講師	石田(濱田)佳代子			
	助教	河野 梢子			
成人・老年看護学	助手	田中 佳子	H21.4.1	採用	
	准教授	小野 美喜			
	講師	松本 初美	H21.4.1	採用	
	講師	福田 広美			
	助教	井伊 暢美			
	助手	江月 優子			
小児看護学	助手	津留 英里佳			
	教授	高野 政子			
	講師	田中 美樹			
母性看護学・助産学	助手	薬師寺 綾	H21.4.1	採用	
	教授	林 猪都子			
	准教授	梅野 貴恵			
	講師	関屋 伸子			
	講師	乾 つぶら			
	助教	軽部 薫	H22.3.31	退職	
	助手	石岡 洋子			
	助手	樋口(石川) 幸	H21.7.1	採用	
	助手	姫野 綾	H21.5.18	採用	
			H21.6.13	退職	
精神看護学	教授	影山 隆之			
	講師	大賀 淳子			
	助手	津隈 亜弥子			
保健管理学	教授	草間 朋子			
	教授	桜井 礼子			
	准教授	平野 互			
	助教	高波 利恵			
	助手	佐藤 弥生	H21.4.1	採用	

地域看護学	准教授	江藤 真紀		
	講師	赤星 琴美	H21.4.1	採用
	助手	濱崎 美津子	H22.3.31	退職
	臨時助手	下山 優恵	H21.4.1	採用
国際看護学	教授	李 笑雨		
	助手	桑野 紀子	H21.4.1	採用
看護研究交流センター	助手	小野 朱美	H22.3.31	退職
	臨時助手	寺嶋 和子	H21.9.1	採用
			H22.2.28	退職
	事務職員	岡本 香代		

## 2 非常勤講師

宮崎 文子	地域助産活動論
西 英久	哲学入門
二宮 孝富	法学入門
西園 晃	微生物免疫論
大杉 至	社会学入門
日高 貢一郎	言語表現法
宮本 修	音楽とこころ
澤田 佳孝	美術とこころ
谷口 一郎	母性病態論
肥田 木 孜	母性病態論
堀永 孚郎	母性病態論
宇津宮 隆史	母性病態論
戸高 佐枝子	母性看護援助
福元 満治	保健医療ボランティア論
吉河 康二	看護と遺伝
上野 桂子	母性病態論
足立 恵理	文化人類学入門
劉 美貞	韓国語
宮崎 文子	生殖看護学特論、助産学、看護教育特論
伊東 弘樹	臨床薬理学特論
卜部 省吾	病体機能学特論
井上 敏郎	小児疾病特論
岩松 浩子	小児疾病特論
飯田 則利	小児疾病特論
山田 健治	診断・診察学特論
法化 陽一	診断・診察学特論
山本 明彦	診断・診察学特論

## 3 事務職員

### ○事務局

	事務局長	安部 陽子	H21.4.1	採用
	統括部長	後藤 一昭	H22.3.31	転出
・経営企画グループ	課長補佐	錦戸 正	H21.4.1	転入
	副主幹	徳永 一裕	H21.4.1	転入
	主任	神崎 正太		
	事務職員	成安 恵美	H21.4.22	採用
・財務グループ	主幹	高橋 秀也	H22.3.31	転出
	主事	小野 麻梨子	H21.4.1	採用
	事務職員	釘宮 裕和		
	事務職員	池邊 尚美		
	事務職員	大島 紅	H21.11.30	退職
	事務職員	吉野 真純	H22.1.18	採用
・教務学生グループ	課長補佐	柳井 幸雄	H21.4.1	転入
	副主幹	佐藤 恭子	H22.3.31	転出
	副主幹	梅木 満長	H22.3.31	転出
	保健師	菅野 信子	H21.4.1	採用
	事務職員	児玉 美穂	H21.4.1	採用
・図書館管理グループ	主査	小野 永子	H22.3.31	転出
	非常勤職員	牛島 聡子	H21.4.1	採用
	非常勤職員	大久保 圭	H21.4.1	採用